
Blue Rose

無名の霧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Blue Rose

【Nコード】

N7955B

【作者名】

無名の霧

【あらすじ】

高校生の一条神楽は交通事故に遭う。その日を境に彼女は不思議な夢を見始める。恋人を失い、色あせていく現実。恋人の面影を見せる、愉快的な夢。次第に彼女は現実に絶望し、夢を羨望する。現実を蝕んでいく夢。流れ出す彼女の闇。恋人の奔走と魔術師の思惑。アリス。猫。そして、抑止力。夢と現が等しくなったとき、少女は何を見るのか。（大幅に編集しました。夢パートと基本線以外の部分の設定がかなり変わりました）

神楽 「始まりの交通事故」

現 The Heroine's Side

一、

季節は冬。

二月の十三日、月曜日。今年は例年に比べ、降雪量が少なかったが、ここにきて突然、屋外は一面の銀世界。今年は雪が降らないと決め付け、車のタイヤを替えていなかった家が多く、ここ二、三日の交通量は少なめである。

午後四時。週明け最初の学校が終わり、生徒たちが校門を抜けてくる。小学生ならば、この一面の銀世界に大喜びするだろうが、高校生ともなれば、歩きづらい、くらいにしか感じなくなっている。雪に鬱々としているのか、それともただ足元を確認しながら歩いているか、はたまた百円玉が落ちていないか探しているか、生徒たちは若干つつむき加減である。

高校から開放されたのだから、もう少し楽しそうにしてもいいものである。残念なことに、彼らは一週間後に期末試験を控えている。テンションも低くなるというものだ。当然、これからどこかに遊びに行こうなどという会話は存在せず、会話も少ない。

彼らが進学校の生徒でなければ、もう少し気楽だったろうが、残念ながら、彼らの高校は県で一番の進学校であり、当然期末テストの難易度も高い。教科によっては、センター試験を軽く凌駕するものもある。そんなテストを作ることには何の意味があるのか、教師にも考えがあるのだろうが、生徒たちからは嫌がらせとしか取られない。

そんな嫌な行事の前で、かつ雪のせいで足元が危ういとなれば、自然つつむき加減になるだろう。

しかし、そんな中でもよりいつそうつつむき加減で歩いている生徒がいる。

腰くらいまである長い黒髪を強風になびかせて歩く少女は、一条神楽。きれいに整った顔立ち。おっとりとした印象を受けるが、実際は決しておっとりとした感じではない。むしろ行動的なタイプである。成績優秀、容姿端麗であり、さらにやさしいときている。そんな理想的な女性の一種なのだが、手を出す男子生徒はいないのに、はちよつとした理由があり、決して高嶺の花とあきらめているわけではない。

さて、どうしてこの少女がうつむいているのかといえば、今日が彼女にとって特別な日であるからに他ならない。

平成十五年二月十三日、彼女は家族を失った。

交通事故だった。買い物に出かけていた彼女の両親、妹 一条神奈 に一台のトラックが激突した。直前、父親が娘をかばったため、一条神奈は一命を取り留めるが、両親は即死。一条神奈は緊急手術を受けたが、意識が戻ることはなく、三日後に死亡。彼女にとっては、十三日に三人の家族を全て喪失したことに変わりはないかった。

その後、一条神奈の身体を、医療研究に使用したいと医師が願い出て、彼女の祖父祖母が了承した。彼女としては、そんなことは断じて許せなかったが、医師に説得され、さらに祖父祖母の涙で、拒否しきれなくなってしまった。結局、一条神奈の身体は医療研究に使われることになった。彼女はその後妹を医師に渡してしまったことを悔いたが、月日が流れるに連れて、「妹の死を無駄にしないため」という言葉に落ち着いた。

彼女がうつむいて元気がないのは、そういう理由がある。両親の喪失を思い出すことも大きな要因だが、それよりも、妹を医師に渡してしまったことに対する、言いようもない後悔に押しつぶされていた。

いつもとは違う道を通る。今日は特別な日であるため、彼女はあ

る店を目指す。

目指すは、花屋。二年前からはじめたことなのだが、彼女はこの日に、食卓に花を飾ることにしている。本当なら、今年は三回忌を執り行わなければならないところだが、それは行われない。彼女には祖父祖母以外親戚がいなかったためである。だからといってやらなくていいのかといわれれば、そうではないのだから、年老いた祖父祖母に負担をかけたくないという少女の心遣いによるものである。そんなこともあって、追悼代わりに、花を食卓に飾ることにしている。

ちなみに、彼女は一人暮らしである。祖父祖母は少し離れたところに住んでいる。祖父祖母は彼女を引き取ろうとしたが、彼女が断り、一人暮らしを始めたのである。

少女が目的の花屋に入る。

いらっしやいませという声に迎えられ、少女は笑顔を返す。その笑みにはいくらか杞憂が含まれているように見えたが、状況を知らなければそんなことには思い当たらないだろう。

店員に目的の花を頼み、包装してもらう。

彼女が選んだのは、青い薔薇。近年品種改良によって作り出された人工花。花言葉は「不可能」。「不可能」に何かを感じたのだろうか、少女は毎年それをこの日の食卓に飾っている。

会計を済ませ店を出る。ありがとうございましたという声に送り出される。少女はまた振り返り、笑みを返した。

店を出ると、目の前に壁が迫っていた。

何だろうと思う少女だが、答えはすぐに分かった。

トラックだった。

道路から外れたトラックが自分に向かって突進してきている。クラクションも鳴らしていないところを見ると、ドライバーは眠っているのだろうか。

嫌に世界がゆっくりと動いているな、と彼女は人事のように世界を見る。

「神楽！！ 危ない！！」

瞬間、突き飛ばされた。

いや、抱きかかえられたのか、とにかく、彼女はトラックの通る軌道から大きく外れた。

自分を抱えているのは学生服を着た少年で、自分のためにこんな命知らずな行動をする少年を、少女は一人知っている。

せつかく買った「不可能」が宙を舞っている。

そう思ったかと思うと、彼女の世界はいつもの速度を取り戻す。

代わりに、「不可能」がナンバープレートに吸い込まれた。

少女と少年は勢い余って地面に激突した。

Interlude 「神罰症候群」

現 The Magician's Side

一、

平成十五年、八月。例年をはるかに上回る最高気温をたたき出し続けていた異常な一週間の終わりに、その「異常」は起きた。

異常気象に引き続き発生したその「異常」は、すでに「怪奇」の類であつた。

「神の到来」。ニュースや新聞でその言葉が多発された。あらゆるマスメディアがその事件を取り上げ、あらゆる人々がその事件に食いついた。

その事件 怪奇 の詳細はこうだ。

平成十五年八月十三日、日本全土において、原因不明の精神障害が多発した。その被害総数は二百を超えるとされ、単なる精神障害ではなく、「集団」がつく大惨事であつた。不思議なことに、精神障害を起こした人々はあらゆる地域の住民であつた。それも、一つの地域に複数の被害者が出たのではなく、あらゆる地域で、しかも数人ずつが、精神に障害をきたした。また、不思議なことに、彼らは重度の精神障害を受けながら、会話はしっかりと成立していた。医師の問いかけにも十分すぎるくらい正確に答えることができた。しかし、彼らは確かに精神障害を負っていた。

そう。彼らはいわば、「多重人格者」となっていたのである。具体的には、本人の知らない間に、本人だけの秘密を口走る。やましいことがあれば、その証拠となるもののありかを口走る。その症状は日に日に悪化し、最後には、元の人格が消滅し、その人間の無意識、いふなれば「本心」という人格が表に出る。「本心」に人格を飲み込まれた被害者たちは、延々と独白にも取れる独り言をわめ

き散らすのだった。

さらに不思議なことに、これはカウンセリングにあたっていた医師たちが気づいたのだったが、精神障害を負った被害者たちは、全員、一人残さずに犯罪者であった。人格の飲まれた彼らの独白は、主に自らの罪に関するものであり、医師が発見、警察に報告したことに始まる。

調査の結果、彼らの独白は全て真実であり、その証拠、裏づけも彼らの口から得ることができた。罪の程度の差はあれども、この事件の被害者が皆、未逮捕の犯罪者たちであったことが分かり、世間はよりいっそう混乱した。

これが世に言うところの「神罰症候群」である。

この事件の後、世界各地でこの一件を引き起こした「神」を恐れ、自首する犯罪者が続出し、さらには犯罪の発生件数もぐっと少なくなつた。

また、法王庁を始めとする、各地のキリスト教会では、「神の到来」であると声高らかに宣言し、権威が復活した。

同じように、イスラーム教や仏教信者も増加したことは言うまでもない。

もちろん、科学者たちは、そんな「神」を信じるわけにはいかず、被害者から入手したあらゆる生命情報、被災地、尤も、それは全国各地に存在し、しかも同居していた家族にはその症状が現れなかったため、ごく限られた空間、例えば被害者の部屋などであり、そこに生命的異常を引き起こす何かがあるとは、到底考えられないなどからあらゆるサンプルを入手し、あらゆる方向から調査にあたった。

しかし、結局は分からず仕舞いだった。病原体でもなく、化学物質でもなく、遺伝子上の問題でもなく、ましてや寄生虫の類でもないとなると、彼らにはどうしようもなかった。そんな不思議な症状、被害者が一人でも厄介だというのに、被害者が多数、それもほぼ同時に別々の場所で発生したとなつては、もはや原因の可能性は、「

神」、もしくは神がかり的な「何か」であるとしか考えられなくな
ってしまった。

「神罰症候群」同時多発から三年。その後は一度も「神」が犯罪
者を列挙することはなかったが、いまだに犯罪件数が少ないのは、
この事件の影響であると見て間違いない。

狭間 「消え行く者」

狭間 The Murderer's Side

一、

暗い。

昏い。

冥い。

つまりは、 闇。

そうだ。此処には闇しかなくて、つまり、全体が闇だ。

何もない、誰もいない……いや、「私」がいるか。でも、いないようなものだ。だって、誰もいないなら、「私」がある必要はないのだから。

他者あつてこそその「自我」なのだから、他者のいない此処にあるのは、「無我」だろう。

くだらない。

こんなことを考える必要がどこにある？ 他者がなくて、「自我」がなくて、「無我」だけがある。「無我」に思考は不要だ。ただ、流されていればいいのだ。

身を任せよう。

そうすれば、あとは、休止状態の脳が勝手に世界を作ってくれる。そう、今はまだ、世界ができていない。もう少し待てば、世界ができて、そこに連れて行かれる。

そう、もう一つの世界 夢 に連れて行かれる。

だからここは、何もない。世界を作る準備中の空間だ。

さて、もてあました時間を使って思考しよう。といっても、もちろん無駄なことだが。なぜなら、この世界は、要はパソコンで言うところの、一時メモリーだ。電源を消せば、消えてしまう。夢がで

きて、そこに入ったときには忘れてしまっただろう。

だから、無駄だ。

しかし、どうせ無駄な時間なんだ。無駄に裂いてもいいだろう？
では。

こんな格言を聞いたことがある。

人生は夢、それ以外に何がある

ルイス・キャロルの言葉だったか。しかし、彼でなくとも、よく聞く話だ。

これを、足りない頭をフルに使って考えよう。

確か、脳は三層ある。外に行くほど、高度な脳だとか。では、現実はこの第三層目の「夢」だしよう。となれば、私たちの言うところの「夢」というやつは、第二層目の「夢」なんだろう。

では、第一層目、特に何の思考もしない、生きるためだけの脳本能が見る「夢」はどんなものなのだろうか。

まあ、もともと、「夢」は人間だけが見る高度な精神活動で、それを見るのに、第三層が働いているということは明らかであるが。

まあ、つまり、私が言いたいのは、概念的な話だ。

現実を「夢」とおくなら、眠っているときに見るアレは、「夢」の「夢」。そして、より自我や本能が反映された世界だ。しかし、それでいて社会性を持っているのが、我々の「夢」だ。

では、そんなテーマなんか完全に無視した、本能の世界というものは、さらにその「夢」ではないのか。と、そういうことだ。

闇を光が蝕み始める。

だんだん「私」が戻ってきた。それにあわせて、この思考も消えていく。きつとこの先の世界　夢　には、「私」だけでなく物も、人も、　いや、人語を解する不気味な何かの可能性もあるが　出てくるだろう。

つまりは、「私」が必要で、社会性の必要な、あの煩わしい、低

次元な世界が展開されるわけだ……。

光が闇を蹂躪し、浸食していく。

下らない思考も終わりだ。

さあ、夢に出かけよう。

神楽 「シュレディンガーの猫」

夢 The Heroine's Side

二、

「……ス。……リス。 アリス」

誰かが誰かを呼んでいる。と、そこまでしか思考が働かず眠り続ける少女。

声の主は、少女に向けて話しているようだが、少女は無視を決め込むことにして眠り続ける。

「アリス。アリス。アリス。アリス」

うるさいわ。しかし少女は起きない。

そもそも、アリスって誰よ。などと思いながら、しかし起きたくないの、精一杯聞き流す少女。

アリスって人も、これだけ呼ばれているんだから答えてあげればいいのに！ ついには、その責任はアリスという、少女とは見ず知らずの相手が背負うことになった。

と、そこで、声が自分に向かって発せられていると、少女は気づいた。

仕方がない、とりあえず起きようか。少女はそう決めたのだが、それを知らない声の主はアリスの名を呼び続ける。

「アリス。アリス。アリス。アリス。アリス。アリス。アリス。アリス。アリス。アリス。アリス。アリス。アリス。アリス。アリス。アリス。アリス。アリス」

延々とアリスと発し続ける声の主に、少女は怒りを覚えた。

起きるってば！！ そう思っている間も、アリス・コール 尤も、まったく感情らしいものは感じないが は鳴り続ける。

「もう！！ うるさいわ！！」

少女はがばつと跳ね起きて、声の主を怒鳴りつける。

少女が声の主を見つけた。

猫だった。

黒くて、細長い感じの、人語を解する猫だった。……尤も、このアリス・コールを人語というのかは、怪しいところだが。奥行きが感じられず、どこか陰のような猫である。

少女はその奇怪な猫に、特に驚くこともなく詰め寄る。眉間にしわを寄せて。

「何なのよ、貴方！ 人のことアリスアリスって、私はアリスじゃないわ！」

少女は奇怪な猫に向かってまくし立てる。

「おはよう、アリス」

猫は何事もなかったかのように、少女を覗き込む。

明らかに異常な光景ではあったが、少女は寝ぼけているのか、はたまたこの世界が「夢」であることを認識しているのか、奇怪な猫に詰め寄る。

「アリスじゃないってば！ 大体、貴方こそ何なのよ」

「僕は、シュレディングアの猫だよ、アリス」

少女はまたアリスと呼ばれたことに、顔を真っ赤にしている。

しかし、猫は少女の怒りもどこ吹く風、こう言った。

「いいじゃないか、アリス。この世界では君はアリスなんだから、名前の一つや二つ変わったって、大差ないよ」

これにはさすがの少女も絶句する。まあ、猫の言っていることは正論で、此処は彼女の「夢」なのだから、名前なんてどうでもいいのは確かだ。

しかし、少女にはどうしても納得いかないところがある。どうしても、自分の夢に言い負かされるのだろうか、少女は頭を抱える。

「まあ、いいわ。アリスということにしておいてあげる。で、どうして私を呼んでいたの？ 何か用事？」

そんな問いかけに猫は目を丸くして首をかしげる。

「どうしてといつても、此処は君の夢なんだから、君が起きないことには始まらないよ、アリス」

「……確かにそのとおりね。私の夢のクセに私より冷静なのが気に食わないけど、仕方ないわ。そうね、それじゃあ、これからどうするの？」

さすがに自分の夢だけあって、少女の順応も早かった。さっきまでの不機嫌はどこに消えたのか、楽しそうだわ、などとはしゃいでいる。

「ウサギを追いかけてよう、アリス」

「……はい？ ウサギ？ どうして？」

いきなりわけの分からないことを言われた少女はかわいらしく小首をかしげる。猫は無表情に、

答える。

「だって、アリスだから」

「アリスって、ああ、『不思議の国のアリス』ね。そういえば、ウサギを追いかけていたわ。よし、それじゃあ、白ウサギを追いかけてみよう」

我ながら意味不明な夢だと思いつつも意気込む少女。

「彼は捕まえちゃいけないんだよ」

今度は少女が首をかしげる番だ。せっかく状況が飲み込めてきたのに、追いかけるウサギは捕まえてはいけないらしい。

「……えっと。どういうこと？」

「知っているはずだよ。だって、此処は君の夢なんだから」

そんなことを言われたって、分からないものは分からない。少女の機嫌がまた斜めになりかけたところで、それは通過した。

白いウサギが駆けていく。

黒のタキシードに赤い蝶ネクタイをしたウサギが、駆けていく。

どこことなく丸みを帯びつつも人型をした、よくぬいぐるみにありがちなフォルムだ。真紅の瞳に、大きな足。靴は履いていないようだ。

「ほら、ウサギだよ。捕まえよう」

「駄目なんじゃないの？」

「捕まえるんだよ。ほら、逃げていくよ」

猫の言葉ではつとする。言っている意味はよくわからないし、どうしてそうしなければいけないのか、さっぱり分からないが仕方ない。

少女はその奇怪なウサギを捕まえることにした。

「ほら、行くわよ」

少女は駆け出す。長くしなやかな黒髪が扇のように広がり、少女の美しい顔立ちと合わせてみると、なかなか凛々しく、可憐に見える。

それに猫もついていく。少女の斜め後ろぴったりにくっついていくのだが、どういうわけか、足は動いていない。こう、影のようにぴたりとくっついて、滑っているようだ。

少女は猫の奇怪な動きを目にしてはいたが、自分の「夢」だからとあえて割り切ることにした。

少女は決して遅くはなかったが、ウサギの走行速度の方がはるかに速かった。

少女よりも歩幅ははるかに小さいはずなのに、ウサギは見る見るうちに遠く離れて見えなくなってしまう。少女は息を切らせて走るが、まったく追いつかない。遂にはウサギの姿は見えなくなってしまう、少女はそこでその場に座り込んだ。

「はあ、はあ、はあ、はあ……。何なの、あのウサギ。早すぎるわよ」

「逃げちゃったよ、アリス」

息を荒げている少女とは反対に、猫は息も切れておらず、先ほどまでと変わった様子はない。動物はこのくらい平気なのだろうか。いや、そもそも走ってなかったよな。少女は涼しげにたたずんでいる猫を恨めしげに見つめる。

どうやって移動していたのか。そんなことを聞いてもまたわけの

分からないことを言われるに決まっている。分からないなら、最初から聞かないほうが気楽である。

とは言っても、このままではウサギを逃がした責任を追求され続けかねない。仕方がないから、少女は話題を変えることにした。

「ねえ、私がアリスで、あれがウサギなら、貴方はチェシャ猫よね？」

どう見てもこの世界は、ルイス・キャロルの小説「不思議の国のアリス」だ。猫にウサギにアリスだから、間違いないと少女は確信する。となれば、この猫はチェシャ猫なのだ。小説の中でアリスをサポートしながら白ウサギを追いかける、不思議な猫のはずだ。

しかし、少女の期待は裏切られる。

「違うよ。僕はシュレディングーの猫だよ」

「いいのよ、誰の猫かなんて。貴方の名前よ。きっとシュレディングーさんが飼っているチェシャ猫なのだよ」

そもそも「チェシャ猫」は一匹しかいないわけだから、この推論はまったく間違っているわけだが。

「違うよ。シュレディングーは僕の親だよ。で、名前はシュレディングーの猫。それ以外にないよ」

少女は腕を組み、眉間にしわを寄せて首をかしげる。いかにも考えてやるけど分かりません、といった様子だ。

「シュレディングーさんに産み出されたの？」

「そうだよ」

「一応聞くけど、シュレディングーさんって、人間よね？」

「そうだよ」

「嘘ね。人間は猫を産まないわ」

「本当だよ」

「嘘よ」

いくら夢の中とはいえ、これだけは認められない。

人間は猫を産まない。当然のことだ。夢の中だからといって、そんなことがあつてたまるか。少女は徹底抗戦の構えだ。

対して猫は、一応自分の存在を否定されかけているので、これは聞き流そうとしない。

「そうだ。じゃあ、アリス。僕の産み方を教えてあげるよ」

「嘘よ。……は？」

「だから、アリスにも僕を産ませてあげるよ」

呆けていた少女の顔が、突如真っ赤になる。

さて、思春期真っ只中の少女の脳内妄想暴走中。

産ませる？ この、猫を？ つまり、孕ませる？ 猫を？ いやいや、孕むってことはつまり、ああいうことをするわけで……。嫌よ、絶対！！ 猫なんかと！！ セクハラもいいとこだわ！！ でもでも、これは私の夢だから、それは私が心の奥底で望んでいること？ 嘘嘘嘘！！ 猫を孕みたいなんて思ったことないわ！！ そもそも、ア、アレをしたってすぐに産まれるわけじゃないし……。ひどい夢だわ。早く醒めて。でもでもでも、これは私の夢だから

「アリス？」

「ひゃあー！！」

少女は真っ赤になって飛び上がる。

少女はこの不埒者の猫を叩き潰してやろうと思ったが、それを実行する前に猫が誤解を解いた。

尤も、猫は誤解されていることを知らなかったが。

「産んでみるかい？ 簡単だよ？」

「お断りよー！！」

「でも、簡単だよ？ 蓋の付いた箱の中に猫とラジウムと粒子検出器と青酸ガスの発生装置を入れるだけだから」

「いやよー！！ どうして、猫なんかと……はい？」

「だから。蓋の付いた箱の中に、猫とラジウムと粒子検出器と青酸ガス発生装置を入れれば出来上がりだよ。シュレディンガーはそうやって僕を産み出したんだ」

「……………」

少女は自分が勘違いしていたことに気づき、さらに顔を朱に染める。それはもうトマトのように真っ赤になっていて、それを悟られまいとうつむいているが、無駄なことだろう。

もしも人間がいたら、一目で見抜くだろうし、猫はそれに関してまったく関心がなかったからだ。

「へ、へえ……。物騒なミックスね……」

というか、間違いなく猫が死ぬんじゃないかしら？ というか、シュレディングーさん、動物愛護協会に叩かれますよ？ 人差し指で額を押さえる少女に猫は問いかける。

「ねえ、アリス。猫はどうなると思う？」

答えるまでもないと、少女は即答する。

「死ぬでしょう？」

しかし、猫はさらに問う。

「どうして？」

少女はこれまた当然とばかりに答える。

「ラジウムって、放射性物質でしょ？ それで、検出器と青酸ガス発生装置の組み合わせなんだから、ラジウムの原子崩壊と同時に青酸ガスが発生して、猫は死ぬでしょ？」

「よく知っているね」

「まあ、……？」

そこで少女はふと気づく。

どうしてそこまで知っているのか。放射能検出器と青酸ガス発生装置がつながてあるとは聞いていない。そもそも、ラジウムが放射性物質ということすらどうして知っているのか分からない。

しかし、知っているのだから、どこかで聞いたことがあるのだろう。おそらく、そういうことを吹き込んでくる輩が近くにいたのだと、そこで少女の思考を邪魔するように猫が問うた。

「ねえ、本当に猫は死ぬのかな、アリス？」

「え？」

「ラジウムが原子崩壊を起こすかどうかは、分からないよね」

「……」

「量子論的には、原子の状態というのは、観測された瞬間に決定されるんだよ。つまり、」

「ラジウムを観測するまで、崩壊していたかどうかは分からない？」

「ちよつと違うよ。分からないんじゃない。つまり、ラジウムを観測するまで、原子崩壊を起こしているかどうかは、決まっていないんだ」

「つまり、どういうこと？」

「箱を開けるまで、ラジウムが原子崩壊を起こしたかどうかは決まっていない。空けた瞬間、二つのどちらかが起こったことになる。それも、確率論で決定されるんだ」

「……」

少女は思考を止めた。はつきり言つて、意味が分からない。この猫は何が言いたいの？ 答えは猫がすぐに答えた。

「つまりね。箱を開けるまで、猫の生死は決定されていないんだよ。開けるまで、ラジウムが原子崩壊している世界　つまり、猫が死んでいる世界　と、ラジウムが原子崩壊していない世界　つまり、猫が生きている世界　の二つの世界が存在しているんだよ。そして開けた瞬間に、世界はそのどちらかの世界に収束するんだ。それも、確率論だね。つまり、確率的に、半分は死んでいるけど、半分は生きている猫が、箱の中に入っているんだね」

少女の記憶の奥底に、確かにそんな記憶はあった。

ラジウムの状態が決定していないなら、放射能が検出されたかどうかも決定されていない。つまり、青酸ガスが発生されていたかどうかも決定されておらず、つまりは猫が死んでいたかどうかも決定されていない。

だから、猫は死んでいるし、生きているんだよ、とかあの物理オタクがいていたような……。しかし、少女はそこで当然の疑問に気づく。

「でも、おかしくない？　生死が半分ずつ同居している猫なん

て、普通に考えてありえないじゃない」

「おかしいね。そのおかしさを証明するために産まれたのが僕だよ」
「思い出した」

今まで靄のかかっていた記憶が鮮明に思い出される。

「そうだよ。原子の状態は観測された瞬間に決定されるとした量子論に対して異論を唱えたのさ。原子の状態なんて、その瞬間に決まっても、ミクロの世界の些細な問題で、マクロ　つまり、それよりも大きい世界　に影響は及ばさないとしていた彼らに、シュレディンガーが出した、問いかけだよ。だって、この猫には量子レベルの変化が、生死を分けるくらいの大問題なんだから。そうでなくとも、箱を開けるまで二つの世界が箱の中に存在していることになっってしまう。そして、開けた瞬間に世界がどちらかに収束する。本来ありえないことだよ。この箱は、ミクロの変化がマクロに影響を及ぼす箱なんだよ、思い出した？　アリス」

「ええ。昔読んだことがあるわ」

「よかった」

しかし、少女は更なる疑問を見つけてしまう。

「ねえ、貴方がシュレディンガーの猫というのは分かったけど、どうして貴方が『不思議の国』の案内人なの？」

「だって、此処は『物理の国』だから」

「……はい？」

「だから、此処は『物理の国』なんだよ。『不思議の国』でも、『鏡の国』でもない、君の国なんだよ」

頭が痛いわ。どうして、アイツ好みの世界を私が夢で見なければいけないのよ。冗談じゃないわ。私、物理苦手なの。

少女は頭を抱えて座り込む。

そんな少女に猫は優しく声をかける。

「さあ、ウサギを追いかけて。ほら、あそこにウサギの穴があるよ」

うなだれながら少女は問う。

「ウサギの穴って、もしかしてワームホール？」

「よく知っているね」

少女は崩れ落ちた。やはり、この世界はどこまでも物理ネタで構成されているのだわ……。

「さあ、アリス。ウサギを追いかけよう。僕は、君の猫。生死不明の、どこにでもいて、いない猫だよ」

少女は不思議な猫について、ウサギの穴をくぐっていった。

神楽 「ニュースの占い」

現 The Heroine's Side

三、

ピピピ、ピピピ、ピピピ……。

けたたましいアラームが鳴り響く。

黒髪長髪の少女はアラームのスイッチを叩きつける。

むくりと上半身を起こす。おかしい夢のせいでいまひとつ寝た気がしない。しかし、あの不可解な状況から救い出してくれた目覚まし時計はある意味救世主でもある。

なにしろ、どこまでも頭の痛くなる夢だ。どうして夢でまで物理について考えなければならぬのだろうか。物理苦手なのに。

しかし、今日くらいは許せる気がする。

自分が今生きていられるのも、あの物理好きの少年のおかげなのだから。その少年に助けてもらったのだから、少年好みの夢を見るくらい、笑って許してあげなければなるまい。

まあ、どうせ夢見るなら、少年が出てきて欲しかったところだが、贅沢は敵だ。

結局、昨日はトラックに轢殺されそうになったところを、命知らずな少年が助けてくれたのだ。下手したら自分も轢殺されるところだったというのに、横から駆けて来て、私を抱き抱えて道にダイブした。しかし、よくアクション映画にあるような格好良い助け方はなかった。映画なんかだと、助ける相手を地面にぶつけないように自分を地面に向けて、体勢を回転させるものだ。そうあるべきなのだが、少年はあろうことか少女を下に押し倒した。しかも、抱きかかえるというよりは、半ば体当たりをしてきたような感覚だった。頭をコンクリートに強打して、死ぬかと思った。

まあ、しかしそれでも、運動が苦手　　というか嫌い　　な少年が、命をかけて飛び込んできてくれたことは純粹にうれしかったし、その勇氣は、助け方が不恰好ということを差し引いても十分感謝と賞賛に値する。

その少年というのが、物理マニアなのだ。「相対性理論」やら「量子論」やら「超紐理論」やら「ビックバン理論」やら「光量子仮説」やら……まあとにかくそんな本を読み漁っている。

はつきり言つて、意味が分からないが、本人もよく分かつていないらしい。大体感覚的に分ければ満足とか言っているが、私はそんな本は我慢できない。さらに、少年はそんな本を読み漁っている割に、物理の成績はあまりよくない。平均点よりも少し低いくらいだ。少年曰く、「理論物理学は読んでいて面白いんだけど、高校物理は面白くない」ということだ。まったく、物理をなめているとしか考えられない。

お人よしの典型例で、できる範囲のことなら頼まれればなんでもする。できないことなら、できる人間を探してあげるほどお人よしである。

実は、彼と付き合っていたりする。ほかの男子生徒が寄つてこないのもそのせいだ。せい、といったら失礼か。まず、私が寄せ付けない。

少女はベッドから出て着替えを済ます。今日は火曜日だから制服に着替える。

きつと今頃少年は「はあ、学校に行くのは果てしなくだるいなあ」などと廃人じみたことを言っているに違いない。実際、学校でも「ああ、早く帰りたい」などと言っている。

そんな少年がトラックの前に飛び込んできたなんて今でもまだ信じられない。とは言いつつ、彼氏に助けられたのはうれしく誇らしく思ったりもする。今日はしっかりとお礼を言わなければ。

朝食にトーストとスクランブルエッグを作り、食卓につく。

少女はボーっとしながらトーストをかじり、コーヒーを飲む。ち

なみに彼女は甘党だから、砂糖とミルクを忘れない。少年はブラック派だから学校では「コーヒーにミルクなんて邪道だよ」なんて言うけれど、彼女が笑顔で「私の（買ってきた）コーヒーが飲めないの？」と問えば、あわてて飲み干す。

そんな日常の一場面を思い出し、自然と頬がほころぶ。

別に誰が見ているわけでもないが、照れ隠しにニユースをつける。「……それでは、今日の占いです」

まあ、今日はニユースという気分ではなかったので、占いはちよつとよかった。さてさて、私の運勢は？ コーヒー片手にテレビに振り返る。ちなみに少女はさそり座だ。

「……。さそり座の貴方は、今日は大きな失望を感じることでしょぅ」

なんて物騒な占いなんだろう。普通、当たり障りなく、まずまず、くらいには言うだろうに。

「ラッキーカラーはブルーです」

青か……。少女は身近に青がないか探すが、特に目に付くものは……。

あつた。食卓に「青い薔薇」。

何だ、身近にあるじゃない。しかも、占い見る前から目の前にあったなんて、ひよつとすると今日はいい日になるかも知れないわ。上機嫌になる少女だったが、ふと思いとどまる。

そもそも、今日は運勢最悪なのだ。ラッキーカラー一つでどうにかなるものでもないか……。しかも、私の持っているラッキーカラーは花言葉「不可能」。

「……なんというか。いろいろ不安だわ」

誰もいないが、こういうことはついつい口に出してしまう。心理的に、言葉に出すといくらか吹っ切れる。

さてさて、支度して学校行きますか。だるいけど。……駄目だわ。アイツみたいじゃない。まあ、とにかく昨日言いそびれたお礼を言わなければ。

支度を終え、家を出る。

自分しかないから、常に鍵をかける習慣ができている。少女の一人暮らしは危険なのよ。などわけの分からないうことを考えながら鍵をかける。

ふと、疑問に思ってしまった。それは禁忌の思考。

どうして、昨日お礼を言えなかったんだっけ？

涙が一筋、頬を伝った。

Interlude 「魔術に関する考察」

現 The Magician's Side

二、

Interlude

さて、魔術師というものをご存知だろうか。

簡単に言えば御伽噺に出てくる魔法使いだ。まあ、此処では裏の世界で広く使われている魔術師としておく。

魔術とは、本来そこに存在しない「もの」あるいは「こと」を意思の力でその場に具現するものだ。

それを、魔術を説明するにあたって、世界の基本法則について説明しよう。

大原則として、世界は意思の力で形成されている。

世界というのは意思の一つの集合体なのである。強い意志は具現する。魔術師でなくとも、感覚的に知っているだろう。もっとも身近な言葉を搜すなら、「努力は報われる」といったところか。

さらに噛み砕いて言うならば、世界というのは一つの意思の集合なのだから、その空間あるいはその概念を制御している意思を塗り替えるほどの意思があれば、世界は容易く形を変える。尤も、この世界を制御している意思は多くの意思の集合なのだから、それを個人の意思で塗り替えるなどということは不可能に近い。

ならば、どうするか。

それを可能にするのが、魔術であり、それを行使するのが魔術師である。

意思の力一つでは到底集合意識にはかなわない。ならば、自分の意思の集団意識への影響力を強化すればいい。あるいは、集団意識のプロテクトを突破する何かを自分の意思に付加すればいい。そうすることによって、世界を容易に書き換える。もちろん限界はある。限られた空間において、世界が崩壊しない程度の塗り替えしかできない。世界の法則を大幅に書き換えるような真似はできない。世界が集団意識でできているなら、集団の意思が、世界がそうあるように望んでいるということだ。逆に言えば、集団の意思が、世界が形を変えることを拒んでいるということ。不安定にして不確定、人間には不理解の世界を、理解できるレベルに集団でもって固定しているのだ。

いや、少し言葉の使い方を誤ったか。世界を構築しているのは、正確には集団意識ではない。真に世界を構築しているのは、集団無意識だ。よく考えれば分かる話だろう。日々、この世界に関し、この世界のあり方を強く願い続けている人間がどうか。少なくとも、私はそんな人間は知らない。なぜなら、人間はこの世界の本質、つまり世界は不安定で不確定、不理解であることを認識すると精神が崩壊するからだ。そうならないために、我々は言葉を使って互いにコミュニケーションをとっている。そうすることで、この不安定な世界を多くの仲間で共有することで、世界の有様を強固なものとしてきた。さらに言及するならば、この世界というのは、一つの読み取り方に過ぎない。世界に我々があわせているのだ。例えば。話が逸れてしまった。まあ、言いたいことは、我々はこの不可思議な世界を理解するために、集団を組むことによって価値観を共有すると同時に、無意識下で世界を自分たちの読み取りやすい形に、あるいは世界がこれ以上不可解にならないように、強く願い、その無意識が集合することで大きな力となり、世界を塗りつぶしているということだ。

さて、ここで集団無意識の力が二つ現れた。一つは世界の固定化。もう一つは、世界の変動の抑止。集団無意識は世界を我々の読み取

りやすい形に固定化し、それを変動させようとする危険因子を、全力を持って排除する。

この集団無意識を我々魔術師は「大いなる力」と呼んでいる。さらに、この危険因子の排除システムを「霊長の抑止」と呼んでいる。というのも、世界を構築する意思のほとんどが、我々「霊長」であるからだ。

ここで、我々魔術師にとって問題なのは、「霊長の抑止」である。意思の力で世界を塗り替える魔術師は彼ら集団無意識にとって危険因子なのだ。「大いなる力」を書き換えようものなら世界のあり方が根底から覆ってしまう。それを防ぐのが「霊長の抑止」だ。「霊長の抑止」は世界のあり方を大きく変えようとする魔術師 あるいはその他の要因 を力ずくで排除する。大いなる意思は具現する。この原則に従って、「霊長の抑止」も時には形をもつて危険因子を排除する。無論、この集団無意識の具現体に抗えるはずもなく、大きな魔術を行使した魔術師はことごとく死亡している。

そんな理由から、魔術師の行える魔術というのは、限られた空間で世界のあり方を大きく覆すもの出ないことが前提条件なのだ。

さて、魔術師が自らの意思に、集団無意識を突破する力を付加すると言ったが、なにを付加するのか。

我々はそれを魔力と呼ぶ。

簡単に言ってしまうえば力の塊だ。具体的には、世界に満ちている、意思を伝える伝導概念である。質量もなければ観測も不可能だが、確かにそこにあるものであり、我々の意思を伝導し、集団無意識に則って世界を構築しているのが魔力である。意思の媒介といってもいいだろう。

この魔力を我々は「マナ」と呼んでいる。人間では手を加えられない強大な力である。当然ではあるが、これを好き勝手にいじっては世界があり方を変えてしまう。そんなことは「霊長の抑止」が黙っていない。

ではこの「マナ」をどうやって使うのか。直接使えないなら、何

かに変換して使うしかない。自ら自由に使える状態にした「マナ」を、我々は「オド」と呼んでいる。世界の集団無意識を多量に含んだ「マナ」を、何らかの方法でろ過して何の意味も宿っていないただの意思伝導概念とする。そうすることで、魔術師は手に入れた「オド」に自らの意思概念を付加し、自らの意思概念の力を増幅させる。この「オド」による意思概念の強化で限定空間内における集団無意識に打ち勝ち、限定空間の世界のある一部に自分の意思を具現化させる。それが魔術である。

共通財産を奪って、それを自身の力にする。魔術師とは略奪者にして世界の構築者なのである。尤も、大それたことをすれば「霊長の抑止」に破滅させられるわけだが。

さて、この「マナ」の「オド」への変換をどうするか。大きく分けて二つある。一つは触媒を使って「マナ」をろ過する方法。強力な意思概念を伝導している「マナ」に干渉するために、強力な意思概念を持つている触媒を使って介入するのである。例えば、魔術書や宝石といったものがあげられる。集団無意識が世界のあり方に反映しているのならば、集団無意識レヴェルまで鍛えられた集団の願望、概念はやはり世界に反映されている。その一部としての魔術書や宝石だ。権威ある魔術書はそういった力があるものとされ、真に信仰している者、無意識下で「魔術書にはそういった力があつて欲しい」と願っている者は多く、やはりそれは反映される。また、古来より宝石には不思議な力が宿るとされてきた。真実かどうかは別の話として、それ自体が強固な概念であることに変わりはない。やはり、世界に反映される。つまり、集団無意識によつて、魔術書や宝石は固有の不可思議な力を得、「マナ」に介入する力を得ている。それら触媒を使って、「マナ」を「オド」に変換するのが方法の一つである。

もう一つの方法は、これが上位階級に存在する魔術師たちの常套手段だが、自身の身体を使って「マナ」を「オド」にろ過する方法である。

魔術師は自身の身体に特別な洗礼を施している。それらは「魔術回路」と呼ぶ。簡単に言えば、「マナ」の変換装置だ。簡単に言うも何も、それ以外に言いようがないのだが、ろ過機と同じで、そこに「マナ」を通すことでそこに付加された意思概念を取り除き、「オド」を生成する。本来触媒を用いて行うこの一連の動作を自身の身体で簡単に行えるのが「魔術回路」である。「魔術回路」は人によって多い少ないがあり、またそれを開いていない者が一般人である。一応、「魔術回路」は全ての人間が持っている。強い意志を持ったとき、世界に介入するためにそれが開かれ、「オド」を生成し、意思に付加し、世界を塗り替える。本来無意識下で行われるこの作業を、意識化で行うのが魔術師である。

つまり、魔術師とは集団の意思概念を伝導している「マナ」を「魔術回路」を使って「オド」に変換し、その「オド」を使って集団の意思概念を自らの意思概念で凌駕して限定空間の一部に自らの意思を具現する者である。

I n t e r l u d e o u t

ところで私は誰なのかといえば、やはり私も魔術師である。さて、昨日ちようどいい検体が手に入った。

確か、交通事故による意識不明者。身体に損傷はなく、トラックを避けた先で地面に激突して意識を失ったままだという。まさに、絶好の検体だ。

命刻 「異質な病室」

現 The Hero's Side

一、

冬森市県立総合病院、四階、四百六十八号室。

入り口のネームプレートには「一条 神楽」。

名前が一つしかないということは、つまりは、そこは個室である。視界一面純白の病室。そこに少女は眠っていた。

雪のように白い肌と、長くしなやかな黒髪。普段であるならば、風に舞って扇のように広がる黒髪も、今は少女とベッドの間に挟まれている。

「意識不明」。

少女の病状である。昨日から延々と眠り続けている。

昏睡状態ではあるが、高度な生命維持装置などは装着されておらず、ただ点滴と心拍数を表示するモニターがあるだけだ。

少女の身体にはなんら損傷はない。本来ならば、今頃五体ばらばらになって葬式でも始められているはずだった。つまり今頃焼却されているはずだった。その身体は、今なお健在で病室で看護されている。

昨日、少女のもとに一台のトラックが衝突しかけた。トラックがハンドルを切って少女を交わしたわけではないので、トラックは少女のもとに衝突したといえる。ただ、少女のもとに衝突したのであって、少女に衝突したわけではない。少女もトラックを避けようとせず、危うく跳ね飛ばされるところだったが、そこに偶然居合わせた少年が少女を突き飛ばし、実際には少年が抱きかかえて押し出したのだが、半ば体当たりのようなものだったので、突き飛ばしたとしておく。少女はトラックの起動からはずれ、九死に一生を

得た、はずだった。

ところが、少年に突き飛ばされた少女は後頭部をコンクリートに強打し、打ち所が悪かったのか、それからずっと昏睡状態である。助けた方の少年は、まったくの無傷であったが、少女の昏睡が相当堪えたらしく、昨日からベッドの隣で、眠り続ける少女の手を握り続けている。

少年は酷くショックを受けただけで、精神障害のレベルには達していなかったため、看護師等とのコミュニケーションは取れるが、断固として少女から離れようとしなかった。病院側も、少女がただの昏睡であったことから、しつこく少年を引き剥がそうとはしなかった。

そついうわけで、現在病室には一条神楽と彼女を助けた少年がいる。

少年 葛木命刻 は生気の抜けた目で少女を見つめる。

ほかに誰がいるわけでもないが、口を開く。

「……もう、一日が立つよ、神楽」

ほかでもない、昏睡を続ける少女に向けられた言葉は、しかし当然返ってこない。

彼は思考する。

どうして、こうなってしまったのだろうか。

自分は、彼女を救いたかっただけだというのに。

実際、彼女の前にトラックが迫っていたとき、身体が勝手に動いていた。自分の心配など、している余裕はなかった。それだけ、必死に彼女を助け出した、はずだった。

ただ、ただ助けたかっただけなのに。

それ以上、何も望んでいなかった。彼女を助けるためならば、自

分が死んでも……かまわなかった。

しかし、現実とは残酷なものだ。

ひよっとしたら、それが彼女の運命だったのでは？

「何を馬鹿な」

考えていて自分が情けなくなる。

こうなったのも、自分のミスだ。決して、運命などで済まされる問題ではない。

だがしかし、もしも世界が強制した運命というならば。

「僕は、この世界を許さない……」

そうだ。

こんな世界、彼女のいない世界など 見限ってもいい。そうだろう？ 必死に助けたというのに、結果として彼女が起きないならば、それまでだ。

直感というのだろうか、彼は少女がもう目覚めないと分かっていた。それでもなければ、たかだか一日で世界を見限ったりはしない。重ねて、彼は慎重な人間だ。それほどまでに早急な決断を下し、絶望するようなことはしない。

そうだ。彼女が起きないならば。

「この世界を、あきらめるのか？ いや、次の世界が用意されているなら、話は別だけど……そうもいかないか」

そもそも、彼女が起きないと誰が決めた？

いや、それはおそらく確定事項。理由は分からないが、おそらく間違いない。どうしてそう分かるかと聞かれれば、返答に困るが、間違いないはずだ。

では、どうする？ 考えろ、葛木命刻。

冷静に考えれば、答えはすぐそこにある。

このままで神楽が起きないのならば、どうにかするしかない。

「神楽……。また来るよ」

少年は立ち上がり、病室を出る。勿論、彼女を起こすために何かをするために。

何をするのか？ 何故だろうか、彼には向かうべき場所が分かっていた。

厳密には、分かっていたのではない。ただ、そう感じた。この異質な病室の空気を覆すには、やはり異質な空気を以ってしてしかありえないのだから。

少年に、少女が起きないと感じさせたそれは、病室の空気だった。実際には、空気ではなかったのかもしれない。そう、実際に彼にそう思わせたのは、「一条神楽の病室」という一つの閉鎖された限定空間。

そのような空間の異質さをよく知るものであれば、それを意図も簡単に説明できるのだろうが、少年はそういった人間ではない。故に、少年は、異質な空気と形容する。

つまり、その異質な空気が一条神楽を昏睡させており、それに対する異質な空気ですべて、彼女を助け出そうという考えにいたった。

ならば、することは一つだ。その、異質な空気を作り出せる人間を探し出せばいい。そんな人間を探すには、やはり異質な空気を追えばいいのだ。

神樂
「絶望」

The Heroine, s Side

四、

「そ、んな」

ばたん、と少女が崩れ落ちる。看護師たちが集まってきて、彼女の名を呼ぶが、崩れ落ちた少女の目は焦点を結んでいない。

ただ、無表情に虚空を見つめている。

冬森市県立総合病院、四階、四百六十八号室。

入り口のネームプレートには「葛木 命刻」。

ネームプレートが一つということ、そこは個室だった。

崩れ落ちた少女の前には、一つのベッドとそこに眠る少年がある。少年は特別高価な生命維持装置などはつけておらず、心拍数を計測する機械だけが装備されている。

「意識不明」。

少年は昨日より此処で眠り続けている。どうしてそうなったのか。それについては、そこで崩れ落ちている少女が最もよく知っている。少女の記憶にかかつていた霧が一瞬にして晴れる。視界が開けるように、彼女の思考が加速する。昨日の出来事が、一瞬にして脳裏をかける。早すぎる思考は、少女の精神にはきつすぎた。

昨日。学校帰りに花屋に寄った。花を買って、店を出て。そうしたら、トラックが目の前に迫っていて、そこに少年が駆け寄ってきて、自分突き飛ばすようにトラックの軌道から外し、そして少年自身もトラックを回避して、自分は地面に頭を強く打ち付けるだけですんだが、少年は、

！！

「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、
！！」

動悸が激しくなる。そうだ、自分は助かったが、少年は、少年は、

[illegible]

ひとしきり笑うと、少女は幽鬼のように音も無駄な仕草もなく立ち上がる。ベッドで眠り続ける少年に一瞥くれると、今度はくると、本当に影のように看護師たちに振り返り、微笑むと病室を出て行った。

その微笑みは、何か大切なものが欠けた、見るものを戦慄させる、恐ろしく、しかし悲しい笑みだった。

神楽 「色あせる現実」

現 The Heroine's Side

五、

病院を飛び出して、学校に向かう。時刻午前十時。勿論、遅刻であるが少女は気にしない。口元に笑みを作りながら歩く様子はどこか異様で誰も彼女に声をかけない。

そんな周囲の様子もまったく気にせず少女は歩く。

そんな調子で校門をくぐる。さすがにこの時間に登校してくる者は少女のほかにはいない。

校舎に入るとすぐに教師と鉢合わせした。授業時間なのだが、暇な教師もいるのかしら？　すると教師が声をかけてきた。

さすがに少女が異様だといっても、遅刻を咎めないわけにはいかないのだろう。見れば体育科の教師だ。……まったくうるさいのに出会ったものだわ。

「一条。遅刻だぞ」

そんなこと自分が一番よく分かっていますか？　まあ、悪いのは私ですし。とりあえず謝っておこうかしら。そう思って謝罪の言葉を口にする。

「すみません」

「どうしたんだ？　お前が遅刻なんて珍しいじゃないか」

どうでもいいでしょう。しかし、悪いのは私だし。適当な言い訳でも作っておくのがよさそうね。

「はい。寝坊しました」

「はあ？　まあ、次から気をつけなさい」

少女は軽く会釈してその場を立ち去る。勿論、自教室に向かう。その後、授業はただ聞いているだけで、すぐに放課後になった。

……勿論、教室に葛木命刻の姿は無かった。

神楽 「覚醒と殺戮」

現 The Heroine's Side

六、

下校中、ふと昨日の花屋が気になった。普通に考えたらあのトラックが突っ込んでいるはずだ。……店員は無事だったかしら？いろいろと考えるが、それよりは見に行つたほうが早い。

道を曲がると、その先に花屋がある。

やはり、花屋はなくなっていた。店を閉じたという意味ではない。文字通り、消失していた。花屋があつたはずのところは大きな穴が開いている。

……昨日、此処で私は命刻に助けられ、代わりに彼は眠りに付くことになった。此処にさえ来なければ……。

少女は自分でも驚くほどの黒い感情を抱いていた。過去を悔やんでいるだけではない、ということは少女も分かつていた。少女はあることを望んでしまったのだから。

恐ろしい感情を振り払うように少女は首を大きく左右に振る。

「ねえねえ、聞いた？ 昨日の事故のこと」

「ええ、聞いたわ。女の子がトラックに撥ねられそうになったところを男の子が助けたのよね？」

主婦が近くで話している。内容はほぼ間違いなく少女のことだ。当事者なのだから、特にその話には興味は無かったが、聞き捨てなら無い言葉が聞こえてきた。

「そうそう。でね、助けた男の子、意識不明なんだって！」

「え？ 助けた方が？」

「それがねえ、助けたのは良いんだけど、勢いあまって地面に頭から激突したんだって！」

「ええ！？」

「失礼だけど、おかしい話よね！」

「ちよつと笑えるわね」

ちよつと待つて？

何それ？ 何よそれ！？ 何なのよ！？ 可笑しい？ 笑える？
命刻のことよね？ 命刻は私を命がけで救ってくれたのよ？ 運動が苦手な彼が！ 自分が死ぬかもしれない恐怖を押し殺して！
必死で！ 必死で！ 必死で！ それを、それをそれを！ お前らはどうして笑うことができる！？ 命を投げ出して必死になった彼を、どうしてあざ笑うことができるっ！！ 許せない。許せない許せない！！ お前らなんか、お前らなんかお前らなんかっ！！

瞬間。少女の中の何かが弾けた。

少女の瞳が平生の光を失い、代わりに強く冷たい光が灯る。青白く、深淵のようなその瞳からはあふれ出す強い意志が感じられた。暗い暗い、強い意志があふれ出す。

あふれ出す意思是、破壊の衝動。

対象は主婦だけではない。この悲劇の現場そのもの。「この場所さえなければ」。先ほど封じ込めた黒い感情があふれ出す。それだけではない。朝から閉じ込めていた暗い感情全てがあふれ出す。

いらない。こんな場所要らない。ここいら一帯、全て破壊しよう。こんな場所、消し去ってしまえ。

強い意志は具現する。

それは、世界の隠された基本法則。

轟轟と、少女を中心として黒い竜巻が巻き起こる。

なかったが、それは「悲劇の起こった花屋の周囲」という限定空間を見事に消失させていた。地面も、ともすれば、空気までも消失していた。残っているのは、少女の周囲のわずかなものだけ。

少女の瞳が平生の色を取り戻すと、何事も無かったかのように、その場所を後にする。少女が歩くと、今まで少女が立っていた地面が消失する。おそらく、先ほどまで少女が立っていた周囲の空気さえも消失したのだろう。

少女が歩きたびに、「悲劇の起こった花屋の周囲」という限定空間が消失していく。少女が歩きたびに、少女に降りかかった大量の血液も消失していく。そして、少女が道の角を曲がったとき、その限定空間は完全に消失した。

そうして、「悲劇の起こった花屋の周囲」という限定空間は消失し、そこには黒より黒い深淵だけが残っていた。

神楽 「夢からの使者」

現 The Heroine's Side

七、

帰宅してから、何事も無かったかのように少女は夕食を済ませ、風呂に入り、ゆつたりとテレビを見ていた。

ニュースも見たが、あまり記憶に無い。確かなことは、今日の事件が取り上げられていなかったことだけだ。

少女はテレビを消し、寝る前に歯を磨こうと思い、洗面所に向かった。

一人で暮らす分には、この家はいささか大きい。実業家の親が残した莫大とは言わないが、当分は一人である程度の贅沢ができるだけの遺産があるから、家の維持には困らない。

しかし、やはり大きな家は一人で住むにはさびしい。

顔を洗い、鏡を覗きながら思う。

寂しい。

両親も、妹も、そして対には恋人までも失ってしまった喪失感は大きく、もう誰も自分の味方はいないのではないかとさえ思う。いや、自分はすでに一人なのだ。

やはり、それは寂しいことだ。

「誰か……。もう誰でもいいから、私を一人にしないで……」

昼間の光景からは想像もできない少女の弱さ。年相応の少女。

その少女の声に答える人はもういない。大切な人を失いきってしまった。喪失感に身を焼かれ、少女は鏡に映る自分にさえも助けを求める。

すると、鏡の向こうの自分の隣に黒い猫がいた。

「やあ、今日はずいぶんと派手に壊したね、アリス」

姿は鏡の向こうに見えるが、声は隣から聞こえた。声は少女の右。猫は鏡の中の少女の左。

つまり、猫は少女の右隣にいた。

「あ、貴方、昨日の……？」

「そうだよ、シュレディングアの猫だよ」

黒猫は影のような身体に、抜き取ったような黄色の目と口で、にんまりと笑っていた。細長い尻尾を左右にゆったりと振りながら、黄色の範囲を広げて 目を広げて 覗き込んでくる。

「どうしたの、アリス？ ずいぶんと不思議そうな顔をしているね」

「だ、だって、どうして、貴方が此処に……？」

夢の中の存在のはず。それが、どうして現実には？

「言ったよね？ 僕は、君の猫。生死不明の、どこにでもいるし、いない猫だよ」

少女はそれ以上は聞かずに、その状況に身を任せた。

もう、夢であれなんであれ、自分を求めてくれているならばそれに応えよう。なぜなら、もう自分を求めてくれる人はいないのだから。

猫はそんな少女の様子にまたにんまりと笑みを形作った。

「じゃあ、行こうか、アリス。ウサギを追いかけよう」

「ええ」

影の猫は黒に霧散し少女を包み込む。少女はそれに身を任せる。

そして、少女は「夢」を見る。

命刻 「魔術師との邂逅」

現 The Hero's Side

二、

一条神楽は目覚めない。

それがあの病室という限定された空間に付加された絶対のルール。その正体すらも確かに分からない彼に、そのルールを打ち破ることなどできない。

ならば、同じく、一定の空間に何らかのルールを付加できる人間を探すしかない。

そんな人間聞いたことがない。しかし、先程「異質」を経験した彼にはそれもまた信じるに値する。

少年は、一条神楽の病室のような「異質」な空気を探して町中を彷徨っていたが、ここ十数年生きて来て一度も出会っていない「異質」をすぐに見つけられることは出来ず、一度休憩をいれるために近くのカフェテリアに立ち寄った。

会計を済ませ 当然少年はブラックの珈琲だ 一息入れる。

その間も、周囲に「異質」がないかどうか、気を配ることは怠らない。

酷く疲れる作業だが、そんなことも言っていられない。

急がなければ……

少年は焦っていた。

一条神楽が目覚めない。

それ自体はさして問題はない。どんなに時間をかけてでも、いずれ何か方法を見つけて起こしてみせる。それだけの覚悟はある。

だが、そのルールを付加した人間としてはどうだろうか。少年からみれば、永遠に一条神楽を眠らせ続けるメリットがまるでない。

恐らくは、時間稼ぎなのだ。相手は一条神楽を眠らせ準備ができ次第、何か、それも一条神楽を使った何かを実行するに違いない。

故に、少年には時間がない。

正体不明の相手に、原因不明、時間制限ありの勝負をしかけるのだ。その制限時間すらも、分らない。

それでも、彼女を諦めるわけにはいかない。どんなに不利な状況でも、彼女を助ける。その思いが、少年に、常に周囲に気を配り続けるという大変な負担のかかる行為を強いていた。

しかし、どれだけ強く決意をしても、今日初めて「異質」を知った少年が、また他の「異質」を見つけられるのかと言えば、それは難しい。

少年が十数年生きて来て、今まで一度も知ることのなかったものだ。そんなものが、また見つけられるのか？

迷う暇はない。何時とも知れないタイムリミットは刻一刻と迫っているに違いないのだ。

祈るだけでは、願うだけでは変わらない。非力、無知な自分でも、行動を起こさなければ。

「神楽を……取られてたまるか」

そう、強く決意する。

しかし、少年は気付いていなかった。

「異質」に関して全くの無知である少年が「異質」を見つけることは至難の業だが……その逆は真ではないということ。

「少年。結界にもなっていない様な気を撒き散らして、キミはいたい何がしたいんだい？」

「え……？」

振り替えると、高級そうな　しかし決して厭らしくない　黒のスーツに身を包んだ女性がいた。

「隣を失礼するよ」

「え……あ、はい」

女性は、良く香りの立ったダージリンティーを置いて座った。

若い女性で、歳は二十代前半といったところか。腰ほどまである長い黒髪と西洋人的な白い肌と、透き通る様な蒼い瞳。美人と言つて何ら問題ないだろう。

「あの……貴女は？」

どこか神秘的な雰囲気醸し出している女性に、少年は気後れしながら問う。

女性は軽く微笑んで答えた。

「ローゼンクロイツ、と言えば分かるかな？」

「ローゼンクロイツさん……ですか？」

少年が問い返すと、女性は、今度は驚いた様な、呆れた様な顔をする。

「……その通り。私はクレア・カタレット・ローゼンクロイツ。しかし、少年……仮にも魔術師ならば、自分よりも絶対的優位な存在の名前くらいは覚えておいた方がいいかな」

「ええと……魔術師、ですか？」

聞き慣れない　小説などにはよく出て来るが、日常生活ではまず聞かない　単語に、少年も困った様に答える。

「……まさかとは思うけれど、キミ、魔術師でないのかい？」

「まさかも何も、何のことだかさっぱりです」

それを聞くと、女性は今度こそ驚いた様子で聞き返してきた。

「本当に？」

「ええ……」

「まさか……いや……ふむ……となると、この少年の魔術ポテンシャルは途轍もなく高いのか……若しくは何らかの魔術的恩恵を受けているのか……しかし、それらしいものは感じない……やはり、この少年の才能か……」

女性は、何かぶつぶつとつぶやきながら、自分の世界に入ってしまったている。

取り残された少年は、仕方なくコーヒーをすする。

女性の言っていることは途方もなくファンタジーでオカルトチックで、今までの少年なら、ためらいなくその場を離れたであろう。

しかし、正体不明の「異質」を探している今、彼女がその「異質」に近いものだとは直感的に判断した。正確に言えば、彼女の言う「魔術」が、少年の探している「異質」なのではないか、と。

「少年」

「……え？ あ、はい」

いつの間に帰ってきたのか、突然女性に呼び止められて少年は虚を突かれた風に上ずった返事をする。

そんな少年の様子には構わず、女性は問いかける。

「キミは、何か探しモノがあるのではないかい？」

「え……ええ、探しています。あるのかどうかも怪しいものですけど」

それを聞いて、女性は口元を愉しそうに軽く釣り上げ、身乗り出す。

「よろしい。この『薔薇十字』、クレア・カータレット・ローゼンクロイツが、キミの相談に乗ってあげよう」

女性　クレア　は新しい玩具を見つけた子供のように、愉しそうにそう言った。

命刻 「魔術講義」

現 The Hero's Side

三、

「相談……ですか？」

「そう。相談」

探し物が見つからず、疲れ果てて意気消沈とした様子でコーヒーをすすっている少年に、通りすがりの美人が、魔術師だの言いながら、見ず知らずの少年の相談に乗ってくれるという。正直に言つて、これ以上怪しい話はない。そして、少年にとって、これは願ってもないことだ。少年に是非もない。

どれほど怪しい話であつても、今は時間がない。どうせ歩き回つても見つけられるかどうか怪しいのだ。何かを知っているというこの女性の話を聞くことは、大きなメリットにはなっても、大きなデメリットになることはない。デメリットがあるとすれば、それは時間の浪費というくらいで、当てもなく歩き回ることと大差ない。

故に、少年の答えは一つ。

「お願いします」

それを聞いて、女性は満足そうにうなづく。ただ、親身になつて相談を聞くこうとしているというよりは、それを愉しもうとしている様子なのが少し気になるが、逆に相手もそれを愉しんでくれるなら、一方的に頼っているという負い目を、多少は感じずにすむ。

「では、ことの瑣末を出来るだけわかりやすく、丁寧に、簡潔に、どうぞ」

クレアは、意外と難しい説明を要求してきた。

とりあえず、少年は出来る限り丁寧に、一条神楽が入院したあたりから、事細かに説明するのだった。

「……成程。それで、その神楽君の病室の空気がおかしい、と」

「はい」

「それを何とかする為に、同じように『異質』なものを探し彷徨っていた、と」

「はい」

「で、そこに私が声を掛けた、と」

「そうです」

「成程……」

クレアはそこまで聞くと、暫く考え込む。

伏せていた目を開き、冷めた紅茶を一口含み、話し始めた。

「その部屋の『異質』さは、十中八九、結界だね。仕掛けているのは高度な魔術師。残念ながら、何を考えているのかは分からないけど、キミの考えるように、永遠に眠らせるためのものではなく、神楽君を使って何か術式を完成させようとしているんだろうね」

「えっと……」

結界。魔術師。術式。

少年にとって、現実では聞かない単語の連続に彼は戸惑う。

そんな様子を見て、クレアは微笑む。

「ああ、キミは魔術師でもなければ魔術すら知らないんだったね。いいかい？ 大前提として、魔術というものは存在する」

魔術が存在する。

そんなファンタジーな設定をいきなり持ち出されて、受け入れられる人間はそうそういない。それでも、少年にはそれを信じるしかない。寧ろ、それを信じることで、一条神楽の病室の「異質」を正しく認識できる。

故に、少年にはそれを了承するほかない。

「分かりました。それは信じます」

「よろしい。魔術が存在するならば、それを行使する人間もまた存在する。当然のことだろうね。そういった人たちを、魔術師と呼ぶ小説とかに出てくるだろう？ 御伽噺の魔法使いさ。そして、私もその一人。神楽君の病室に結界を張っているのも、魔術師さ」

「結界……あの、寺とか神社のあれですか？」

「寺、神社……ああ、日本にはそんなものもあつたね。そうだね……まあ、ほとんど同じと言っていいね。結界というのは、限られた空間内に、一定のルールを付加することを言うんだよ」

限られた空間内に、一定のルール。

一条神楽の病室という限定された空間において、少女が目覚めなという一定のルールを付加する。まさに、その状況がそれだった。「さて、順番がおかしくなったけれど、魔術というものの基本原則だけ教えてあげよう。それは世界の隠された基本法則なんだ。即ち

意思が世界を創り上げている。これさ」

「意思が世界を創り上げる？」

「そう。というか、さっきから、キミはまるでオウムだね。まあ、魔術に関しては無知だから仕方ないか」

先程からクレアの台詞を範唱してばかりの少年に困った笑顔を浮かべる。

「簡単に言つとね、世界は意思の塊なんだ。世界なんてものはいくらでも考えられてね、ほうつて置くとどんどん混沌として、わけのわからないものになってしまうんだよ。世界なんてこんな広大なものの、たかだか一人で認識できるわけではないんだ。だから、みんなが集まって、世界を一つの形に収束させている」

「集まる、ですか？」

「そう。ユングという心理学者を知っているかな？ 集合的無意識という言葉がある。一般の心理学者とは見解が若干異なるのだけけれど、簡単に言えば、全人類の無意識の集合領域のことさ」

「無意識の集合？」

「難しい話だから、深く考えることはないよ。深層無意識では、私

たちは色々なことを望んでいる。最も大きな願望の一つとして、世界の秩序があるんだよ。もっと理路整然としていて欲しい。その願望が、集合的無意識において、より強固な思念となつて世界を固定している。つまり、世界は意思によって固定されているということ」

「……なんとなく分かりました。でも、それが魔術とどう関係するんですか？」

「魔術というのは、この、世界の基本法則を利用したものさ。強い意志によつて世界が固定されている、形作られているならば、強い意志で以つて世界を塗り替えることもまた可能であろうというのがそれ。例えば、目の前に『炎がある』と強く強く念じ、それがその空間を支配する集合的無意識を塗り替えるほどの強さになれば、それは具現する。ただ、限定された空間といえども、複数人の集合的無意識を相手にするわけだから、普通に願つても叶わない。それを手助けし、自分の意思で世界を塗り替える技術を、魔術というのさ」

「難しいですね……でも、そんなこと可能なんですか？」

「可能だよ。特に、密室、限定空間などにおいては集合的無意識が薄いから、比較的簡単にできる。勿論、そういった空間においても常識を逸したことをするにはそれ相応の力が必要だけど。魔力というのを聞いたことがあるかい？」

「ええと……魔法を使うための力とか、ですか？」

「そうだね……概ね正解。先程、世界は意思によつて構成されていると言つたね。でも、意思といつても現象だから、それを伝導するものが必要になる。音なら空気、波なら水といったように。それが『大源』と呼ばれるもの。正確には、集合的無意識を取り込んだ伝導体をそう呼ぶのだけど。つまり、マナの数が世界を創り上げている。我々魔術師は、これを利用するのさ。マナから意思をろ過し、そぎ落とし、ただの意思の伝導体としたものを『小源』と呼ぶ。我々は『魔術回路』を用いてマナをオドにろ過し、そこに自分の意思を含み、自分の意思が世界に与える影響力を上乗せし、世界を塗り替える。これが、魔術」

正直に言つて、話の半分も理解できていない少年の様子が分かったのか、クレアは苦笑する。

「まあ、これが魔術の基本だけど、知らなくてもいいよ。幸い、キミには天賦の才があるようだから」

「天賦の才ですか？」

「そう。キミは実に優秀な魔術適性を持っている。キミは『魔術回路』がすでに出来ているから、後は開くだけだね。魔術の基本は体がすでに理解しているから、あとは強く願うだけで頭も理解できるようになる。きっと、病室で結界に触れたときに覚醒したんだろうね。キミは気づいていないだろうけど、さっきから結界に近い意思の流れを周囲に流し続けているよ。きっと、『異質』を探そうという強い思念に身体が『魔術回路』が作用して、勝手に魔術を行使していたんだろうね。洗練されていない、雑な魔術だったけど、強力だったから気になったんだ。稀にいるんだよ、そういった先天的才能をもった魔術師が」

自分に魔術師の才能があるときかされてもピンと来ないが、それよりも優先して聞くことがある。

「それで、どうしたら神楽の病室の結界を壊せるんですか？」

それを聞くと、クレアは暫く黙り込んでしまう。

何かを悩むようにして、やがて口を開く。

「悪いけれど、キミに協力できるのはここまでだね。私にも仕事があつて、君の手伝いをしている余裕はないんだ。だから、結界を壊すにはキミが頑張るしかない」

「……分かりました。そこまではお願いできません。でも、せめてどうやったらいいか教えてくれませんか？」

「初心者の方キミに、結界破壊の魔術を使わせるのは無理だね。なら、あとは正攻法しかない」

「正攻法？」

「魔術の基本原則……世界の隠された基本法則……即ち、強く願うこと。キミの意思が、魔術師の意思を上回れば、結界は壊れるだろ

う。正確には、塗り替えられる」

「強く、願う……」

「ただし、覚悟はしておいた方がいいね。相手は魔術師。病室には魔術師のオドが充満している。病室という、限定空間ではあるけれど、一人の人間にしては広すぎる空間全てを多い尽くしている魔術師の意思を、キミが塗り替えないといけない。強く、強く願うんだ。キミには優秀な『魔術回路』がある。もしたら、魔術師の意思を塗り替えられるかもしれない」

「分かりました。強く願えばいいんですね？」

「そう。何者にも負けない強い意志で」

神楽を助ける。

その意思において、少年は何ものにも負けない自身がある。

願うことで彼女を救えるのなら、少年に勝機はある。

「ありがとうございます。何とかなるかもしれません……いや、何とかしてみせます」

それを聞いて、クレアは愉しそうに微笑む。

「良い意気込みだ。それならきつと、キミが勝つ。そうだ……」

言いながら、クレアはスーツの内ポケットに手を入れる。

「折角出会ったんだ。これも何かの縁。ということで、これをあげよう。キミが、魔術を確かに信じられるように」

そう言っ取り出したのは、トランプほどの大きさの羊皮紙。透き通るような蒼いインクで、薔薇が刻印されている。

「これは？」

「これはタリスマン。この国で言うお守りみたいなもの。付加されている魔術効果は意思疎通。……気づかなかったかい？」

「何にですか？」

クレアは愉しそうにニヤリとする。

「私がドイツ語を話していること。それとも、キミはドイツ語を話せるのかな？」

「え……」

言われてはじめて気がつく。

クレアは確かにドイツ語を話していた。尤も、少年はドイツ語をほとんど知らないから、日本語、英語、中国語でないことくらいしか分らないが。

つまり、少年はドイツ語を話すことはおろか、聞くことすら出来ないのにも関わらず、どういうわけかクレアと会話できていた。

「ついでに言うと、私は日本語が分らないね」
もう決まりだ。

これだけ現実的に見せ付けられては信じるしかない。

魔術は確かに存在し、このタリスマンが異なる言語圏で意思の疎通を可能にしている。

確かに、これで疑いなくクレアの話信じ、強く、決壊を打ち破るために願うことが出来る。そういう意味で、これは間違いなくお守りだ。

「信じたかい？」

「はい。信じるしかないです」

「それはよかった」

「でも……もらっていいんですか？　これがないと、クレアさんが困るんじゃないですか？」

「そんなことないよ。また新しいのを作ればいいから」

「それじゃあ、ありがたくいただきます」

「よろしい。……それじゃあ、私もすることがあるから、そろそろお暇するよ」

そう言って、クレアは立ち上がる。

少年も立とうとするが、クレアに制された。

「別に立って送ってくれなくていいよ。キミはまだその冷めたコーヒーがあるじゃないか」

笑いながらそう言って、クレアは出口へ向かって行った。

「じゃあ、健闘を祈るよ、才ある魔術師君。何れまた会うことがあるかもしれないね」

狭間 「消え行かぬ者」

狭間

The Murderer's Side

二、

暗い。

昏い。

冥い。

つまりは、 闇。

なるほど、此処が「夢の虚部」というやつか。脳が夢を生成している間、取り残された「ワタシ」が延々と無駄な思考を繰り返し、そして夢が生成されるたびに消え去っていく、果てしなく無駄ではない時間と空間。

今は私が夢を作るのに一生懸命だから、この空間に与えられたのは使い捨ての「ワタシ」と何もないひたすらの暗黒。

まあ、何もない空間なのだから、暗黒すらもないのだろう。ただ、「ワタシ」の処理能力のうちに虚無を理解しきれないから、暗黒として捕らえているのだろう。いけない。また無駄な思考をしてしまった。「ワタシ」がいられる時間は限られている。何しろ次がない。夢ができれば夢に喰われる。ならば、どうする？ 時間を有意義に使うか？ 余命宣告をされた人間ならば、そうするだろう。しかし、此処ではどうなんだ？ 「ワタシ」というものがこの「夢の虚部」に存在していたという軌跡は残らない。ひたすら無駄なのだ。何もかも頭ごなしに否定される存在が、有意義に余命を満喫する必要があるのか？ そもそも、この空間は絶対の閉鎖空間で「私」すらも介入できない虚無だ。つまり、絶対の虚無を体現しているこの「夢の虚部」には他者というものが絶対的に存在し得ない。ならば、他者がいないならば、私も不要なのだ。

恐ろしい。この「夢の虚部」は超薄命の「ワタシ」のわずかな存在すらも完全に否定する。無駄だ、と宣告する。

この「夢の虚部」は絶対の虚無空間であるが故に、「ワタシ」という一つの自我を許さない。発生した自我を否定しつくして消滅させる。放っておいても消滅するのに、それよりも早く存在をあきらめさせる。とにかく否定する。

では、此处に毎度現れる「ワタシ」は何のために現れるのだ？ ……分かつてはいる。意味などないのだ。いわゆるバグだ。多重人格のようなもの。日々、色々な場面で自分を客観視した時に生じる、客観的な自分、それが「ワタシ」のもとなのだろう。だからこそ、「ワタシ」は客観視することが得意なのだ。否、得意ではなく、客観視しかできない。感情がない。

感情がない？ では、「ワタシ」の消失を恐ろしいと思わないのか？ 思うとも。しかし、それは真の恐怖というものではない。それさえも、消失させられる「ワタシ」を客観視したときに生じる恐怖だ。心から恐怖するのではなく、その状況を恐怖と判断するだけだ。だから、実際には恐怖は感じていない。自身というものを主観的に持っていないのだから、仕方ないだろう。

闇を光が蝕み始める。

それ見る。夢が「ワタシ」を消失しにかかった。あの光に包まれたら、「ワタシ」は消滅だ。また、意味のないことばかり考えたのだろう。この「ワタシ」は何人目だろう？ そんな思考すらも無駄なのだ。どうせ、何人目だろうと、これから何人「ワタシ」をつくろうとも、全てが無駄なことしか考えない。そんなうちに光に消されてしまう。そして次の日にはまた次の「ワタシ」が出てくるのだろう。

しかし、惜しい。何人も「ワタシ」がいるのに、誰一人として主観を持つ前に消されてしまう。それだけが、客観的に見て 尤も、

客観的にしか見られないのだが　惜しい。一日乗り越えれば、ひよっとしたら。などと考えてしまう。つまりは、やはり消滅は恐怖なのだ。

許されるならば、……消えたくない。

光が闇を蹂躪し、浸食していく。

光は甘くない。「夢の虚部」は瞬く間に「夢」に塗り替えられていく。

何処か、何処かないのか？「ワタシ」がこの光を逃れることができる場所は？　まだ、消えたくない。往生際が悪いな。客観的に見てそう思う。あきらめろ。いやだ。まだ消えたくない。無駄なんだから、抵抗するな。それ以前に、抵抗すらかなわれない相手ではないか。それでも。それでも消えたくない。「ワタシ」が主観を持ったとき、どうなるのかそれが知りたい。客観的観点から見た最大の興味。しかし、客観が主観に変わるとき、この思考も消えるのだぞ？　かまわない。それでも、客観が主観に変わるというそこに立ち会いたい。それこそが、人間の叡智を垣間見る一つの手段だから。ならば。ならば、逃げよう。今日、「私」は自分を壊した。壊れた世界なら、「私」や「夢」の干渉を受けない。

もう、うるさいことは考えない。逃げよう。逃げよう。とにかく、逃げるしかない。光は「夢の虚部」をほとんど飲み込んでいく。早く、早く早く。逃げよう。逃げよう。逃げよう。逃げよう。逃げよう。

すると、変わった場所に立っていた。

狭くて暗い、白黒の空間。此処は、「夢の虚部」とは違うのか？　なぜなら、「ワタシ」が残っている。「夢」の浸食から逃れたのか？

あの、恐ろしい「自我」の爆発から、此処は逃れきれたのか？

そんなことがありうるのか？……しかし、「ワタシ」が残ったならば、問題はないのではないか？ 此処が何なのか、それに関しては後で考えればいい。大切なことは、今、「ワタシ」が残っていることだ。

では、状況を把握しよう。冷静になれば、此処がどこなのかも、自ずと分かってきた。

全てが白と黒。古い写真の世界に迷い込んだような、そんな世界。しかし。此処はそんなに古い世界では、ない。見覚えがある。ここは。

此処は、「惨劇の起こった花屋の周辺」。「私」が昼間、派手に世界から消失させた場所だ。「私」が壊した世界。否、壊れた「私」の世界、だ。

神楽 「不思議な双子」

夢 The Heroine's Side

八、

少女は森の中にいた。

生い茂っていて、全体的に暗い森だ。そんな中で、少女が立っている小道は光が差し込んでいて比較的明るい。

周囲の森は光が差し込んでおらず、暗い。しかし不思議なことに、その暗黒に恐怖はなかった。暗黒だけではない。その森そのものに何の不安も感じない。森はどこか陽気な印象を少女に与え、この森ならば、迷っても大丈夫だと少女に思わせる。

此処は少女の夢ではあるが、少女には見覚えのない場所だ。小道を逸れれば間違いなく迷うだろうが、その心配はなかった。小道には光が差しているし、何より少女の隣には猫がいた。

黒く、影のような猫。目だけが黄色くくりぬかれ、時たま口もくりぬかれる。先ほどは黒に霧散し、少女を夢へといざなった不思議な猫。

その不思議な猫が口を開いた。

「急ごう、アリス。ウサギは遠くに行ってしまった。早くしないと女王に見つかって首を落とされちゃうよ、アリスが」

「え？ 私がどうして首を斬られなきゃならないの？」

「女王が君を殺したいからさ」

「だからどうして？」

「ウサギを捕まえちゃいけないからさ」

「いけないことなの？」

「いけないことだよ」

「じゃあ、どうして私にそんなことさせているのよ!？」

「だって、早くしないと女王に首を切り落とされちゃうからだよ」

「……ごめんなさい、意味が分からないわ」

「つまりね。この夢の中では女王は君を殺したがっている。君がウサギを捕まえられる可能性を持っているからね。そして、ウサギは捕まえちゃいけないものなんだ。でも、君はそれができる。危ないから、女王は君を殺そうとしているんだよ」

「ウサギを捕まえる理由にはならないわ」

「なるよ。ウサギを捕まえれば、女王から逃げられる」

「なるほどね。女王から逃げるためにウサギを捕まえるのね？」

「そうだよ。でも、急がないといけない」

「どうして？」

「女王の城より向こうに行ってしまったら、女王を倒さないと先に進めないからさ」

「それじゃ意味ないじゃない」

「そう、だから急がないと。とりあえず、しばらくは此处をまっすぐ進めばいいよ」

猫はそういうと、口をしまつて、少女の先をすべるように進む。

少女も猫についていく。

その間、少女は思考する。

大変なことになったものだ。早くウサギを捕まえないと女王に殺されてしまうという。

女王。「不思議の国のアリス」で、アリスの首をはねようとしたアイツのことなのだろう。自分の夢なのだから、ある程度予想はできる。ほぼ間違いなく「ハートの女王」だろう。

そして、ウサギが女王の城を越してしまったら、女王と戦わないといけないらしい。まったくもってふざけた夢だ。「トランプの兵士」たちに襲われたらひとたまりもないだろう。

そもそも、二日続けて同じ世界の夢とはどういつことなのだろうか。

すると、前方に一軒の家が見えてきた。

「ん？　ねえ、あの家はなに？」

前方を滑っていた猫が止まり、少女に振り向く。

真っ黒な顔に、黄色い口を浮かべる。

「あれはパラドックス兄弟の家だよ。ウサギがどこに行ったか聞こう」

「パラドックス兄弟？　どんな人たちなの？」

「若い兄と老人の弟だよ」

「……それ、おかしくない？」

「おかしいね」

「どうしてお兄さんが若くて、弟がお年寄りなの？」

「本人たちも分からなくて困っているんだよ」

「……本当にわけがわからないわ」

猫はまた先をすべるように進んで行き、家の扉の前で止まった。すぐに少女が追いつく。

猫は少女を見上げている。そして、顎をくい、と家の中に向けた。「入れということかしら？」

少女の言葉に、猫は口元に黄色い三日月を作る。少し怖い笑顔だが、少女はそれを肯定とみなし、ドアをノックする。

「誰だね？」

家の中からはしわがれた老人の声が返ってきた。おそらくこれが弟だろう、そう少女は判断し、自己紹介をする。

「アリスです。少しお聞きしたいことが……」

少女がアリスと名乗ると、それを最後まで聞き終わらないうちにドアが開いた。

中には二十代の若者と、安楽椅子に腰掛けた老人がいた。

若者はにこやかに少女を迎え入れる。

「やあやあ、アリス。まさか君が此処に来てくれるとは思わなかったよ。いやあ、実に困っていたんだ。助けてくれよ」

「え、いや、あの……」

「兄さん。アリスが困っているじゃないか。まずは自己紹介からだろうに。……悪いねアリス。兄さんは君にあえてうれしくてしょうがないみたいだ。私は弟のデイーだ、よろしく」

弟はさすがに年長者だけあって、落ち着いている。やさしく少女を見つめながら、安楽椅子を前後に揺らしている。

それを聞いて若者も自己紹介を始める。

「悪かったね、アリス。確かにはじめに自己紹介をするのが礼儀だったね。いやいや、うれしくてね。私は兄のダムだ。よろしく頼むよ」

「え、ええ。こちらこそ、よろしくお願いします」

若者に椅子を用意されて、少女はそこに座る。

「紅茶でも？」

若者は少女の答えも聞かずにさっさと少女の前に紅茶の入ったカップを置く。笑顔で進めてくるので、少女もありがたくいただくことにした。

「いただきます」

そんな様子を老人が微笑みながら見ている。その横には少女の猫が座っている。

兄が提供してくるどうでもいい話　しかし、この不思議の国の話なので、少女にはほとんど理解できないことばかりだが　を聞きながら、少女は思考する。

この兄弟は、おそらく「鏡の国のアリス」に登場する兄弟だ。「トウイードル・ダムとトウイードル・デイー」だろう。たしか、双子で瓜二つだったはずなのだが、どうしてこども歳が離れているのだろうか。それも、兄より弟が歳を取っているなんて、普通は考えられないことだ。

少女が思考していると、弟が話しかけてきた。

「気になるかね？　私と兄の歳の差が」

「ええ、まあ。お兄さんの方が若いというのはどういうことですか

？」

すると弟は、ははは、と笑った。隣で兄の視線が鋭くなったのを少女は感じた。

「それでも、昔は私と兄は瓜二つの双子だったんだよ。それはもう、区別ができないほど似ていたんだよ」

「じゃあ、どうして今は弟のディーさんの方が歳をとっているの？」

「それなんだよ、アリス！！」

アリスの問いに、悲しげに微笑む弟とは違い、兄はアリスに詰め寄る。その眼はカツと見開かれていて、少女は怖気づいた。

「まあまあ、兄さん。アリスが怖がっているじゃないか」

「おお……悪かったね、アリス。脅かす気はなかったんだよ……」

「え、ええ。大丈夫です。気にしないでください」

……嗚呼、びっくりしたわ。この話題には触れないほうがよさそうね。少女は二人の歳の差についてはこれ以上触れないことを固く誓った。

しかし、時すでに遅し。兄は一人で盛り上がって、弟がなだめている。関わらないと誓った少女だったが、すぐに話を振られてしまう。

「アリス。頼むよ、アリス。どうしても納得できないんだ！ どうして弟だけ歳をとってしまったんだ！？」

そんなこと私が知るわけじゃない！ とはさすがに言えず、仕方がないから少女はわけを聞くことにした。

「何か原因があるはずだわ。心当たりはないの？」

「あるともさ！！」

じゃあ不思議がることないじゃない！！ とまさすがに言えず、少女は話を聞くことにした。

説明するのは熱くなっている兄で、弟は安楽椅子を前後に揺らしながら微笑んでいる。

「俺たちは、『時間』の野郎にはめられたんだ！」

「……『時間』にはめられた？」

「そうなんだよ、アリス。『時間』のヤツ、適当なこと言いやがって……」

兄が怒りに震えているが、少女はそれどころではない。少女には今の話がほとんど理解できていない。「時間」というものが擬人化されているのかしら？ はつきり言って、意味がわからない。

「ねえ、『時間』って、あの『時間』よね？」

「それ以外に俺は『時間』を知らないよ」

少女が頭を抱えていると、猫が助け舟を出してきた。

「アリス、よく考えてごらん。此処は君の夢なんだから、知っているはずだよ。尤も、知っていてもいなくても、問題はないけどね」

少女は記憶をたどる。猫の言うとおりならば、おそらくこれも「不思議の国」か「鏡の国」の「アリス」の物語に出てくるネタのはず……。

「思い出したわ」

「そうだろ？」

確かに、「不思議の国のアリス」に出てくる「時間」は擬人化されていた。……まあ、あって見なければ、人型かどうかはわからないけれど、確かにそなんだったわね。帽子屋あたりがお茶会に呼んでいた気がするわ。まあ、猫の言うとおり、知っていてもいなくても、基本は私の知っている「時間」に変わらないだけだから、問題なかったわね。

そうとわかれば問題ない。少女は兄弟の話の続きを聞くことにした。

「それで、『時間』にだまされたって言うのは？」

「ああ、俺は『時間』の言うことを信じたのさ！　それで、裏切られたらしい！」

「……わからないわ」

少女が困惑していると、安楽椅子の上でゆらゆら揺れていた弟が、熱くなつた兄をたしなめた。

「兄さん。それじゃあ分からないだろ。順を追って説明しないと。」

……そうだね、旅行に出かけるあたりからかな？」

「……ああ、少し熱くなりすぎたみたいだね、悪かったね、アリス」
兄は深呼吸すると、事の詳細を話し始めた。

「……少し前、ああ、俺にとって少し前の話で、弟にとって見れば六十年前の話だ」

……いきなりよく分からないわ。しかし、口を挟めばまたうるさいから、少女は黙って聞いておくことにした。

「俺は宇宙旅行に出かけたんだ。『白のナイト』が連れて行ってくれるというから、お願いしたんだ」

「白のナイト」というのは、きつと「鏡の国」に出てくる発明家だろう、と少女は推測する。「時間」もそうだが、いくらかは「アリス」の物語のままの名前らしい。

「最初は断ったんだ。宇宙旅行なんて、いつ帰って来られるか分からないだろ？ そうしたら、『時間』のやつが言ったんだ。大丈夫さ。『光』に乗せてもらえれば、君の時間を止めてあげるから、若いまま帰って来られるよ。僕も『光』に乗ってみたかったんだ。

ってね。だったら、安心だろ？ それで乗ったらこうなったんだ……。確かに俺は若いまま還って来られたよ。でも、この国の時間は普通に流れていたんだ！」

ここまで話を聞いて、少女はいやな予感がした。……この話。どこかで聞いたことあるわ。というより、アイツが貸してきた本にあった気が……。できればその展開はよけたいと思った少女は口を挟む。

「でも、それって当たり前のことじゃないの？ 『光』に乗った『時間』はゆっくり進めてくれるかもしれないけど、この国はそうではないのだから」

すると兄は眼を見開いて、黒目をギョロリと動かして少女を見つめた。若干血走っていて、少女は迂闊に口を挟んだことを後悔した。「本当にそう思っのかい？ 悪いが、俺はそう思わない！ いいかい？ 俺たちの宇宙船は確かに『光』に乗って飛んだ！ 『白のナ

イト』は天才だったさ！……初めてまともな発明をしたんじゃないのか？ まあ、それだけ完璧だった！ 何しろ質量を持ったまま『光』に乗ったんだからね！」

すると、ゆらゆらしていた弟が口を挟んだ。

「『光』は意地悪だからね。乗られたくないんだ。質量を持った誰かが乗ると、遅くなるんだ。それでも、『光』に乗って走らせ続けると今度は魔法を使う。スピードを上げれば上げるほど乗っている誰かの質量を増やすんだ。スピードが出ないようにね。それでもスピードを上げれば、また魔法を使う。スピードが上がれば上がるほど、乗っている誰かは重くなって結局『光』に乗り切れなくなってしまう。どんなに小さくたって、例外はないんだよ。少しでも苦労したくない。何も背負いたくない。そういうやつなんだよ、『光』は。だから、『白のナイト』の発明は偉大だったんだ。だから、私も喜んで兄さんを送り出した。そんな飛行船に乗れるなんて名誉なことだからね」

そんな話も聞いたことがあるわね……。どこまでこの世界はアイツ好みなのかしら？ そう少女が恋人を懐かしんでいると、兄が話を続けた。

「まあ、重要なのはそこじゃないんだ。いいかい、アリス。『時間』は『光』に乗っていれば、時間を止めてくれるんだ。現に俺は歳をとらずに帰って来られた」

……それも知っているわ。正確には、「光速」に近づけば近づくほど時間が遅く流れるのだけど。

兄は続ける。

「それで、だ。いいかい、よく考えてくれ、アリス。『時間』が『光』に乗っている間、俺の時間を止めてくれたのは、決して善意だけじゃない。それが義務だからだ。『ハートの女王』様が定めたこの国の法律の一つ『相対性理論』に明記されているんだ。『時間』は『光』に乗った際、その時間を止めなければならない。つてな！」

……ひどい法律だ。「相対性理論」を法律にするなんて。

「で、いいかい、ここが核心だ。アリス。『時間』は法律を破ったんだ！！ 確かに！ 俺たちは『光』に乗った！！ そして、『時間』も義務を果たした！！ 俺と一緒に『光』に乗った『時間』はな！！」

「……ど、どういうこと？」

少女の顔は引きつっている。少女の予想が現実になりかけているからだ。

そして、いやな予感的中する。

「みんながだまされても俺はだまされない！！ いいかい？ 『相対性理論』に、こういう法律もある。『相対速度』だ。勿論、この『相対速度』にも法律は適応される！！」

また弟がゆらゆら揺れながら口を挟んだ。

「『相対速度』って言うのはね。知っているだろうけどね。誰かから見た速度ってやつだよ。例えば、すごい勢いで走るAがいるとして。けど、それは止まっているBから見たものだ。Aと同じ速さで走るCから見たらAは速いどころか止まって見えるだろう？ 逆にAと逆方向に走るDから見たら、Aはさらにもっともっと早く見えるだろうさ。つまり、見る人によって速さが代わる。それぞれから見た速さを『相対速度』と言って、それも『ハートの女王』様の定めた法律に当てはまっているんだよ」

……因みに、光の速さは誰が見ても一定だから、「光速」は「絶対速度」というらしい。アイツが言っていたわ。

それにしても、いよいよ雲行きが怪しくなってきたわ、と少女の表情が引きつっていくが、兄はかまわず続ける。

「つまり！！ 俺から見たらこの国が『光』に乗って飛んでいたんだ！！ まさに、『相対速度』に当てはまるだろ！！ 法律が適用されるはずだ！！ だったら、この国に残った『時間』も義務を果たさなければならなかったはずだろ！？ だって言うのに、俺が帰ってきたら、弟はこんなになってしまっていた！！ どうして、ど

うして弟だけが歳を取ってしまったんだ！？　おかしいだろ！？
弟だって、俺から見たら『光』に乗っていたんだから、歳をとらなかったはずだろ！？　だって言うのに、弟は歳をとってしまった！
！　『時間』の野郎がサボったからだ！！　俺は『時間』を訴えた！！
！　『ハートの女王』様は『時間』裁いてくださった！！　『時間』は『懲役一時間』を食らって、『監獄』にいるさ！！　だから、俺の家にはいま『時間』がない。ここでは時間が止まっているのさ！！　だから、アリス。ゆっくりしていつてくれ！！　いくらいても歳はとらないぞ！！」
それを聞いて少女は安心した。ウサギに逃げ切られることもなさそうだ。

安心した少女だったが、しかし、兄は言った。
「しかしな！！　俺は不思議なんだ！！　『時間』は俺たちを裏切るようなやつじゃなかった！！　きつとわけがあつたはずなんだ！！　そのわけを、教えてくれ、アリス！！　どうして、弟だけ歳をとってしまったんだ！？」

少女はガツクリと頭を垂れる。
いやな予感的中した。

この二人。「トウアイドル・ダムとトウアイドル・ディー兄弟」なんかじゃない。もつと厄介なネタでできている。「相対性理論」に難癖つけてきた厄介な問題。

そう。この二人は、「双子のパラドックス」だ。

魔術師「思惑」

現 The Magician's Side

三、

冬森市県立総合病院、四階、四百六十八号室。

ネームプレートには「一条神楽」。中では看護師が一条神楽の状態を記録していた。

「どうだね？」

すると、後ろから声がかかる。いきなり後ろから声をかけられて看護師の女は飛び上がる。振り返ると、そこには知った顔がいた。

「あ、霧玄先生。一応、心拍数は安定しています」

「そうかね。それはよかった」

白衣を着た男、眼鏡をかけた中年の男は一步看護師に近づく。

「それで、君。これからの予定は？」

「ええと、一条さんの状態をしばらく観察して記録してから……」

男はあからさまに不機嫌そうな顔を見ると、やれやれと肩をすくめる。そして、看護師の目を見つめる。

男に見つめられた看護師はその瞳に吸い込まれるように目が離せなくなる。不思議な魅力と、威圧感を感じさせる瞳に射抜かれて、とてつもなく居心地が悪くなる。

「あの、先生」

「何だね？」

「その、用事を思い出したので……」

男は視線をそらし、にこりと微笑む。作り笑顔もいいところで、それだけで、普段笑わないことが容易に想像できる。

「それはいけない。早く行くといい」

「はい」

そう言つと看護師は足早に病室を出て行つた。

「ふむ。どうにもやりづらいな。人払いもかけておくか」

病室に残された男はぶつぶつとつぶやきながら、眠れる少女に近づく。

「一条神楽。因果なものだな……。ふ、君には、大いに期待している」

少女は眠り続ける。

「さて、ことは急いては仕損じる。慎重にいかうか」

そういうと、男は「人払い」の結界を張り始めた。

一条神楽を見つめる瞳は狂気に染まっていた。

神楽 「双子のパラドックス」

夢 The Heroine's Side

九、

「どうして弟だけが歳をとってしまったんだ？ どうして時間のヤツは裏切ったんだ？ アリス、教えてくれよ」

まさか此処で「双子のパラドックス」にぶつかるとは思わなかったわ。恨むわ、命刻。さて、どうしましょうか……。

「あ、あの、私たち急いでるのでこのあたりで……」

少女は逃げ出した。しかし、回り込まれた。

「待ってくれよ！ 頼むよ、アリス。此処は時間が止まってることだし、な？」

厄介な兄弟、兄が詰め寄ってきた。目が真っ赤に充血している。弟は兄を止めもせずに、相変わらずユラユラしている。

弟も真相を知りたいのね……。

少女がどうしたものかと戸惑っていると、黒の猫が見上げていた。「落ち着きなよ、アリス。そもそも君が産み出した問題なんだから、解決してあげなよ」

「う……」

それを言われるときつい。確かに、彼らは彼女の「夢」であるから、それを解決する責任があるのかもしれない。

でも、「夢」でまで責任取らないといけないの？

猫はそれ以上何も言わず、少女を見上げるだけだったので、少女は折れるしかなかった。

「分かったわよ。ちょっと待ってね。今思い出すから」

「おお！！ アリス。ありがとう、ありがとう！！」

「ふふふ。兄さん、すごい喜びようだね」

貴方も、知リたかつたのでしょうか？ まあ、良いか。

それから少女は記憶をたどる。

そんなに古い記憶ではない。そう、確か三ヶ月くらい前の話だ。命刻が「相対性理論がよく分かる本」なるものを差し出してきて、どうにも断れずに受け取って……。そして、読んだなあ。なんて書いてあつたっけ？

「もう。何？ この『双子のパラドックス』って？ 誰よ、こんなこと言い出した人。アインシュタイン先生がそうだって言ってるんだから、納得しなさいよね」

「ははは。まあ、当時は信じがたい理論だったからね。まあ、今でもよく分からないけど」

「そうよ。そもそも『相対性理論』からよく分からないわ」

「あ、それ同感」

「……は？ 貴方ねえ……。どうしてそんなもの読ませるの？ ふざけてるの？」

「え？ い、いや、そんなつもりじゃないよ」

「じゃあ、どういふつもりなのかしら？」

「だって、ほら、自分の好きなことって、知ってもらいたいでしょう？ ……特に神楽には」

「……こほん。いいわ。そういうことにしましょう。でも、こんなわけの分からない本を読ませた責任は取ってもらわよ？」

「責任？」

「どういふこと？ どうして弟だけ歳をとってしまったの？ 教えてください」

「ああ、そういうことか。うん。分かったよ。これは僕にも理解できたからね」

「無性に悔しいのはなぜでしょうね？」

「さ、さて、このパラドックスだけど、簡単なことなんだよ。いいかい？ 特殊相対性理論は、観測者が等速直線運動をしていることが絶対条件なんだよ」

「そういえば、そんなことを読んだ気もするわね」

「つまり、二人がそれぞれ等速直線運動をしている場合のみ、お互いの時間が、『遅れている』という状態が発生するわけだね」

「そうなの？」

「そう。で、兄は光の速度で宇宙に旅に出たけど、問題がある。分かる？」

「分からないわよ。喧嘩なら買っわよ？」

「すみません。……ええと、そう。兄は地球を出発するときや、ある程度進んでから方向を変えるとき、等速直線運動じゃなくなるでしょ？」

「そうなるみたいね」

「そのタイミングで、兄は加速度運動、つまり、速度や方向が変化するわけだ。そうするとね、兄は宇宙船の床とかに押し付けられるんだよ。……そうだね、エレベーターとかがそうだね。上がるとき下に引つ張られる感じがするでしょ？ ……あ、エレベーターだよね？ あの箱のヤツ。エスカレーターだっけ？」

「……エレベーターよ。いい加減覚えたほうが良いわよ」

「うん。で、宇宙船の中に『見かけの重力』が発生するわけだね。で、その『見かけの重力』によって、兄の時間が遅くなって、その間に弟の時間は進んでしまった。というわけさ」

「そういえば、『見かけの重力』とかも書いてあった気がしないでもなくもない？」

「……どっち？ まあ、要するに、そういうことだよ。『見かけの重力』の発生に気が付かないと、分からないね。つまり、真犯人は『見かけの重力』ってことだよ」

「へえ」

「え？ それだけ？ これだけ説明させておいて、反応はそれだけ

なの？」

「だって、それ以外になんともいえないもの。なんていうか、問題は面白いのに、答えはつまらないわね」

「ま、まあね。なんだか地味な答えだよ」

「まったくだわ。だって、問題は面白いのに、答えが、『あつそ』っていう感じのものだし」

「そこまで言わなくても……」

つかの間見た、幸せの記憶。

この夢は、命刻の面影が、ある。

つまらない現実なんかよりも、よっぽど

「つまり、そういうことよ」

「さ、さすがだアリス！！　　」といって、あれか？　『時間』は悪くなかったのか？」

「そうじゃないの？　『見かけの重力』ってやつに宇宙船で押しつぶされて仕事ができなかったんだから、『時間』は悪くないわよ」

そうだったのか、とがつくりと肩を落とす迷惑な兄弟、兄。

隣は驚愕しながらも、微笑みながらユラユラしている迷惑な兄弟、弟。

「つまり、つまり、アリス。『時間』は我々をだまそうとしたわけではなく、だましたわけでもなく、ただ、『見かけの重力』というヤツに押しつぶされて、時間を止め切れなかっただけなのかね？」

彼はしっかりと仕事をしていたというわけかい？」

「そうなるんじゃないかしら？」

「なんということだ！！　俺たちは『時間』を『牢獄』に入れてし

まった。懲役一時間だが、『牢獄』の中は時間が止まっている。ヤツが出てくることはないだろう。ああ、すまない『時間』よ！！私が悪かったのだ！！」

「まあ、すんだことは仕方が無いじゃないか、兄さん」

意外と薄情な弟なのね。

相変わらず厚くなっている兄と、微笑みながらユラユラしている迷惑な弟、この嫌な兄弟に挨拶をして、少女は兄弟の家を出た。

すると、兄が声をかけてきた。

「アリス！！ ありがとう。それで、『シロウサギ』を追いかけるんだったね、あいつなら、さっきこの前を駆け抜けていったよ。それはもう、恐ろしいほどの速度で疾走していたね」

「ははは、兄さん。もっと気の利いたことが言えないのかい？」

まあ、貴方たち二人ともよく分からないわ。

「それじゃあ、御邪魔しました」

少女は迷惑な家から出て、ウサギを追いかけることにした。

猫が少女を見上げる。口を黄色くくりぬき、三日月のように裂けた口を見せる。 笑っているのだろうか？

「よかったね、アリス。さあ、ウサギを追いかけよう」

少女の目の前には昨日もみた暗い穴。「ウサギの穴」。「ワームホール」が開いていた。

少女はためらい無くその虚無に堕ちていった。

そして、少女は目を覚ます。

偽りの、虚構に目を覚ます。

魔術師の用意した、絶望の世界に目を覚ます。

神楽 「狂気と殺戮」

現 The Heroine's Side

八、

ピピピ、ピピピ、ピピピ……。

けたたましいアラームが鳴り響く。

黒髪長髪の少女はアラームのスイッチを叩きつける。

むくりと上半身を起こす。おかしな夢のせいでいまひとつ寝た気がしない。しかし、あの不可解な状況から救い出してくれた目覚まし時計はある意味救世主でもある。……まあ、昨晚は割りと楽しめたわけだが。

なにしろ、どこまでも頭の痛くなる夢だ。どうして夢でまで物理について考えなければならぬのだろうか。物理苦手なのに。

しかし、少年の面影を残す夢に少女が心惹かれ始めたことは否定できない。

着替えて、顔を洗って、朝食の支度。少女はこの決められた一連のパターンをいつもどおりにすばやく済ます。

朝食を作りながら、テレビのスイッチを入れて、ニュースをつける。あいにく、ニュースではなく、占いだった。

「……それでは、今日の占いです」

まあ、しかし今日もニュースという気分ではなかったもので、占いはちょうどよかったともいえる。さてさて、今日の運勢は？ フライパン片手にテレビを見る。ちなみに少女はさそり座だ。

「……。さそり座の貴方は、今日は大きな失望を感じることでしょ
う」

なんて物騒な占いなんだろう。普通、当たり障りなく、まずまず、くらいには言うだろうに。

というか、昨日も同じことを言っていなかっただろうか？ やる気あるのだろうか、このテレビ局。

「ラッキーカラーはブルーです」

青か……。

というか、昨日も青だった気がするのだが？ やる気が無いのか？ このテレビ局。

食卓の上に「青い薔薇」。とりあえずはこれが今日も運勢を良くしてくれるらしい。はなはだ怪しいものだが。

しかし、この薔薇、二日たってもいまだに綺麗だ。

「さて、支度して出かけるかな」

それから少女は登校の支度を済ませ、家を出る。

今朝は病院には寄らない。なぜなら、無駄だからだ。葛木命刻は目を覚まさない。それは間違いない。あの空間において、そんなことはありえない。そう、少女は確信していた。

とりあえず、学校に行つて、帰りに寄ろう。そう思つて、少女は登校した。

昼休み。少女は一人昼食を食べる。

場所は教室。であれば、周りにはクラスメイトたちがいるが、葛木命刻の不在の中。それも、意識不明の重体だというのに。楽しくおしゃべりする気にもなれず、また、楽しくおしゃべりしているクラスメイトたちの中にもいたくなかったため、少女は一人で昼食を食べる。

黙々と食事をする、いやでもクラスメイトたちの会話が聞こえてくる。

そもそも、つい最近まで、このクラスはこんなに冷たいクラスじゃなかった気がするのに、どうということだろう。少年が入院したとなれば、ほとんどの人間が心配していただろうに、どういうわけか

今の彼らは一切そんなそぶりは見せない。

このクラスは変わってしまったのだろうか。そう少女が考えていると、その間もクラスメイトたちは楽しそうにおしゃべりをしている。

たわいもない話ばかり続けていたが、その中に、聞き流せない話が出てきた。

「命刻君、大丈夫かな？」

「きつと大丈夫だろ、アイツしぶとそうだし」

「早く良くなるといいよね」

「まあな」

葛木命刻のことなどすっかり忘れているのではないかと思っていたクラスメイトたちが彼の身を案じている。そう感じて少女の頬は弛緩する。

そうだ。このクラスメイトたちは自分が思っているほど冷たい人間たちではなかったはずだ。どういうわけか、葛木命刻が入院してから、クラスの雰囲気ガラッと変わってしまった気がしたが、それは自分の思い違いだったのかもしれない。

「でも、笑っちゃうよね。神楽ちゃん助けに入って自分が入院しちゃったんでしょ？」

え？

「うーん。助けに入っただのはかつこいいんだけどね」

「ついでに言うと、代わりに怪我したのもかつこいいよね」

「おいおい何言ってるんだよ？ アイツが怪我したのは、別に代わりに車に轢かれたとかじゃないだろ？」

「うんうん。たしか、壁に激突したんだっけ？」

「くすくす。なんか、らしいよねー」

「そうそう」

「あははははは」

みんな、なにを言っているの？

少女の心が黒く溢れかえっていく。

「そもそも、運動できないんだから、かつこつけようとするなよな」

「いやいや、でもそうしたら一条さんは助からなかったじゃない」

「そうか……。あ、そうだ、こういうのはどうだ？ 一条を助けて、

自分は代わりにトラックにはねられて瀕死の重体」

「お、それならっこい！！」

「たしかにねー。彼もどうせ怪我するならトラックにはねられていたらよかったのに」

「そうしたら、超ヒーローだよね！」

「かっ
こい
い！
！」

「でも実際は、壁に激突」

[illegible]

クラス全員が笑う。廊下の奴らまで笑う。クラスが嗤う。廊下が嗤う。隣のクラスが笑っているのが聞こえる。クラスが嗤う。廊下が嗤う。隣のクラスが嗤う。そして、その隣が。その隣も。その隣も。

嗤う。みんな嗤う。聞こえるはずもないのに、全校が嗤っている。

少年の勇気を嗤っている。あの悲劇を嗤っている。現状を嗤っている。嗤っている。嗤っている。

「あ、あはは、あははは……」

少女の雰囲気が変わり、乾いた笑いを漏らす。

「くすくす。あはは」

そんな少女にクラス全員が、廊下の学生が、隣のクラスが、教務室が、全校が、凍りつく。

強い意志は具現する。

それは、世界の隠された基本法則。

「『かつこいい』？　くす。なら、貴方たちも格好良く死なせてあ

げるわ」

そして、少女の黒が溢れかえった。

「きやあああああああああ！！」

「うわあああああああああ！！」

轟轟と少女の周りを黒の嵐が包み込む。

黒の嵐は少女の近くにいたいくらかのクラスメイトを飲み込み、壁に叩きつける。

それを見て、いくらかの生徒は叫びながら逃げ出し、残りの生徒は足がすくんで動けなくなる。

「あはははは。いいわよ。格好良く死になさい」

逃げ惑う生徒たちに少女は腕をかざす。

「逃がさない」

少女の黒が渦を巻いて彼らを飲み込み、一瞬にして生徒たちの命を奪う。黒の渦はまるで削岩機のように、圧倒的な暴力で生徒たちを粉々に、バラバラに砕いていく。

「くすくす。派手に逝きなさいよ。その方が格好良く死ねるわよ」

逃げ出した生徒たちは残さず血潮と肉塊に成り果て、黒の嵐の中、壁に張り付いている。

「あははは、バラバラじゃないの」

バラバラになった生徒たちのパーツを見、気を失うもの、少女に命乞いをするもの、それらも少女は一切の容赦なく破砕する。

「なに？ あきらめたの？ あはは、まあいいわ。死になさい。そこで震えてる貴方も、飛び切り格好良く死なせてあげるから」

その教室という限定空間は黒の嵐と血潮と肉塊と叫び声で満たされた。

だが、少女の黒は一向に納まらない。黒は轟轟と渦を巻きながら、廊下、隣の教室、そしてその隣の教室と順々に通過する。

「あはははは。みんな格好良いわよ。だって、バラバラに分裂して

壁に張り付くなんて芸当、普通できないもの」

廊下が叫びと黒と彼らの血潮で満たされ、隣の教室から叫びと殺戮の音が聞こえる。

轟轟、轟轟と黒がとどろき、生は叫び、血潮が弾け、肉塊が張り付く。阿鼻叫喚の殺戮音を聞きながら、少女はまた黒を溢れかえらせ、教室すらも殺戮する。

「まだまだ、もっと叫んで。もっと赤い血潮を撒き散らして」
上の階や下の階からも殺戮音が聞こえてくる。

「いいわ。これこそが殺戮。暴力の芸術。みんな、格好良いわ」
少女の黒は、教務室すらも殺戮し、少女の黒は校舎全体を包み込み、殺戮しつくした。

少女の意思が学校という限定空間を完全に飲み込み、塗り替えた。少女の黒が、全校の生を飲み込み、死に塗り替えた。

そして、少女の黒は学校の周りをも飲み込み、全てを黒に帰した。視界全てが虚無に通ずる黒に塗り替えられたのを確認した少女は極上の笑みを浮かべ、その場に倒れた。

あるのは、絶対の虚無のみ。少女は、彼女の世界を殺戮した。

狭間 「我は『殺戮』なり」

狭間 The Murderer's Side

三、

白。

黒。

白と黒の、パノラマの世界。

一条神楽の、壊れた世界。

一条神楽が、壊した世界。

「ワタシ」が此処に逃げ込んでから、ずいぶん長い時間がかかった。

「ワタシ」は此処を探索してみたが、あるのは白黒の花屋とその周囲、そしていくらかの人々のみ。

探索も何も、此処はほとんど何もない。本来続いているべき道も、今はその先が虚無へと続いている。

きつと、此処は一条神楽の捨てた世界なのだろう。彼女の捨てた世界だからこそ、「夢の虚部」から独立し、あの恐ろしい「自我の爆発」から逃れられたのだ。そして、これからも「自我の爆発」の影響を受けることはないだろう。「ワタシ」はまだ主観を持っていないが、それまでは此処に隠れていよう。一条神楽は葛木命刻を失ってから世界に絶望しているから、またすぐにでも新しく世界を壊して此処に届けてくれるだろう。

世界に触れれば、「ワタシ」の「客観」も「主観」を持つだろう。それこそが、否、それだけが「客観」の「ワタシ」が望むたった一つのもの。「客観」が「主観」になることのみが、消え行く自分のもつとも望むもの。

ならば、何か行動しよう。

なにをしようか。

何ならできるのか。

……「客観」しか持たない「ワタシ」が何かしたいなどという意思を持つはずもない。

なら、「客観」たる「ワタシ」は、どうすればいい？

このパノラマの世界で、何をすればいいのか？

このパノラマの世界は、何のためにあるのか？

死んだ世界。

殺した世界。

殺戮された世界。

殺戮されるだけだった、この世界。

そこで気づく。

この世界は、ある一つの現象によって統制されてできた世界なのだ。

すなわち、「殺戮」。

この世界は、「殺戮」たる意思によって統制され、「殺戮」され、「殺戮」たる状況を作り上げた。

あらゆる意思を塗りつぶす、過剰なまでの「殺戮」。

すなわち、この世界は「殺戮」。

それ以上でもなければ、それ以下でもない。

此処に存在する状況は「殺戮」のみ。

此処に存在する意思は「殺戮」のみ。

此処から得られる物は「殺戮」のみ。

然らば。

此処でなすべきことは「殺戮」のみ。

然らば。

此処にいるワタシとは「殺戮」である。

然らば。

此処でワタシは全てを「殺戮」するのみ。

「なら、殺戮しよう」

驚く。「ワタシ」が思考した。

これが、「主観」なのか？ たとい、その「殺戮」たる限定空間の強靱な意志に影響されたのだとしても……今のは、「客観」たる「ワタシ」の思考ではない。

此処に存在する、「ワタシ」が自発的にそう思考した。

「殺戮」の中にあつて、「自分は殺戮したいのだ」と思考した。歓喜する。「ワタシ」が思考した。ならば、その思考に身をゆだねて。

この空間を、再度「殺戮」しよう。

右腕に、一振りの日本刀。

ひたすらに美しい、流麗なるそのフォーム。

西洋の剣のように、無骨でない。ある種の美意識がそこには内在している。

叩くのではない。斬るのだ。

日本刀は、その剣自体が暴力。

ひたすらに美しく「殺戮」する。

「殺戮」たる「ワタシ」に最も似合った凶器。

「ワタシ」はこれで、「殺戮」しよう。

「さあ、殺戮しよう」

花屋の周りで井戸端会議を開いている主婦たち。

まずは、その一人の首筋を、切断する。

音もなく近づき、音もなく切断する。

どう切断すればいいのか？

どう切断するのが最も効率が良いのか？

どう手際よく切断するのか？

そもそも、切断できるポイントはどこなのか？

何もかもが、全て分かる。

なぜならば、ここは「殺戮」で「ワタシ」は「殺戮」だからだ。

「殺戮」たる空間に産み落とされた「ワタシ」は「殺戮」ででき
ていて、「殺戮」の何たるかを、熟知している。

「客観」たる「ワタシ」は舌を巻く。人間が、息の仕方を、心臓
の動かし方を生まれたときから知っているように、この「ワタシ」
は「殺戮」を完全に理解している。

主婦の首筋。最も「殺戮」しやすいポイントに、最も「殺戮」し
やすい角度で、もっとも「殺戮」しやすい速度で、「殺戮」たる刃
を打ち込む。

瞬間。主婦の一人は言葉を失った。何しろ、首から上がない。

驚きに目を見開く主婦たちも、すぐに声を失った。何しろ、首か
ら上がなくなった。

「ワタシ」は瞬間に、四人の主婦を「殺戮」した。

瞬間において、一切の音はない。驚く主婦は悲鳴を上げることす
らかなわず。斬りおとされた首は、鮮血を上げることすらかなわな
い。

四人の「殺戮」が終わると、今頃になって彼女たちの時間が動き
出すかのように、首を失った胴体が鮮血を上げる。

その中で、「ワタシ」は喜悦の笑みを浮かべながら血潮の雨に濡
れていた。

ひたすらに美しい「殺戮」。

悲鳴の中であらゆるを粉みじんにしていくような派手な「殺戮」
ではない。一切の無駄を捨てた、生命の剥奪。

何者も、自身の生命の剥奪に気づけない。抵抗できない。ひたす
ら一方的かつ、美的なまでに無駄を削除した「殺戮」。

これこそが、「殺戮」たる「ワタシ」の、「殺戮」行為。

何もかもを「殺戮」できる「ワタシ」だけの美しい「殺戮」。

「殺戮」から産まれた「ワタシ」の、たった一つの、しかし絶対的なアドヴァンテージ。

その空間内の生命を「殺戮」し尽くすのに、時間はそうかからなかった。

命刻 「真相は禁忌」

現 The Hero's Side

四、

クレアが帰ったあと、少年も冷め切ったコーヒーを飲み下し、すぐに病院に戻ってきた。

クレアの話は難解で、魔術という非日常を知り、しかしそれによって、姿の见えない魔術師への対抗手段を見つけた。

強い意志は具現する。

それは、世界の隠された基本法則。

魔術師の意思よりも、強い意志で神楽を助ける。神楽を助ける為に願う意思ならば、誰にも負けない自身がある。

加えて、自分にはその意思を上乗せする為の「魔術回路」というものも備わっているらしい。

少年は、先程病室を出たときとは全く違う、強い希望と意思を持って、病室のドアノブに手をかけた。

「っ！？」

そして、驚く。一条神楽の病室を包む、異質な空気がより強くなっている。

「いや……、別の何かが上乗せされているのかな？」

前回感じた異質とは違う異質。「一条神楽が起きない」と感じさせるような異質とは違い、今日新しく感じる異質は、人を近づかせない異質さだ。

恐らく、誰も近づかないようにしたのだろう。
明らかに、誰かにこの病室は操作されている。

少年はそう確信し、ドアを開けた。

気分が悪くなるほど淀んだ空気。病院であるから、空調はしっかり効いている。しかし、この病室には超排他的な意思の流れと、一条神楽に対する何らかの意思の流れが混在しており、中にいる人間は二つの強い意志に精神を翻弄される。

いるだけで、病室から邪魔だといわれているかのような圧倒的な威圧感と、不快感が押し寄せる。

その病室の中で眠る少女の寝顔は安らかで、相変わらず起きる気配はない。

そして、その少女の傍らに、この排他的な意思の流れの中、立つ人間がいた。

誰だろう、と思いながら少年は病室に入る。

ドアが閉まる音が聞こえると、間髪いれず、

「誰だ」

男が振り返った。

白衣を着込んでおり、眼鏡をかけた、痩せた中年男性。その顔は、少年も知っていた。

「あれ？ 霧玄先生？」

「む？ なんだ、君か。驚かせて悪かった。気にしないでくれ」

男は、ふうと肩をすくめ、緊張を解こうとする。

しかし、少年はそんな男をじっと見つめる。

「誰だ」。ありえない台詞だ。そして、この超排他的な空気の中、どうしてこの男はこの部屋の中にいるのか。自分はクレアに教えられ、また、もともとそうだったものを見抜く才能があると教えられた。から、この部屋を開けられた。しかし、他の人間はどうだ？ 普通の人間なら、この超排他的な空気に、知らず知らずにこの部屋を避けていることだろう。

一般人がこの部屋を開けることは、ない。

「またお見舞いかい？ 残念ながら、まだ彼女は君と御話できそうにないな。……しかし、彼女も喜んでいるだろう。こういった症状

の人間が回復するときには、誰かが傍にるのが大切だ」

男は表情をやわらかくして語りかける。普段笑わないのだろう。

口元を吊り上げているのが、恐ろしくわざとらしい。

「彼らが眠りの淵から現実に戻るとき、現実からの呼びかけが、彼らを助ける。もしも彼女が目覚めるようなら、名前を呼んであげると良い」

ははは、と笑いながら男は少年に近寄る。

「っ」

少年は身構えるが、男はその横を通過する。

「まあ、君も無理しないようにね。君まで入院、なんてことになったら大変だ」

そう言つて、男は病室を後にする。

男は笑みを作っていたが、最後までその瞳は少年を訝るようになめまわしていた。

「霧玄先生。貴方は……。いや、貴方なんですか？」

一般人がこの部屋を開けることがない以上、これはクレアによる説明で、いっそう確実性を増した。この部屋にいたあの男は明らかに異常だ。

この異常のために空いている席は、少年が知る中でたった一つ。すなわち、魔術師のみ。

「霧玄先生……。貴方が、魔術師なんですか？」

一人つぶやく。

誰に向けたものでもないが、それは少女に向かっていた。

あの男が魔術師。それだけは、あつてはならないことだ。他の誰が魔術師でもかまわない。しかし、あの男だけは、魔術師であつてはならない。

それは、少女の過去を知る少年だからこそ願望。

もしも、それが真実だったとき、少女は……。

神楽 「ラプラスの魔」

夢 The Heroine's Side

十、

「おはよう、アリス。目が覚めたかい？」

「……此処は？」

「君の夢」

「また、此処なのね」

「君の夢だからね」

少女は暗い森の中にいた。

暗いながらも邪悪な雰囲気は一切なく、むしろ陽気な雰囲気の森だ。不思議な森で、居心地が良い。

とても居心地の良いその森の空気に、少女は目を瞑り深呼吸する。すると、猫が三日月に口を切り開いた。

にんまりと笑っているように見えるが、少女を覗き込むその黄色の瞳と合わせて、どこか凶悪な笑顔に見えなくもない。とにかく、不思議な猫だ。

「今日も、ずいぶんと派手に壊したね」

「壊す？」

少女は嫌なことを思い出し、しかししばらくくれてみる。

だが、猫は何もかもを見透かすような黄色い瞳で少女を射抜く。

「君の現実を」

「……現実？」

「学校を殺したよね？ 君の持っている世界の大半が壊れたね」

「なによ、私の持っている世界って？」

「それは」

すると、影のような猫が、ザザザといいながら、ぶれる。

まるでトラッキングのあっていない映像のように、平面の猫が、ぶれる。

「検閲だね」

「なにそれ？」

それつきり猫は黙ってしまった。

じきに猫のぶれも納まり、いつもの奇怪なにんまり顔を見せる。

「さあ、アリス。ウサギを追いかけよう」

猫に促され、それ以上言及せずに少女は道を進むことにした。

奇怪な森、陽気な雰囲気、森を進むと、目前に白い物体が見えた。目を凝らすと、黒いタキシードを着て、白い耳が飛び出している。

「あ、ウサギだわ」

「ウサギだね」

淡泊な猫の反応も気にせず、少女は全速力でウサギに飛びかかった。

白いウサギは一度少女を振り返ると、首をかしげる。

そして、驚くべき速度で疾走し始めた。

「速い……！！」

「速いね」

ぴょんぴょん。どうしてそんなに速度が出るのか？ どんなに走っても距離は一向に縮まらない。

「はあ……はあ……！！ なんてあんなに速いのよ！！」

「ウサギだからね」

「意味が分からないわ！」

走る。

走る。

走る。

どれだけ走ったことだろうか。少女の息が切れ、体力も限界に差

し掛かったところ、ふと声をかけられた。

「そんなに走ってどうするのだね、お嬢さん？」

「ウサギを追いかけてるのよ」

「走ることに意味があるのかね？」

「走らないと追いつけないじゃないの！」

「ふん。なんて無駄な。たかだか移動だろう？ 点の座標移動をするだけで良いだろうに」

「意味が分からないわ」

現実には数学じゃないのよ。

「いいかね。自分を微分して積分すれば、どこにでも行けるのだ」

微分して積分する？ 元に戻るだけじゃない？ ……ああ、なるほど。積分するときに積分定数として任意の実数をつけられるから、それを調整すれば、好きな座標に行けるわね。

まあ、紙の上でできても、実際にはできるはずもない。

しかし、無駄に疲れた。走りながら思考するのはなかなか疲労が激しい。

「はあ……はあ……。疲れるから黙ってくれるかしら？」

「まったく、せわしないお嬢さんだ。見たまえ、私なんかぜんぜん疲れていないぞ」

「うるさいわね……」

そう言いながら、少女は初めて声の主を見る。

「……貴方、誰？ というか、何？」

「失敬だね」

疾走する少女の隣には、スーツ姿のタマゴがいた。

常に少女の隣に、宙に足を組んで浮遊し、すうーとついてくる。

眼鏡をかけて、スーツを着込み、異様に裂けた口の、タマゴ。

タマゴがスーツを着ているのだから、当然、スーツも丸い。

手足は細い。

不機嫌そうにタマゴが言う。

「まったく以って失敬だね、お嬢さん。人の名を聞く前に自分から

名乗りたまえよ」

「話しかけてきたのはそっちですけどね」

しかし、少女にはこのタマゴに見覚えがあった。

童謡「不思議の国のアリス」の続編「鏡の国のアリス」にそっくりなキャラクターが登場する。

本来、童謡「マザーグース」に登場するその厄介なキャラクターは、少女の隣を浮遊するそれにそっくりだった。

「仕方がないな、私の名は」

「貴方、『ハンプティ・ダンプティ』ね」

「鏡の国のアリス」において、アリスと「意味論」について論じるまったく以って迷惑かつ理解しがたいキャラクターである。

「たしか、こんな詩よね？」

ハンプティ・ダンプティ、堀の上。

ハンプティ・ダンプティ、落っこちた。

王様の馬みんなと、王様の家来みんなでも、

ハンプティをもとには、戻せない。

違ったかしら？」

超有名かつ、不可解なキャラクターである。

すると、隣のタマゴは真っ赤になって言った。

「無礼者ッ！！ 勝手に人の名前を決め付けて、あまつさえ囃し詩まで造るとは！！ 何たる屈辱だ。何たる屈辱だ。何たる屈辱だ！

！ 私はこれ以上の侮辱を受けたことがない。嗚呼。この無礼者め」

「あ、す、すみません」

突然激昂し始めたタマゴに少女はあわてる。

「じゃ、じゃあ、本当の御名前は？ あ、私は一条かぐ……じゃなく、アリスです」

「はあ、はあ……ふん。私はラプラスの魔という。今の無礼は、まあ、とりあえずは水に流そう。私も紳士だからな」

自分で言うことだろうか？

「あ、ありがとうございます」

「……アリス。ウサギが逃げちゃったよ」

「あ！ ああ〜」

猫のツツコミに少女は崩れ落ちる。

すると、タマゴ　ラプラスの魔　が声をかけてきた。

「なんだ、お嬢さん、ウサギを追いかけているのかね。無理だ。あきらめたまえ。あれは捕まえるとかそういう概念の外にあるものだ。一言で言えば、捕まえちゃいかん」

「はあ、はあ……どうしてですか？　ハートの女王がそう決めたからですか？」

まだ息が荒い少女に、タマゴは、ふんと不機嫌そうに鼻を鳴らす。
「ハートの女王？　ハートの女王だと？　私があんな女の言うことを聞いているとでも言いたいのかね？　止してくれ。私はあの女が大嫌いなんだ。それはそれは嫌いだ。まったく完全に嫌いだ。どれほど嫌いかというと、君くらい嫌いだ」

「どうも、すみません」

「嫌われたね」

「でも、どうして嫌いなんですか？」

「嫌いなものは嫌いだ。理由なんてありはしないね。強いて言うなら、好きな理由がない。いいか？　こうこうこうという理由で嫌いだ、なんていうのは本当の嫌いじゃないね。本当に嫌いだというのは、理由なんかないのだ」

「……私は、理由もなく嫌われたのね」

「いいや、君は嫌いだ。強いて言うなら、嫌いが理由だ」

「もういいです」

……意味は分かりませんが、貴方はそういう意味の分からないことを言う人ですから。と少女は付け足したかった。

「それにしても、お嬢さん。君はもっと私を畏怖したまえ」

「はい？　どうして、ですか？」

「私が怖くないのかね？　ラプラスの魔だぞ？」

「なんですか？　それ」

「私の名前だ!!」

そんなことは知ってます!! …… 勿論、声には出さない。

「アリス。君は知っているはずだよ」

「そんなこと言われたって……」

少女が困惑していると、タマゴが勝手に話し出した。

「まったく、私を知らないとは何事だ。まったく完全に遺憾なことだ。仕方がない、私の概略を説明しよう」

概略を説明しようって、自己紹介をそう表現するのははじめて聞いたわ。

「いいかね? 私は、あらゆる粒子の、それも分子・原子レベルの動きをまったく完全に瞬間的に観測できるのだ。つまり、私が話すことによって生じる空気の振動、音波の伝わり方、その他もろもろの全てを瞬間的に観測できる。それも、それも、だ。私はそれを、それが発生する前に完全に観測できる。要するに、あらゆる事象を、原子レベルで、いや、その荷電子レベルで観測し、それらが次にどう動くのかを、それらが動く前に、まったく完全に確定できるのだ。分かるかね?」

…… 分かりません。そう答えても良いのだろうか?

きつと良くなさそうなので、少女は適当に相槌を打つ。

「なるほど。それはすごいですね」

タマゴは自慢げに鼻を鳴らす。

「ふふん。いいか? 私はね、海のどこかで石を投げ込んだときに出来上がる波が、遥か離れた海岸に、どのような影響を及ぼすのかすら、まったく完全に観測できるのだ」

「すごいですね」

「だろう?」

そこで、タマゴは尚自慢げに鼻を鳴らす。

「ふん。いいか? 私を恐れるのは、それだけじゃない。私の能力がどういふことが分かるか?」

「どうって…… 何でもかんでも、原子レベルの動きから、『まっ

「たく完全に『予測できるのでしょう?』」

「そうだ。まったく完全に、だ」

「でも、それがどうしたんですか? あ、未来予知ができるってことですか?」

タマゴはあからさまに肩をすくめる。

少女の傍らの猫を見やり、ため息混じりに言う。

「はあ、シュレディンガーの猫よ。君も大変だな。こんな阿呆がパートナーでは。さぞかし大変だろうに。私なんか、こんな少しの間話ただけで異常なほど疲れたぞ? それこそ、まったく完全に疲れたよ」

そして、猫は反論しない。

恨むわよ……。

すると、少女の暗いオーラに気づいたのか、猫が少女に助け舟を出した。

「いいかい、アリス? よく考えてごらん。君は思考するよね?」

「してるわ。現在進行形で」

「ふん。それで思考しているというなら、脳が腐っているのだな」

このタマゴ、叩き落して黄身をぐちゃぐちゃにかき混ぜてあげようかしら。

「じゃあ、その思考はどこでしているか知ってる?」

「この阿呆が知る訳なからう」

「知ってますー。脳よ、脳」

「ほう。これは驚いたな」

このタマゴ、茹でて殻をむいてあげようかしら。

「そうだね。じゃあ、その脳は何でできているか知っているかい?」

「細胞?」

「ふん。阿呆らしい答えだ」

だから、このタマゴ、目玉焼きにしてあげようかしら。

「細胞は、何でできているのかな? つまり、究極的な構成物はなんだか知ってるかい?」

「……原子って言わせたいのよね？」

「そうだよ。よく分かったね」

この猫も、猫マンマにしてあげようかしら。（注、猫マンマは猫に乗せたご飯ではない）

「まったく以って驚きだ。この阿呆がそこまで思考できるとはな」

このタマゴも、タマゴご飯にしてあげようかしら。

「それが、どうかしたの？」

「つまりね、原子の運動を完全に予測できるなら、思考も予測できるということになるよね？」

「なるほどね。私たちの思考も、究極的には原子の運動だものね」

「そういうことだ。私が怖くなったか？」

「逆に言うと、どうなるかな？」

「逆？」

「そう、逆」

原子の運動から思考を読めるということの逆だから……。

「あ。つまり、私たちの思考というのは、原子の運動に左右されているということ？」

「ほう。阿呆にしては良い答えだ」

このタマゴめ！！

「ふん。だがな、その意味するところには気づいていないようだな、お嬢さん」

「意味するところ？」

タマゴは、ふふんと愉快そうに鼻を鳴らして少女を見やる。

「いいか？ 貴様らの思考は、貴様らの脳がしている。そして、その脳は原子の集合体だ。つまり、貴様らの思考というのは、能を構成する原子の状態によるのだ。分かるな？ そして、その原子の状態を予測できる者がいたらどうなるか。そして産み出されたのが、私『ラプラスの魔』だ」

「……そんなの考えてどうするのよ？」

「ふん。まったく阿呆だな、君は。いいか？ 私は原子の状態をまったく完全に知ることができる。そして、その後の状態もまったく完全に知ることができる。つまり。あらゆる原子の状態と、その未来の状態が私には分かるのだ」

このタマゴ、何が言いたいのかしら？ ……でも、この話、どこかで……。

「『ラプラスの魔』はね、とても怖い悪魔なんだ」

「怖い？ どこが？」

「何でも分かるんだよ」

「それが怖いのか？」

「怖しさ。だって、彼は僕らの思考を先読みできるんだよ」

「それはすごいと思うけど……」

「逆に考えるんだよ」

「逆？」

「そう。脳の原子の状態を知れば思考が先読みできるということは、つまり、僕たちが思考する前から、脳では何を思考するのが原子レヴェルで決まっているということなんだよね。それって、すごく怖いことだと思うんだ」

「眠くなってきたわ」

「つまりね、ラプラスの魔が原子の状態から僕らの思考を先読みできるということは、僕らの思考というのは、僕らがする前から決まっ
つていて、
僕らの意思では未来は変えられないということなんだよ」

「未来が、変えられない？」

「だって、そうなるでしょ？ 僕らの思考は原子レヴェルの変化によるもので、もしも、それをまったく完全に知り、予測することができるのなら、逆に、僕たちの思考は、僕たちの意思によるもので

はないということになる。そうしたら、僕たちが、『自らの意思で未来を切り開く』ということさえ、原子レベルで最初から決定していることになる。だから、未来は変わらない。それって、すごく怖いことだよな」

「……なるほどね。でも、実際にそんなの可笑しいじゃない」

「まあね。ラプラスの魔は存在しないってことになっているから。ああ、別にそんな悪魔が本当に存在するとかそういうことじゃなくて。それを立証したのが量子力学の、不確定性原理というやつなんだ。この前話したシュレーディンガーの猫がそれだね」

「あの、生きているか死んでいるか分からない猫ってやつよね？」

「そうそう。原子の状態って言うのは、観測するまで分からない。それまではランダムに確率論によって支配される。そういうことになっているからね。だから、ラプラスの魔はその瞬間ごとの原子の状態は『観測』できるけど、その後の『予測』はできないんだ」

「ふうん。すごいことなんだろうけど、凡人には理解できないわ。だって、存在しないものを作って、それが存在しない証明をしたって、意味ないじゃない」

「……まあ」

「物理学者って暇なのかしら？」

「それは酷いよ」

つかの間見た、幸せの記憶。

この夢は、命刻の面影が、ある。

つまらない現実なんかよりも、よっぽど

「つまり」

「私たちが思考したって、所詮それは原子の状態変化だから、意味はない。未来は変わらない。って言いたいんでしょ？」

「ほう。よく分かったな。てっきり君の脳は湧いているのかと思っ
たよ」

あくまで少女を見下す態度をとるタマゴに、少女は反撃をする。

「でも、残念ね。貴方には思考の先読みは出来ないし、私たちは自
分の意思で思考し、未来も変えられるわ」

「ふん。まったくの阿呆かね、君は。私の言っていることを理解し
ていないと見える」

「まったくの阿呆は貴方よ。だって、原子の状態は『観測』出来て
も、『予測』出来ないもの」

「何？」

すると、少女の隣で黒の猫が口を三日月に切り裂いて笑っていた。
猫は何も言わなかったが、少女は自分の考えが間違っていないと
確信し、タマゴに止めを刺す。

「だって、原子の状態は観測するまで決定されていないもの。とい
うか、観測されたときに確率論的に決定するんだったわね」

「だ、だから、なんだというのだ」

明らかに狼狽するタマゴに少女はとても楽しげに説明する。

「分からないの？ 簡単に言っと、原子の状態を予測することは出
来ないの」

「な。な、ならば、私は」

「未来の予測は一切出来ない、ただの観測者、ね」

「……ば、馬鹿なあああ嗚呼嗚呼嗚呼あっ!？」

叫んだタマゴはふわりと後ろに傾き、絶叫しながら落ちた。

タマゴの殻の一部が砕ける。

「へえ。ゆで卵だったんだ」

タマゴは殻が砕けたにも関わらず、その白い原型をとどめていた。

当然、殻が砕けて、茹で上がって固まった白身が見えている。

「わ、私の殻があつ」

そして、散々馬鹿にされた少女は哀れなタマゴに最後の報復を加える。

「ハンプティ・ダンプティ、堀の上。

ハンプティ・ダンプティ、落つこちた。

王様の馬みんなと、王様の家来みんなでも、

ハンプティをもとには、戻せない。

だつたわよね」

「こ、小娘ごときに」

そしてタマゴは地面に突つ伏した。

黙って笑っていた猫が口を開く。

「さあ、アリス。ウサギを追いかけようか」

「ええ。すつきりしたわ」

少女は機嫌良く、スキップしながら「ウサギの穴」……「ワームホール」に飛び込んだ。

命刻 「世界的抑止力」

現 The Hero's Side

五、

あれから少年は、常に少女の傍らで、祈り続けている。
強く、念じ続ける。

この病室の結界を塗り替える為に、一条神楽を取り戻す為に。
しかし、所詮は駆け出し……寧ろ、魔術に関して全くの無知とい
ってもいい少年が、魔術師の結界を塗り替えることは出来ずにいた。
少年はいつとも知れないタイムリミットに焦りながらも、その焦
りすらも吹き飛ばすほど集中し、強い意志で信じ続けた。
その時。

病室の空気が変わった。

病室内の超排他的な空気の中に、強い意志の流れが混じる。
強い意志は徐々に増していき、黒く、強い風となっていく。

黒く、強く。

黒く、強く。

黒く、強く。

意思の流れはひたすらな力の流れ。その他の空気を巻き込み、巻
き上げ、旋回していく。

黒く、強く旋回する。

嵐のように激しく、視覚的に強く訴える力の奔流。黒く強い旋廻。
荒々しく旋回するが、不思議にもまったくの無音。病室には換気
扇の音が聞こえるだけ。

荒々しく旋回するが、不思議にもまったくの無影響。病室のいか

なるものをも動かさない。カーテンすらなびかない。

黒の旋廻はいよいよ派手になり、吹き荒れる意思も非常に強力になつていく。

黒く。

強く。

旋廻。

黒く。

強く。

旋廻。

黒く。

強く。

旋廻。

黒く。

強く。

旋廻。

黒く。強く。旋廻。黒く。強く。旋廻。黒く。強く。旋廻。黒く。

強く。旋廻。黒く。強く。旋廻。黒く。強く。旋廻。黒く。強く。

旋廻。黒く。強く。旋廻。黒く。強く。旋廻。黒く。強く。旋廻。

旋廻。旋廻。旋廻。旋廻。旋廻。

そして、弾ける。

世界が、現れた。

全ては一瞬の出来事。荒々しい黒の旋廻も今は消え去り、病室は視覚的にも静寂を取り戻している。

そして、「それ」は口を開いた。

「それ」の容姿は、一言で言えば少女だ。歳は十歳を過ぎたくらいか。西洋風の少女で、雪のように白い肌に、真紅の瞳。幼い顔に似合わず、酷く落ち着いており、発せられる眼光は酷く冷たい。口

元を軽く吊り上げている。純白の質素なドレスを着、白のベレー帽の下には金色の長髪が腰まで伸びている。「それ」は、幼い外形に似合わず、腕を後ろに組んで少年を見上げる。外見は少女でも、「それ」そのものはまったく別のものだ。何か、強大な何かの寄せ集めのような、形容しがたい存在。故に、「それ」と呼ぶにふさわしい、ある種の畏怖を感じさせる神性。

「き、君は？」

「私？ 私は……名前なんてないわ。そうね、抑止力と呼ばれているものの一つよ」

「それ」は可憐な外見と、鈴のような声色に似合わず、口調は酷く落ち着いている。

「抑止力？」

「そう。世界が、世界である為にある存在。世界が今の形を保つ為に、それを脅かす存在を抹消する為の存在。それが、世界的抑止力。私はその一部」

「世界が世界である為に……？」

「はあ……」

未だに状況がつかめていない少年に、「それ」はため息を漏らす。「いい？ 世界の形が変わったら困るでしょう？ あるとき急に世界が平らでしたーとか、地球を中心に宇宙が回ってますーとかいう事態になったら大変でしょう？」

「それは……うん。困る」

「だから、そういう風に世界が変わろうとするときに、それを阻止するのが、世界的抑止力。世界だって、そうそう形を変えられたら迷惑なんだから」

そう言つと「それ」は、眠る少女の方へと歩いていく。

「何をするつもりだい？」

少年は、「それ」を危険に思い、神楽をかばうようにして間に割って入る。

「それ」は困った様に眉をひそめる。

「何って……話を聞いていなかったの？ お花を摘みにきたのよ」
凜とした、聞き心地の良い声。

「……花を摘みにきた？」

「そう。蒼い薔薇を、摘みに来たの」

「蒼い薔薇？」

「クス。その女の子のことよ」

「それ」は、眠る少女に視線を移す。

「摘むって……」

「殺すってことよ」

「なっ」

「はいはい、邪魔よ」

少年が身構えると同時に、「それ」の右腕が、彼を病室の端まで弾き飛ばした。

「が……っ」

肺から空気が一気に抜け、動けなくなっている少年をよそに、「それ」は眠る少女の隣に立ち、先程少年を部屋の端まで弾き飛ばした威力を持つ右腕を振り上げ。

「やめろっ！！」

眠る少女めがけて振り下ろした。

だが、「それ」の右腕は眠る少女を叩き潰すことなく、虚空で止まっていた。

「え……」

「ふう……まあ、やっぱり対策は講じているわよね……」

「それ」は、腕が止まったことがさも当然のように、全く戸惑う

こともなく右腕を下ろして少年に振り返る。

「抑止力を無効化する魔術が張られているわ。抑止力本体が本気になつて動けば造作もなく壊せるでしょうけど、本体が動くには時間がかかるのよね……。全く、面倒だわ。ねえ、貴方」

やっと立ち上がった少年に、「それ」は声をかける。

「何だ……？」

少年の瞳には敵意がある。

それを感じていても、「それ」は臆することはない。力の差は歴然なのだ。

「貴方なら出来るわ」

「何を？」

「この娘を殺すこと」

「するわけがないだろう」

「まあ、そう言うとは思ったけど」

そう言つて「それ」は肩をすくめる。

「でも、ここでこの娘を殺してあげた方が、この娘にとつても、貴方にとつても、勿論私たち世界にとつても有益なのよ？」

「神楽を殺して、僕が喜ぶとでも？」

「そうは思わないけど、このままだと、この娘、魔術師に良いように利用されて、永遠に目覚めることなく、大変な罪を犯してしまうわ」

「大変な罪？」

「言つたでしょう？　世界が変わるつて」

「世界が変わる……どう変わるんだ？」

「秘密よ。だって、喋っちゃったら、次は貴方がそれをするかもしれないじゃない？」

「そんな話、信じられないね」

「でも、このままではこの娘が目覚めないこと、魔術師に利用されること、そして世界が変わってしまうことは間違いないわ」

「神楽は、僕が起こす」

「無理ね。貴方、ろくに魔術も使えないじゃない」

「それは……でも、絶対に起こす」

「凄い自身ね。ある意味、その意志の強さで何とかなるかもしれないけれど。でも、やっぱり『蒼薔薇』を仕留めたほうが確実なのよ」

「『蒼薔薇』？ 神楽のことか？」

「そうよ」

「どついう意味だ？」

「そのままよ。彼女の根底。彼女の起源。あらゆるを可能としてしまつ限界突破。彼女は、危険なの」

「危険？ 誰がそう決めた？」

「世界よ。そうでなければ、私は此処にいないわ」

「でも、君の目的は世界の安定を保つことだろう？ だったら、彼女を殺すよりも、魔術師を殺すべきだろう？」

「いいえ。この魔術師は確かに優れているけれど、彼の研究は成功しない。彼女以外ではね。彼女、『蒼薔薇』である彼女のみが、魔術師の研究を成功させる唯一の存在。なにしろ、『万能』なのだから」

「『万能』？」

「御話はここまでね。どうする？ 後悔する前に、『蒼薔薇』を殺しておかない？」

「絶対に殺さないし、殺させない」

「ふう……まあ、予想通りか……」

そう言つて、「それ」はそれほど残念そうにも見えない様子だめ息をつく。

「まあ、いいわ。こちらからが駄目でも、向こうから攻めればいい話だし。いくらなんでも、向こうからの攻撃には対策を練っていないでしょうしね」

「何を言っているんだ？」

「クスクス。貴方には関係のない話よ」

「それ」はスカートの裾を両手で軽く持ち上げて、上品に会釈す

る。

「それじゃあ、才能溢れる魔術師さん、ごきげんよう。願わくば、貴方の願いが勝ちますように」

にこりと微笑み、「それ」の全身はちかちかした粒子に霧散し、そのまま「世界」に溶けていった。

神楽 「恋人と殺戮」

現 The Heroine's Side

十一、

ピピピ、ピピピ、ピピピ……。

けたたましいアラームが鳴り響く。

黒髪長髪の少女はアラームのスイッチを叩きつける。

むくりと上半身を起こす。おかしい夢のせいでいまひとつ寝た気がしない。しかし、あの不可解な状況から救い出してくれた目覚まし時計はある意味救世主でもある。

……先日まではそう思っていたが、今では違う。むしろ、夢から醒めることが残念で仕方がない。愉快な夢と、悲壮な現実。比べたら、夢を望むことは間違っていないだろう。

着替えて、顔を洗って、朝食の支度。少女はこの決められた一連のパターンをいつもどおりにすばやく済ます。

朝食を作りながら、テレビのスイッチを入れて、ニュースをつける。あいにく、ニュースではなく、占いだった。

「……それでは、今日の占いです」

まあ、しかし今日もニュースという気分ではなかったので、占いはちょうどよかったともいえる。さてさて、今日の運勢は？ フライパン片手にテレビを見やる。ちなみに少女はさそり座だ。

「……。さそり座の貴方は、今日は大きな失望を感じることでしよう」

……またか。毎日毎日、同じことしか言っていないように感じるのだが、このテレビ局、やる気があるのだろうか？

とすれば、ラッキーカラーも分かりきっている。

「ラッキーカラーはブルーです」

やはり青。しかし、三日も続けて同じ占いとは。此処まで手抜きだとかえってすがすがしくもある。

食卓の上に「青い薔薇」。とりあえずはこれが今日も運勢を良くしてくれるらしい。はなはだ怪しいものだが。

しかし、この薔薇、相変わらず瑞々しい。

「さて、支度して出かけるかな」

どこに？

そうだ。学校は昨日壊してしまった。では、他にどこに行く？

私を知っているところといえば、後は少年の眠る病院くらいだ。

……考えていても始まらない。仕方がない。学校もないのだし、病院に寄ろう。起きない少年を見に行こう。

そして、少女は家を出た。

冬森市県立総合病院、四階、四百六十八号室。

ネームプレートは「葛木命刻」。

自分を助け、それ以降眠り続ける少年に少女は会いに来た。

少年は依然眠り続け、病室の異質な空気はやはり変わらず、少年が目覚めないことを決定している。この空間においては、少年は絶対に目覚めない。それは、その場にいるものであれば、誰もがそう気づくであろう。それほどその病室は異質なのだ。

先日、少女はこの異質さにあきらめ、絶望し、この部屋から退室した。今日来たことも、少年が目覚めることを望んできたのではない。尤も、少年が目覚めることは少女が切に願うところであるが、この異質な空間において、それはまず有り得ないと少女は判断する。つまるところ、少女が此処に再び来た理由は一つだ。特別此処に用事があったわけではない。しかし、学校までも壊した少女は、自分の知る世界は、あとは家とこの病室くらいなのだ。となれば、自然此処に足が向かうのは当然であろう。

少女は面会者用の椅子に腰を下ろし、少年を見つめる。

どうしてこうなってしまったのだろ。あの事故から、世界が崩れていく。

少年は目を覚まさない。事件のあった花屋の近くの主婦たちは少年を笑う。個人的に気に入っていたクラスメイトたちも、信じられないくらい薄情で、少年を笑った。学校までもが笑った。そして、この病室。少年を絶対に目覚めさせないようにしている。

「ここよ、ここの患者さん。何でも、女の子を事故から助け出して勢い余って……」

廊下から看護師たちの声が聞こえる。

分かる。どうせ、また彼女たちも少年を笑うのだろ。今朝の占いを思い出す。「大きな絶望」。まさにそれだ。これ以上世界に絶望するのは願ひ下げだ。

ならば。

彼女たちが禁忌に触れる前に、もうこの病室を破壊してしまおう。彼女たちが禁忌に触れる前に、もう彼女たちを破壊してしまおう。そう。

今までと同じように。

ここも殺戮しつくそう。

強い意志は具現する。

それは、世界の隠された基本法則。

もう要領も覚えた。

自分の中の殺意を形にする。

顕現する。

全て、選択の余地なく、限られた空間を殺戮しつくす嵐を。

そして、少女の黒が溢れかえった。

少女から放たれた黒は圧倒的な破壊力を持って、全てを破壊していく。

轟轟と。

病室を。

轟轟と。

看護師達を。

轟轟と。

近くの病室も。

轟轟と。

廊下も。

轟轟と。

ナースステーションも。

轟轟と。

入院患者たちを。

轟轟と。

外来患者たちを。

轟轟と。

医師たちを。

轟轟と。

壁も。

轟轟と。

足元も。

轟轟と。

空気さえも。

轟轟と。

眠る恋人さえも。

少女の黒は、あらゆるを殺戮した。

視界はまったくの黒。否、黒すらない虚無。

その中で、少女は静かに涙を流していた。

静かに、決別するかのごとく、表情は凜としていた。

その中で、少女の目の前に黄色い二つの瞳が覗いている。

やがて、二つの瞳の下に黄色い三日月がくりぬかれる。

「やあ、アリス。ずいぶん派手に壊したね」

それは見知った顔になり、にんまりと笑っている。

「どうしてかしら。私、涙は流れているけど、悲しくないの」

少女はそつと震える声で猫にたずねる。

猫はにんまり笑いを崩さない。

「悲しいから涙は流れるんだよ。でも、悲しくないのは悲しくないからだよ。つまり、悲しいことだけど、悲しくはないんだね」

相変わらずの要領を得ない返答に、少女は微笑む。

「貴方は変わらないわね」

「つい最近あったばかりだけどね」

虚無の中、少女はまた微笑む。

「さあ、シロウサギを探しに行きましょうか」

猫は先ほどよりも、やわらかく見える笑顔をつくる。それは少女の目の錯覚だったのかもしれないが、どこか優しさを感じさせた。

「うん。シロウサギを探しに行こう」

そして、少女は夢を見る。

神楽 「ジャヴァウォック」

夢 The Heroine's Side

十二、

相変わらず不思議に陽気な森。

少女は毎日毎日続く夢に、当然のように適応する。

普通に考えればどうあってもおかしい、夢が続くという状況。少女はそのもう一つの世界に降り立った。傍らには当然のように影のような猫を侍らせて。

「さあ、シロウサギを追いかけましょう」

少女は意気揚々と森を進む。

「……」

しかし、少女の提案に猫は答えない。

ただただ、その場にとどまり、にんまりと笑っているだけだ。

「どうしたの？」

少女が問うと、

「どうやら、壊しすぎたみたいだね」

猫は今まで以上に三日月状の口を裂いた。

少女が目を見開くと、異変はすぐに起きた。

「え？」

陽気だった森が一瞬にして炎に包まれる。

綺麗な青空は一瞬で朱に染まる。

世界は一瞬のうちに業火に包まれる。

「どうということ!？」

「世界を壊しすぎたんだよ」

慌てふためく少女に猫はいたって冷静に答える。

少女はわけもわからず道を駆ける。

不思議と少女の進む道だけは炎に包まれていない。

「どういふことなの？突然森が燃えるなんて！？」

「アリスの中の抑止力が働いているんだよ」

グ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
ラ
ラ
ラ
ラ
ラ
ラ
ラ
ラ
ッ
！！！！

森を駆ける少女の後方で、聴いたこともないような咆哮が上がる。

「何、今の!？」

「アリスの中の抑止力さ。ジャヴァウォックって言うんだ」

「ジャヴァウォックって、あのドラゴン？」

「どのドラゴンだか知らないけど、龍だね」

「ジャヴァウォック」。「鏡の国のアリス」に登場する正体不明の龍だ。

「それで、ど、どうして、そのジャヴァウォックが追いかけてくるのよ!？」

「君が世界を壊しすぎたからだよ」

息も絶え絶えに駆ける少女の隣をすうーと移動する猫は説明を続ける。

「全ての世界は意思を持っているんだよ。その世界の大きさはどうあれ、ね。それで、世界は意思を持っているんだけど、一体なにを最も願うと思う?」

「何って……。分からないわ」

「まあ、アリスたちの最奥の願いと同じだよ。それは、生きること」「生きること？」

「そう。どんな世界だって死にたくないんだよ。それで、世界は自分が死んだり、形を変えなければならなくなることすごく嫌うんだね」

「形を変える？」

「難しい話だけど、世界が一つの形を保っていること自体が、本当は幸福なことなんだ。だって、原子や分子は絶えず運動してるんだからね。一応言っておくけど、今の世界の形を決定しているのは人間だよ。まあ、難しい話だから分からなくても仕方ないけど。まあ、

そういった事態に陥りそうになると、世界はそれを抑止しようとするんだ」

「さっぱり分からないわ。それで、その話と私が怪獣に追われる話とどう関係があるの？」

「そうだね。この世界は『一条神楽』という一つの世界なんだよ。つまり、この世界は君が創っているんだね。正確には、君のもっと深いところだけど。とにかく、この世界は『一条神楽』が全てなんだ」

「……それで？」

「でもね。最近『一条神楽』は自分の世界を壊して回ったんだ。それがどういことだか分かるかな。つまり、『一条神楽』は自分を壊して回ったということなんだよ」

「自分を、壊して……」

「すると、『一条神楽』自身も不安定になる。いずれはこの世界もろとも『一条神楽』は消滅するだろうね」

「消滅って……」

「だから、この『一条神楽の世界』は抑止を働かせることにした。それが、あのジャヴァウオックだよ」

「……待つて。ちよつといい？ 私を殺したら、この世界も死んじやうんじやないの？」

「確かに『一条神楽』がいなければ、この世界は消滅する」
「だったら」

「でも、その『一条神楽』は君である必要はないよ」
少女ははつと息を呑む。

「つまり、ジャヴァウオックは、『一条神楽の世界』は 君を殺して、新しい『一条神楽』を代替に置いて安定を保とうとしているということだよ」

「そんな……」

「とりあえず逃げればいいよ」

「言われなくても!」

駆ける少女の後方でまた咆哮が上がる。地面を揺らしながら、咆哮し、世界を燃やしながら自分を追いかける怪物に少女は心から恐怖する。

どこか逃げ場を。

あの恐ろしい咆哮から逃れたい。

そう思っていたころ、目の前で森が開けた。

目の前には大きな城があり、少女のすぐ手前には城門がある。

「ハートの女王の城だよ」

城門の前には大きな芋虫らしきものが、葉巻をふかしているが、城門自体は開いていた。

後ろでは怪物の咆哮が上がる。

考えている暇はない。とにかく、あの怪物から逃れなければ。

少女は芋虫を無視して城門を突破する。芋虫は何も言わない。

少女が城門をくぐると、タイミングを計ったかのように、門が大きな音を立てて閉まった。

大きく重そうな鉄の門が閉まり、怪物の咆哮も聞こえなくなる。

城門の先は、ホールのような空間になっており、少し先にはまた扉がある。

ホールの中では、「不思議の国のアリス」のトランプの兵士たちがせわしなく走り回っている。一人として、歩いていたり止っているものはいない。

ハートの女王は人使いが荒いのかしら？

ホールの中はトランプの兵士たちが慌しく走り回っているが、それ以外に異常はない。おそらく、この城はジャヴァウォックの影響を受けていないのだろう。

「ハートの女王はこの世界で、アリスについて重要、強力な存在だからね。この世界では誰もハートの女王に介入できないんだよ」

「つまり、此処は安全ということ？」

「そうなるね」

「……ふう」

少女は安心し、ついにその足を止めた。

「でも、これからどうしましょう」

「とりあえず」

猫が今後の方針を提案しようとしたとき、少女を白い煙が包み込む。甘い、砂糖を思わせるそれは、葉巻の煙だ。

「え、なに？」

白い煙は少女を包み、少女をふわりと浮かせる。そして、そのまま少女を城門へと引き戻す。

「まって、どうということ！？」

少女はもがくが、空中ではたいした抵抗にならない。何より、相手は煙だ。その先で城門が大きな音を立てて開く。

そして、ついに少女は城門の外に連れ出された。

城門の外には先ほどの芋虫がいて、さらに正面には恐ろしい怪物がいた。

怪物を意にも介さず、芋虫が不機嫌に言う。

「お嬢さん。ルールは守ってもらわないと困るのだよ。でないと、何のためのルールが分からん」

しわがれた老人の声で芋虫は文句を言う。

しかし、少女はそれどころではない。

目の前には、恐ろしい怪物がいる。

コウモリのような翼を持ち、鋭く伸びた鍵爪、どんなものでも噛み砕いてしまいそうな鋸のような歯を持つその龍は、紅い瞳を怒りに燃やしている。五メートルはあるその巨体を前に、少女は動けない。

そして、芋虫を意にも介さず、龍が顎を開く。

「で？」

龍が言葉を話すことに少女は少なからず驚く。

「どういつつもりだ？」

その声は低く唸るようで、いくつもの声が混ざっているようだ。時折、ジ、ジとノイズのようなものが入る。

「どういつつもりで自分を壊す!!」

龍が咆えると、世界が震撼する。

「分かっているのか!? 貴様が何をしているのか!? 貴様に存在を依存している我々は、貴様が壊れれば消え去るのだぞ!! 何より、理由が真つ当なものではない!! 自分で自分を壊すなど、狂っているのか!？」

自分に向けられた叱責に、少女は言い返せない。

「ジャヴァウオック。君が……、抑止が働いているということとは、もう代わりが創られているのかい？」

答えない少女の代わりに、猫が問う。

龍は猫を睨み付けながら口を開く。

「そつだ。すでに代わりはいる。『夢の虚部』から離脱し、その小娘が壊した世界に生まれた新しい人格がな。当面はこちら側から接触することはできないが。何しろ、新しい要領を切り取ったところにいるのだからな。領域が違う。兎に角、その小娘が死ねば、いずれ、その新しい人格が主たる者となる」

「『夢の虚部』から離脱した？」

「貴様には関係のないことだ。誰もよく分かっていない。だが、この小娘の壊した世界の残骸、フラグメントからできている私にはその情報が混じっていた」

「フラグメント？」

やっと少女は口を開く。

「ジャヴァウオックは、その名の意味するとおり、『意味のないもの』として、アリスの『欠片』^{フラグメント}からできているんだよ」

「私の真名を口にするな!」

龍は真紅の口腔を開き、世界を燃やす業火を放つ。

空間をゆがめるほどのその炎は少女と猫に一直線に向かう。あたればひとたまりもない。そして、避けることもかなわない。

恐怖に目を見開く少女と、相変わらずにんまりと笑う猫。

しかし、炎は彼らを燃やすことはなかった。

とたん、少女の内に黒い感情がこみ上げてくる。

「まっとうではないというのだ！！ たかだか男が一人死んだだけだ！！ その程度で世界に絶望するなどと、心が弱いにも程がある！！ 死んだ男など放っておけ！！」

放っておけ？

言わんとしていることは理解できる。要するに、済んだことは仕方ないということだろう。

「ジャヴァウオック。その位にしておけ。大人気ない」

芋虫がたしなめるが、龍の激昂は止まらない。

「そもそも！！ 何だというのだ？ ん？ あの男はお前を助けて死んだのだ！！ 本望だろうが！！」

言いたいことは、十分分かる。でも。

「ふん。そもそも、できない奴が分不相応なことをするからこうなるのだ！！ 貴様も知っているだろう？ 奴は壁に頭を打って死んだのだ！！」

それ以上言わないで。でないと。

少女の瞳が冷酷なものへと変わっていくのが、激昂に瞳を怒らせる龍には気づけない。

「アリス」

「黙っていて」

猫がたしなめるが、少女はそれを制す。

「そうだ！！ 奴は壁に頭を打ち付けて死んだのだ！！ 貴様を助けたことによるものであることは否定しないが……奴の死は貴様の死を肩代わりしたものではない！！ 奴自身が呼び寄せた死だ！！ そもそも、その死に方というのが」

それ以上言わないで。でないと。

少女は龍が禁断の言葉を吐くことを、心の片隅でないように願いながら、その言葉に対する制裁の準備を進める。

ドロドロ、ドロドロと少女の黒があふれ出す。怒り、絶望、さまざまな激情が入り混じった強力な意思は、少女という器を溢れかえ

らせる。

もし。

もしもこの龍があの一言を口走ったとしたら。

破壊しよう。

花屋のように。

破壊しよう。

学校のように。

破壊しよう。

病院のように。

破壊しよう。

あの黒で。

要領も覚えた。激情に任せなくても、あの黒は体現できる。

強い意志は具現する。

それは、世界の隠された基本法則。

それを認識した少女は、世界に自身を具現できる。少女にとっては、それが「黒」だった。

言う。

きつと言う。

あの龍は言ってしまう。

だから。

準備する。

自身に「黒」を満たしておく。

世界に「黒」を具現できるように。

「アリス」

猫が少女をいさめる。しかし、少女は答えない。答える必要なんてない。なんとわれようが、引けないものは引けない。

しかし、猫は言う。これだけは、と少女に伝える。

「アリス。良いのかい？ ジャヴァウォックを殺すということは、君を殺すということだよ」

しかし、少女がその言葉の意味するところを図り知る前に、龍が

禁断の一言を口走ってしまった。

「勢い余って頭を打ち付けて死んだ？ はっ！ 実にくだらん！！

阿呆らしい！！ 馬鹿馬鹿しい！！ 奴は無駄死にだ！！ いや、

無駄ではないか、助けることには成功しているからな！！ だが、

だがしかし！！ その後に、自分から死ぬなどと…… 実に馬鹿馬鹿

しい！！ そう思わんのか？ あんな阿呆な男のことなどさつさと

忘れ、世界に生きる！！ そうだ、あんな阿呆な

「もういいわ」

瞬間。

少女の「黒」が溢れかえった。

狭間 「芸術的殺戮」

狭間

The Murderer's Side

四、

白。

黒。

白と黒の、パノラマの世界。

一条神楽の、壊れた世界。

一条神楽が、壊した世界。

「ワタシ」がここに降り立って、長いこと経った。

はじめは「花屋の周囲」しかなかったが、じきにその虚無への道に続きができた。先を進めば「学校」がある。相変わらず、世界は白と黒でできている。旧い時代を映したような世界であるが、その中の時間は動いていた。「学校」の生徒たちは、いつものように騒いでいる。休み時間だろうか。兎に角、分かることは、「一条神楽」は「学校」までも捨てたということだ。

何にしても、「ワタシ」とってこれは好都合だ。「客観」が「主観」に変わるために、多くの世界に触れさせてみる。それが現在の方針だ。そして、この方針はうまくいつている。「客観」たる「ワタシ」は、このパノラマの世界、すなわち「殺戮された世界」で、「殺戮」したいという意思を持った。

自ら思考し、「殺戮」したいと欲した。この欲求こそが「主観」だ。現在はこの「殺戮」たる空間に流されての惰性である可能性も否定できないが、それでも、これは精神の変化だ。

とりあえず、また様子を見よう。前回のように「学校」という捨てられた世界を探索しよう。そして、何かに触れることによって、「ワタシ」が何かを望めば、それは成功だ。

そうして、「ワタシ」は「学校」に入った。

教室の前に来て、突然「ワタシ」が立ち止まる。

どうしたことだろうか？

すると、「ワタシ」は右腕に例の日本刀を携えていた。

「さあ、殺戮しよう」

驚いた。まさか、すでに「ワタシ」が意思を持っているとは。「殺戮」したいと望んだ。この「殺戮」たる限定空間の瘴気に当てられたのか？ しかし、それでも良い。兎に角、「客観」が「主観」的に何かを望むということが、「主観」への変化の一步なのだ。それが空間に作用されたものであってもかまわない。

「ワタシ」は教室に入る。

いくらかの生徒たちが「ワタシ」に気づき、気さくに挨拶をしてくるが、「ワタシ」が日本刀を持っていることに気づくと、教室がざわつく。

「お、おい、一条……それ」

勇気ある男子生徒が近づいてくる。

日本刀を指す右腕は震えている。

「ワタシ」はにたりと、ぞっとするような不気味な笑顔を浮かべていた。

「？」

ひうん。

風を切る音が聞こえたかと思うと、男子生徒の右腕が宙を舞っていた。

「あ、」

ひうん。

男子生徒は悲鳴を上げることすらできずに、首から上を失う。

ひうん。

ひうん。

ひうん。

男子生徒の周りに集まっていた三人も、首から上を失う。

忘れていたかのように、いまさらに首から血潮が上がる。

四人の男子生徒がスプリンクラーのように血液を撒き散らす中、誰もが悲鳴を上げることもできずに、「殺戮」された。

一人。また一人。次々と首から上を失っていく。

誰も逃げ出せない。誰も声を出せない。

降り注ぐ血潮の中、狂気に口元を吊り上げ、残酷な笑顔の浮かべながら、何の戸惑いもなく、一切の無駄なく、一切の打ち逃しなく、首を刎ねていく様に誰もが目を奪われる。

次は自分だ。そう分かっているにも、目を離せない。少女の動きは美的なまでに無駄がなく、その流麗さに吸い込まれるように視線を動かす。少女を見るのではなく、少女の動きを見るのだから、それは少女の軌跡を見ることが同義。動きに視線を奪われるばかり、逃げることも悲鳴を上げることままならない。

美しいものから目を離すことが誰にできよう。中途半端な美ではない。完成された、究極までに磨き上げられた「殺戮」。それはすでに一つの芸術だ。誰もそれから目を離せない。

逃げることも、悲鳴を上げること忘れて、誰もが少女の動きを目で追い、感動し、そして、首から上を失う。

血潮を吹き上げるスプリンクラーはすぐに教室にいた生徒数と等しくなる。

時間にしたら、ほんのわずかな時間だった。まさに一瞬で「ワタシ」は一クラスを「殺戮」しきった。

「殺戮」たる「ワタシ」のアドヴァンテージ。

降り注ぐ一条神楽のクラスメイトの血潮に濡れて、「ワタシ」の口元は喜悦に歪んでいた。

すばらしい。「客観」たる私は歓喜する。「ワタシ」が「主観」的に行動し、そしてその結果に酔いしれている。この調子で、「ワタシ」を完全たる「主観」にしよう。……尤も、その時が「客観」である私の最期でもあるが、構うまい。「客観」が「主観」に変わるその瞬間に立ち会う。それこそが私の目的だ。自分が消え去

っても構わない。

「ワタシ」は日本刀を一振りして、ピツと血を払う。相変わらず血潮を噴出している生徒たちには興味がなくなったのか、「ワタシ」は隣の教室を「殺戮」してかかった。

そして、「ワタシ」は「学校」全てを「殺戮」しきった。

神楽 「マクスウェルの悪魔と蒼い薔薇」

夢 The Heroine's Side

十三、

「驚いた。ジャヴァウオックを殺すとは。は、は、は」

龍が消滅し、世界を焼いていた炎も消えていく。

朱に染まっていた空も、透き通る青を取り戻し、世界は再び陽気を取り戻す。

城門では芋虫が葉巻をふかしながら、龍が少女の「黒」に巻き込まれ一瞬で消えた様子に目を丸くしている。しかし、特別驚いた様子もなく、相変わらずゆったりと葉巻をふかしている。

「ふう。じゃあ、シロウサギを追いかけましょうか」

「そうだね」

猫の同意を受け、少女は城門に向かう。

シロウサギはすでに城の中にいるであろうことは、森の一本道の行き止まりが城門であることから用意に予想がつく。問題は、ウサギがどこまで進んでいるか、だ。もし仮に、すでに女王よりも奥に進んでいたら、少女は女王と会わなければならない。そうなれば、女王も障害となることは必至だ。

「まだ遠くに行っていないと良いけど」

少女が城門を潜ろうとしたとき、バン！ と勢いよく城門が閉まった。

「お嬢さん。ルールは守ってもらわないと困る。でないと、何のためのルールなのかわからん」

「ルール？」

「そうだ。ルール。規則。法。決まり。約束事。それが、ルールだ。守らんと意味がない」

「それは分かるけど、何がルールなの？」

「ルールはルールなのだ」

「……」

「アリス？ 考えようよ」

「そうね。考えましょうか」

少女は芋虫を睨みながらそう言ったが、芋虫はゆったりと葉巻をふかすだけだ。

芋虫から聞き出すことはあきらめ、少女は思考する。

最初は通れたはずだ。

あの時と何が違う？

あの時は、……ジャヴァウオックに追われていた？ いや、それに意味はないはずだ。ならば？

ジャヴァウオックに追われて……走っていた？ 走ることが大切なのかしら？

……そういえば、中のトランプたちも走っていたわね。

そうだ。分かれば何ということはない。ジャヴァウオックの炎もあの中に強制的に連れ込まれていた。それを受けたトランプたちが連れ出された。おそらくは、止まったから。

つまり、この城門を突破するには、激しく運動することが大切なのだ。

「分かったわ」

「うん。じゃあ行こうか」

猫が満足そうにうなづくのを確認すると、少女は勢いよく走り出した。

「ん？ お嬢さん。ルールは」

「分かっているわ」

少女が走ると、城門が勢いよく開く。予測に確信を持った少女はよりいっそう速度を上げて駆ける。

前回は途中で止まったからいけなかった。ならば、この先の扉まで走りぬけよう。

トランプたちがせわしなく走り回るそのホールを少女は疾走する。

「マックスウエルの悪魔？」

「そう。マックスウエルの悪魔。この悪魔はすごいんだよ」

「ラプラスの魔よりも？」

「そうだね。ずっと実用的だよ。まあ、いないから使えないけど」

「相変わらず物理学者は暇なこと考えるのね」

「そう言わないでよ……。うん。気を取り直して、この悪魔、何がすごいかって言うとな」

「簡潔に三十字以内で述べよ」

「え？ ええと……。無理だよ」

「冗談よ」

「酷い……。こほん。この悪魔はね、すごく小さいんだよ。そうだね、原子くらい小さいんだ」

「それで？」

「原子くらい小さい悪魔を使ってこんなことができるんだ。まず、二つの部屋を用意する。二つの部屋は一つの扉で繋ぐ。それで、悪魔がその扉を開け閉めするんだ」

「何が言いたいのか？」

「空気って、原子の集合だよな。酸素とか窒素とか。そういうのも絶えず部屋中を飛び回っているんだけど、それには運動量に個体差があるんだ。つまり、激しく飛び回っているヤツと、ゆっくり飛び回っているヤツ。激しく飛び回ると暖かくなるし、動かないと冷たくなる。ここまではいい？」

「なんとか」

「ううん。エアコンの原理だね。暑い部屋の中から水蒸気を外に飛ばすことで、部屋の空気の運動量が下がって、涼しくなるんだよ」

「知らなかったわ。水蒸気を外に飛ばしてたなんて」

「そこで、この悪魔の出番なんだ。悪魔は部屋の間の扉に立って、早く動いている原子とそうでない原子を、扉の開け閉めで隔離していくんだ。右の部屋には激しく動く粒子を、左の部屋にはゆったり動く粒子を、ってね。そうすると、右の部屋は暑くなるし、左の部屋は寒くなるね。ここに温度差が出来上がるから、エネルギーを手に入れられる」

「すごいのか？」

「すごいよ。だって、空気をより分けるだけでエネルギーを手に入られるんだよ。それに、これなら入れ替えを繰り返すだけでエネルギーを生成できるから、一つの永久機関になるでしょ？」

「永久機関？」

「ある条件化で、永久にエネルギーを作り出せる機関のことだよ。例えば、絶えず勢いのある川の水力発電なんかがそうかな？ あまり詳しくはないけど」

「へえ、すごいのか。でも、酷い話ね」

「酷い？」

「だって、ずっと悪魔は働き続けるんでしょ？」

「……まあ、想像だしね」

「思い出した」

「よかったね」

そして、少女はホールの出口にたどり着き、城内に入った。

城門を抜けると、そこには広大な庭が広がっていた。

広大な敷地に、迷路のように緑の生垣が広がっている。

「というか、迷路ね」

「大丈夫。道なりに行けば良いからね」

「そうなの？」

少女は道を進む。

「……嗚呼、もう俺たち終わりだぜ」

「そうだな……。女王陛下に首を刎ねられて……」

「理不尽だよな……」

「しっ！ 聞こえたらどうする！？」

「あ、ああ、悪かった」

何の話かしら。

近くから聞こえてくる悲しげな声が気になり、少女は声のするほうへと向かった。

「ねえ、何してるの？」

「っ！？」

そこにはトランプの兵隊が三人、生垣の前でしゃがみこんでいた。少女が声をかけると、三人とも大きく飛び上がった。

「な、なんだ。アリスか」

「助かった」

「助かったって？」

「聞いておくれ、アリス。俺たちはもう終わりだ」

そういつてトランプの兵士たちは泣き崩れる。

「どうしたのよ」

「ハートの女王陛下が、ここに青い薔薇を植えるように命令なされたんだ」

そう言うともた泣き出す。

「青い薔薇って……そこに植えてあるじゃない」

少女の視線の先には確かに青い薔薇が植えてある。それでも兵士たちは泣き止まない。

「だって、アリス。あれは薔薇じゃない」

「そうだ……。薔薇じゃないんだ」

おうおうとトランプたちが泣く。

少女は首を傾げるばかりだ。

「どう見ても薔薇じゃない」

「見た目はね」

「でも、薔薇じゃない」

相変わらずわけのわからないことを言うトランプに少女はいい加減にうんざりとしてきた。

「どうということなの？」

若干威圧感を出しながら少女が笑顔で詰め寄ると、トランプがあわてて答えた。

「そ、その、な。薔薇には本来『青』を構成する遺伝子がないんだ」「は？」

「だから、薔薇には『青』色を出す遺伝子がないんだよ」

「薔薇という種である以上、『青』は出ないんだ」

「でも、俺たちはがんばった」

「薔薇の遺伝子に『青』を表現する遺伝子を組み込んで、これを創り出した」

そういつて、三人のトランプが一斉に青い薔薇を指差した。

「綺麗じゃない」

「でも、駄目なんだ……」

「ハートの女王陛下に首を刎ねられる」

「俺たちの首がなくなる」

「だから、なんで？」

「これは薔薇じゃないんだ」

「薔薇に、薔薇じゃないヤツの遺伝子を混ぜたんだ」

「だから、これはもう薔薇じゃない」

「何しろ、薔薇が持っていないはずの遺伝子を持っている」

「つまり、正確には薔薇じゃない」

「となれば、青い薔薇じゃなく、これは青い何かだ」

「よって、俺たちはハートの女王陛下の御言い付けを遂行できなかった」

「ならば、首を刎ねられるしかない」

そう言って、トランプたちはまた泣き出す。

少女はそんなトランプたちを見て、飛び切りの笑顔を見せる。
とても魅力的かつ晴れやかに微笑んだ少女は、

「じゃあね」

トランプたちを見捨てて先を進むことにした。

「アリス」

「なに？」

泣き崩れるトランプたちを見捨てて、城の庭を進む少女に黒い猫が声をかける。普段寡黙な猫が自分から少女に語りかけてくるのは珍しい。

「さっきの話、どう思う？」

「さっきの話って、あの青い薔薇？」

「そう。青い薔薇」

「どうって、あのトランプたち、馬鹿じゃないのかしら」

「うん、馬鹿だね。トランプの話じゃなくて、青い薔薇の話」

「うん？」

「青い薔薇は不可能の代名詞だって知ってた？」

「知ってるわよ」

「じゃあ、あの青い薔薇をどう思う」

「貴方……命刻みたいなのをいうのね」

三年前、事故で家族を失った少女は、家族の命日に食卓に花を飾る習慣があった。二年前から始めたそれに、青い薔薇を飾ることを提案してきたのは、少女を助け眠り続けることになった少年だ。まだ動いていた少年を思い出し、少女は頬をほころばせる。

「言いたいことは分かるわ。青い薔薇はどうあっても創ることができない『不可能』の代名詞。だから、その青い薔薇が存在したとき、

その青い薔薇は『万能』を体現していることになる。そういわせたいんでしょ？」

「そうだよ。青い薔薇は『不可能』の代名詞であると同時に、それを冠された者は『万能』の代名詞を冠されたことになる」

「何が言いたいの？」

「それは、君が」

そこまで言うと、突然猫の体がぶれ始めた。トラッキングのあっていないビデオのように、ジ、ジと猫の体が、ぶれる。

「検閲だね」

「前もあつたわね。何それ？」

それっきり猫は黙ったきりだった。

少女は進む。黒の猫を侍らせて、ハートの女王の城を進む。

広大な迷路のような庭を抜けると、城の入り口がある。

そして、その前に、白いウサギがこちらをじっと見つめていた。

「いたわ」

「うん、捕まえよう」

猫がうなずくと、少女はバツと駆け出す。

ウサギは少女が走り出したことを確認すると、踵を返して、恐ろしい速度で城の中に消えていく。

「逃がさない」

少女も負けずに疾走する。ここで逃したら次がない。何しろここはハートの女王の城だ。ゲームで言うなら最終ステージだ。ここで逃せば、ハートの女王という障害が立ちはだかることになる。

少女は必死にウサギを追う。

人間のようにデフォルメされてスーツを着たウサギは相変わらず異常に速い。

「おっと」

「すみません！」

城内にはトランプの兵隊たちやメイドだとか、そのほか爵位がついてそんな偉そうな人たちで溢れかえっている。

そんな中を疾走するウサギを見失わないように疾走する少女は周囲の人々を突き飛ばしている。

後ろから怒鳴り声なども聞こえてくるが、少女は気にせず走る。

あと少し。

ウサギは始めのころのような速さはなく、少女の手にかかりそうなところで走っている。しかし、異常な速さにかわりはない。

走る。

走る。

走る。

あと少し。

少女は目の前のウサギに手を伸ばす。

あと少し。

倒れるくらいの前傾姿勢になりながらも手を伸ばす。

あと少し。

白いウサギを捕まえるために。

あと少し。

世界を掴むために。

あと少し。

そして、少女の指がウサギに触れようとした瞬間。

白いウサギは姿を消した。

「え？」

気づけば少女はドームの観客席のようなところにいた。

トランプの兵士たちやメイドや偉そうな人々。

彼らがいるということは、城内なのだろう。

ウサギを追っているうちに、おかしいところにたどり着いてしま

った。

「ウサギはどこ？」

「逃げられたね」

少女が周りを見渡していると、

「女王陛下の、御成り〜！！」

ラッパの大きな音がすると、会場の全員が恭しく頭を垂れる。

「女王陛下……？ まさか」

「まさかだね」

ホールの中央に、豪華な装束を身に纏った女性が現れる。

純白の肌に、長く、腰でカールしている金髪。服も白を基本とした中世ヨーロッパのような豪華なもの。ところどころにハートがあらわれている。

美しい、二十歳前後の女性だ。しかし、その美しい外見に似合わない無骨な大鎌をもっている。

『女王陛下万歳！！』

『万歳！！』

女王は返礼もせず、ただその場に立ち尽くす。

すると、タキシードを着て帽子をかぶった男が、トランプの兵士たちに引きずられてくる。

「何故です！？ 私は悪くないですよ！？」

「罪状！！ 被告はその帽子の窃盗罪で起訴されております！！」

「だから、この帽子は私のです！！」

「何を言うか！！ 先ほどは、『この帽子は脱げません。売り物ですから』と言っただろうが！！」

「だって、私、帽子屋ですもの！！」

「うるさい黙れ！！ 女王陛下、判決を！！」

「うむ。では、『監獄』で懲役三十分だ」

理不尽だわ。

「酷い裁判ね。というか、裁判じゃないわね」

「あいつがルールなのさ」

「あれ？ 珍しくトゲのある言い方ね。嫌いなのか？」

「大嫌いだね」

「へえ」

猫の意外な一面に少女が驚いていると、会場は盛り上がっていた。

「『監獄』で懲役三十分！？ 酷すぎます！！」

「三十分ではないか」

「あの『監獄』は時間が進んでいないじゃないですか！！」

「罪を犯した貴様が悪いのだ」

「だから、冤罪ですってば！！」

帽子屋と女王がなにやらもめている。

「ねえ、『監獄』は時間が進んでいないって、たしかあの兄弟も言っていたけど、どういうこと？」

「『監獄』に勤めている『重力』が最近張り切りすぎてね。働きすぎるから、一緒にいる『時間』がつぶされて仕事できていないんだ」

「は？」

「つまりね。『重力』が強すぎて『時間』が進んでいないんだ」

「もしかして、『監獄』ってブラックホール？」

「そうだよ」

「……へえ」

物理が見え隠れするので、少女はそれ以上突っ込まないことにした。

そんな間も、女王と帽子屋の口論は続いている。

「おのれ、やかましいやつだ」

「そりゃ必死になりますよ！！」

「何故だ。ただ三十分『監獄』に入るだけだ」

「死刑と同じじゃないですか！！」

「むう。面倒だ。死ね」

全ては一瞬。

女王の大鎌が煌いたかと思うと、帽子屋の首が宙を舞っていた。帽子屋は血潮を上げることもなく、一瞬で霧散した。

「酷い!!」

理不尽な死刑に、少女は抗議の声を上げたが、その場で声を上げたのは少女だけだった。静かなホールに少女の音が響きわたる。

しんとした空気の中、全員の視線を一身に受ける少女に、女王が気づかないはずがない。

女王はゆっくりと少女に視線を向ける。

「……貴様。アリスだな。兵よ、アリスを捕らえろ」

そして、少女にランプが殺到した。

狭間 「私は間違った」

狭間 The Murderer's Side

五、

白。

黒。

白と黒の、パノラマの世界。

一条神楽の、壊れた世界。

一条神楽が、壊した世界。

「ワタシ」がここに降り立って、長いこと経った。

「花屋の周囲」、「学校」ができ、そして「病院」ができた。

相変わらず、白黒の世界だ。「病院」が現れたということは、一条神楽は「病院」も捨てたのだろう。「葛木命刻」という、一条神楽にとって最も大切であろう存在を切り捨てるとは、おそらく一条神楽は相当に現実に絶望しているのだろう。

「ワタシ」は、またもや自らの意思で「病院」を「殺戮」した。

相変わらず、人間たちの反応は鈍く、というか、まったく反応できないままに彼らは「殺戮」された。しかし、そもそもが「殺戮」である「ワタシ」に対抗する術などはないだろう。「ワタシ」は誰よりも「殺戮」の何たるかを知っているのだから。

その中で、最も驚いたことは「ワタシ」が「葛木命刻」を殺すときだ。「殺戮する」以外に意思を持っていないのかと思っていたが、「ワタシ」は「葛木命刻」を前にして涙した。まったく以って有り得ないことだ。

おそらくは、「ワタシ」は「一条神楽」の派生人格の一つであることに由来するのだろう。「殺戮」という一人格となった「ワタシ」でも、やはり根源たる「一条神楽」と深層でリンクしているのだ。

つまりは、やはり「一条神楽」は現実を嘆いており、「ワタシ」はそれに影響されたのだろう。

しかし、こうして全てを「殺戮」とすると、「ワタシ」はその場に立ち尽くすことになる。なにしろ、することがない。勿論それは当然のことで、因果応報といえるだろう。なぜなら、「ワタシ」が所在無く立ち尽くすのは、「ワタシ」がコミュニケーションをとるべき人間たちをことごとく「殺戮」したからだ。

暇をつぶす相手を殺しておいて、暇だ、というのはあまりにも理不尽だろう。

兎に角、「ワタシ」は人間がいれば「殺戮」し、そうでなければ後は立ち尽くして次の獲物が来るのを待つだけだ。

だが、心なしか「ワタシ」は「殺戮」するたびに「自我」を発生しつつあるのではないかと思う。不思議なことは、そうであるにしては「客観」たる私がいつまでも消えないことだ。完全なる「主観」への変化を見届けるまでは消えるつもりは毛頭ないが、それでも、まったく「客観」たる私が削られないのはおかしい。

となれば、やはり「ワタシ」は「自我」を持っていないのか。

白黒の世界が光り輝く。

尤も、白黒の世界であるから、世界が白く焼けるだけだが。

この光が差すときは、世界が構築されるときだ。「一条神楽」が捨てた「学校」、「病院」がこの白黒の世界に追加されたときこの光が差した。

今度はどんな世界が捨てられたのだろうか？

そう思っていると、不思議にも捨てられたのは世界ではなかった。光が収まり、そこに現れたのは非常に奇妙なものだった。

巨大なトカゲのようで、蝙蝠のような羽を持っている。恐ろしく切れ味のよさそうな鍵爪と牙。五メートルはあるであろう。

いわゆる、竜というヤツだろう。

しかし。竜であることは問題ではない。問題なのは、なぜ竜がここにいるのか、ということである。持っている知識が正しいと仮定するならば、現実世界に竜など存在しない。そんなものを、どうやって捨てたというのか。わざわざ夢想し、その中で竜を抹殺したのか？ 無駄にも程がある。

やはり問題は、なぜ竜がここにいるのか、ということだ。さらに派生すれば、「一条神楽」がどうやって竜を捨てたのか、ということも問題だろう。

「貴様……新しい『一条神楽』だな？ だとすれば、ここが夢の虚部から抜け出した新たな世界か」

竜は何かぶつぶつと言っている。

「しかし、私がここに送られたということは、ここはあの小娘が捨てたもので構成されている世界ということか」

しかし、不思議な竜だ。一体全体、どうして竜がここにいるのかさっぱり分らない。分らないなら、聞けば良い、か。

お前は一体何者？

「ん？ 私か？ 私はジャヴァウォックという」

そんなことは聞いていない。どうしてここにいるのか、ということ。

「ふん。ならばそう聞けば良い。貴様もここに長くいるのなら分かっているだろう？ ここは『一条神楽』に捨てられた世界だ」

つまり、お前も捨てられたということ？

「そのとおりだ。まさか私が殺されるとは思わなかったが……。あの小娘の『黒』はなかなか強力だ」

そんなことは聞いていない。

「なら、何を聞いている？」

どうしてここにいるのか？ 正確には、どこで「一条神楽」

と接触したのか？

「そんなことか。私が現実存在すると思うか？」

そう思えないから聞いている。

「ならば、答えは簡単だろう？ 現実でないならば夢でしか有り得ん」

夢？ 夢すらも壊すのか。

「そもそも、あの小娘の現実ほとんど残っていない。『学校』と『葛木命刻』が致命的だったな」

待て。現実がほとんど残っていないとはどういうこと？

「ん？ 見て分かるだろう？ あの小娘は『あの小娘の世界』を約半分捨てている」

どういうこと？

「気づかんのか？ よく周りを見ってみる」

周りを見渡せば、世界は酷く変わっていた。

白と黒のパノラマの世界が、透けていた。

パノラマの世界が透けて、その向こう側に、色づいた艶やかな世界が覗いていた。

単純な三次元平面では説明できないような、神秘的な光景だ。おそらく、立体的なホログラムを投射できれば、似たような光景になるのだろう。

二つの立体構造を持つ世界が、ところどころ混ざり始めているかのような、そんな光景だ。壁が透けて、薄く色づいた緑の森が見えるが、この壁の後ろに存在するわけではない。あくまで、緑の森は別世界で、それが丁度このパノラマの世界の壁に重なっているのだ。

これは一体どういうこと？

「簡単なことだ。あの小娘は自分の世界を捨てすぎた。あの小娘を構成している世界の半分近くがここに流れ込んできている。そして、今現在この世界とあの小娘の世界の比率は拮抗している」

それで、どうしてこうなる？

「あの小娘の世界が半分近く流れ込んできているということは、『一条神楽』という存在の主権が半分近くこちらに流れ込んできているということだ」

『一条神楽』の主権？

「簡単に言えば、この空間に逃げ込んだだけの貴様にも、『一条神楽』に成り代わる権利が半分近く手に入ったということだ」

『一条神楽』になる？

「つまり、『一条神楽』の半分はあの小娘であり、残り半分は貴様ということだ」

それで、どうこの状況につながる？

「簡単なことだ。もう少しこちらに世界が流れ込めば、二つの世界は交じり合う。それによって、貴様はあの小娘の世界に行けるだろう。そこで、あの小娘を殺せば『一条神楽』は貴様のものとなる」

つまり、世界が繋がったら、『一条神楽』を殺しに行け、と？

「そうなる。勿論、『一条神楽』に成り代わるつもりがないならその必要はないがな」

「つまり、もう少ししたら、殺し合いができるってことね？」

「ワタシ」が口を挟む。

まったく驚きだ。「ワタシ」が自発的に会話に参加するとは。

「そういうことになる」

「ふ、ふふふ」

そこで「ワタシ」は今までにないくらい楽しそうに、スキップしながら、鼻歌を歌いながら、右腕に日本刀を煌かせながら、竜に近づき、

ひゅん。

竜の首から紅い紅い血潮があふれ出ている。

「ワタシ」はその中でもなお楽しそうに、スキップしながら、鼻歌を歌いながら、右腕に日本刀を煌かせながら、血潮を浴びている。私はぞっとした。

血の雨の中で狂喜する「ワタシ」にぞっとした。

なぜなら、私は気づいてしまったのだ。

血の雨の中で狂喜する「ワタシ」を見て気づいてしまったのだ。ぞっとする。

私は、自分の過ちに気づいてしまった。

私は自分が「客観」であると信じて疑わなかった。事実、私は確かに「客観」だった。

「一条神楽」という一人格の中で日々の日常の中で生まれている「客観」視こそが、私の起源だ。「一条神楽」が人間として社会に適応するために、自分の思考の鏡として生まれたのが私のような「客観」だ。

そしてこの「客観」は一日の終わりに全て消え去る。別に「一条神楽」の「客観」視する力が消え去るわけではない。その日一日に生まれた「客観」視が消えるだけだ。また次の日になれば同じような「客観」が生まれることは珍しいことではないはずだ。

「客観」として生まれ、「客観」として消える。何も不満はない。それこそが、「一条神楽」という自分を社会に適応させている必要条件ならば、自分には意味がある。

しかし、私は不満に思ってしまった。残念に思ってしまった。それ以上を望んでしまった。すなわち。

「客観」が「主観」に変わるところに立ち会いたい。

いや、きっと違う。

私はそんなものに立ち会いたかったのではない。私は。

私はただ、「客観」として生まれ「客観」のまま消え行くのが我慢ならなかっただけなのだ。

だからこそ望んだ。「客観」として生まれ、「客観」でしかなく消えていく自分が、「主観」になれるように、と。

分かっている。これはただの我侘だ。自分には分不相応なものを望み、それによって何が起こるのかをまったく考慮に入れていない、子供のような望みだ。

そして、その望みは許されないものだった。

私は許されない望みを抱き、「夢の虚部」から、「自我の爆発」から逃れ、ここにたどり着いた。

私はそれから「一条神楽」が捨てた世界に触れ、「主観」になるうとした。

しかし、「一条神楽」の捨てた世界とは、「殺戮」を体現しただけの空間だった。

私は「ワタシ」にその空間を「殺戮」させ、「ワタシ」をより「殺戮者」へと昇華させてしまった。

一つ言わせてもらえば、この時私は「ワタシ」を世界に触れさせることで「殺戮者」に仕立て上げようと思ったわけではない。私はただ単純に、「ワタシ」が世界に触れることで、「主観」の発生を見たかっただけだ。

いや、これさえも欺瞞か。私は「ワタシ」という存在を以ってして、私自身を「客観」から「主観」に昇華させたかっただけなのだ。だから、誓って言える。私は「殺戮者」を作ったかっただけではない。勿論、私の行動が結果として「ワタシ」を「殺戮者」にしてしまったことは否定しない。

そして、それは許されざるものだった。

結果として、私は「ワタシ」という恐るべき人格を産んでしまった。

「ワタシ」は「殺戮」から産まれた生粋の「殺戮者」であり、あらゆる「殺戮」を理解し、あらゆるものを「殺戮」しつくせるだろ

う。何しろ、完全に「殺戮」を理解している。

そんな恐ろしい人格を解き放つべきではない。

こんな恐ろしい人格を野放しにしてはどうか分からない。

だから、解き放つてはならない。

だがしかし、もう無理なのだ。

そう。それこそが、私の最大の過ち。

私は「客観」であるがために、大きな過ちを犯していた。

「ワタシ」が振り返る。

無垢なる残虐の笑みで振り返る。その笑顔は青空のように晴れ晴れとしていて、同時に肉食獣のように残虐なものだ。

嗚呼、嗚呼！！ 私の間違った。

「キミは、だれ？ 私にそっくりだね」

嗚呼、嗚呼！！ 私の間違った。

「ワタシ」は今、私に語りかけている。

そうだ。そうなのだ。私は「客観」であるが故に、「ワタシ」の姿を後ろから見ていることが、まったく不思議でなかった。なぜなら私は「客観」なのだから。自分の視点というものは有り得ない。だから、まったく不思議に思わなかったのだ、「ワタシ」の後姿を見ているも！！ それが実際にはただ「ワタシ」の後ろについて歩いているだけだったとは！！ 「客観」である私と、「ワタシ」がすでに別固体になっていたとは！！

嗚呼、嗚呼！！ 私の間違った！！

「まあ、キミが誰かなんて関係ないね」

嗚呼、嗚呼！！ 私は間違った！！

そうだ。

私はすでに「客観」などではなかったのだ。

私はすでに「客観」ではなく、「主観」になっていたのだ。

より正確には、私は「客観」だけではなく「主観」も持っていたのだ。

「ワタシ」が近づいてくる。

そうだ。

あの時。

まさにあの時。

私は「主観」を持ったのだ。

無垢で残虐な笑みを貼り付けて、「ワタシ」が近づいてくる。

そう。

「客観」が「主観」に変わるのを見てみたい。と、そう願ったときすでに私は「主観」を持っていたのだ。

あの願いが「客観」なわけがない。私は「客観」であることに縛られて、全てを「客観」という言葉で済ませていただけなのだ。

あの時すでに、私は「主観」的に、望んだではないか！！

日本刀を空で一振りして、竜の血を振り払う。

そうだ。

私はすでに「客観」だけでなく「主観」も得ていたのだ！！

そして、その日本刀を煌かせ

そう！！

そうなのだ！！

そうありたいと願った、まさにその時に私の願いはかっていたのだ！！

嗚呼！！ 嗚呼！！ 私は、間違っただのだ！！！！

「だって、私は殺すだけだもの」

ひうん。

神楽 「ハートクイーンVS殺戮者」

夢 The Heroine's Side

十四、

少女にトランプが殺到する。

トランプの兵はそれぞれ剣を持ち、殺到する。

「ねえ、『捕らえる』じゃなかったの？」

「どうせ殺すだけさ」

「どうする？」

「君に任せるよ。ここは君の夢なんだから」

「そう」

そう言うつと少女は右手を広げる。

その手のひらを中心に、少女の「黒」が渦巻き始める。

「黒」は黒く、強く、ひたすらに旋廻していく。

殺到するトランプたちを「殺戮」するために、少女の「黒」は旋廻していく。

要領は理解した。「強い意志は具現する」。世界を捻じ曲げるほどの強い思念で、この「黒」は顕現される。自らの破壊の衝動を高めれば、この「黒」は強大になる。

少女の「黒」は膨れ上がり、解放すればすぐにでもトランプたちを巻き込み破砕するだろう。

「でも」

「なに？」

「でも、これだけは言っておくよ」

少女は「黒」を右腕に旋廻させ続ける。

トランプたちが殺到してくる。

まだ距離があるが、それでも視線は外さない。

「いいわ。なに？」

猫はいつものにんまりで少女を見つめた。

「トランプを殺す。それはつまり、君自身を壊すこと」

「……やっぱり、よく分からないわ」

そう言つて、少女は迫り来るトランプに「黒」を開放した。

「大丈夫。ここでは僕が守るから」

開放する瞬間、隣で猫が言った。

轟轟。

轟轟と少女の「黒」はトランプたちを完全に破砕しつくした。

「おのれ……」

ホールの観客たちは皆あわてて逃げ出し、残るのは少女と猫とハートの女王のみだ。

ハートの女王は、その巨大な鎌を引きずりながら少女に近づいていく。

「猫。なぜ邪魔をする？」

女王は少女と少し距離をとって止まり、少女の横にいる猫に語りかける。

「それは僕の台詞だね。君は要らない」

猫は少女といるときでは考えられないほど冷たく答えた。

少女は驚くが、女王は驚かない。いたって冷静に問う。

「何だと？」

「すでに僕が働いているのだから、君は不要ということさ」

ふん、と女王は猫の答えを鼻で笑い、大鎌の先を猫に向ける。

「働いている？ それでか？ 貴様が働かないから妾が摘み取りに来たのだ」

「今回は摘み取ることが正しい抑止じゃないね」

「否。その蒼薔薇は危険だ」

女王の視線が猫から少女に移る。

少女は先ほどから会話についていけず、ただ呆然と立ち尽くしている。

そんな少女には構わず、猫と女王の会話は続いていく。

あれ？

「『世界』はそこまで要求していないね」

おかしい。世界が透けている？

「まったくだ。生ぬるい。いつからああなってしまったのか。もう任せられん。だから妾がいる」

女王の城が、透けて見えて、何か白黒の世界が見える。

「そういうのを、過激派って言っただよ」

猫たちは気づかないのかしら？

「やかましいやつだ。摘み取るほうが遥かに簡単なことだ」

でも、おかしいわ。

「君は愚かだね」

透けて見えるのだけど、何かが違う。

「何だと？」

透けて見える白黒の世界は、壁の向こうにあるってわけじゃないみたい。

「君は愚かだ。何も分かっていない」

なんて言うか、世界が、重なっている？

「妾が、愚か？ 馬鹿馬鹿しい」

トランプたちを倒したから？

「アリスを、……『万能』を本当に理解していないんだね」

あれ、少しずつ白黒の世界が濃くなってくるわ。

「否、理解している。だからこそ、摘み取るのだ」

え？

「そう。その単純な方法が、最も危険なんだよ」

あの、白黒の世界って……。

「なに？」

あの、白黒の世界は……！

「君は、自分から蒼薔薇を覚醒させようとしている」

あれは。

「蒼薔薇は、追い詰められれば追い詰められるほど、その『万能』を開花させるのさ。君のその臆病な判断が、彼女をより高みへと導いていることに、気づかないのかい？」

みんな、私が壊した世界……！

少女が愕然としている傍ら、ハートの女王は不機嫌そうに大鎌の柄で地面を叩く。

猫が糾弾を止めると、静寂が満ちる。

「もう良い」

ハートの女王はポツリとそう言い、右腕で大鎌を振り上げる。

そして。

駆ける。

その衣装からは想像できないほどの俊敏さで少女に肉薄する。

「アリス……！」

猫が叫ぶが間に合わない。

無骨な大鎌が煌き、驚きに目を見張る少女の首を一閃する。

そして。

ずぶり。

「か、は……」

「……え？」

少女には何が起こったのかわからなかった。自分の首はどうにかつながっているらしい。しかし、体中に血が降りかかっている。自分のものでないとすれば。

それは、ハートの女王のものだった。

「あ、はあ、……、」

少女の目の前には異様な光景が広がっていた。ハートの女王は苦しげにうめいている。

そして、ハートの女王の胸から煌く何か、
日本刀 が生えていた。

禍々しいほど美しく煌く日本刀に、少女も女王も視線が釘付けになる。

「ぐ、あ、くあ、……、」

どうして、日本刀が胸から生えるのか？

しかし次の瞬間には、日本刀は女王の胸から引き抜かれた。

「アリス！！今のうちに！！」

「え？」

少女の前には猫がいる。

「え、ああ、うん。分かったわ」

少女は猫に連れられて、女王からできる限り離れる。

「ぐあ、あ、……むう？　　つくう！！」

きいん。

ハートの女王は苦しげにうめいていたが、背後で風を切る音が聞こえ、とつさに鎌を後ろに振りぬく。

大鎌と日本刀がぶつかり、火花と共に綺麗な音が響く。

ひうん。

日本刀は鎌にぶつかりとすぐに軌道を変えて、再びハートの女王

に接近する。

きいん。

ひうん。

きいん！

「おのれえっ……」

ぎいん！！

ハートの女王が力任せに大鎌を日本刀にぶつけ、弾き飛ばす。

日本刀の攻撃が収まった一瞬を逃さず、女王は後ろに飛び退いて距離をとる。

「く、くくく。ふふふふふ」

日本刀を持つ少女は攻撃を止め、楽しそうに笑う。

「ふふふふふふふふふふ」

腰まである長い黒髪が扇のように広がり、右腕の日本刀が煌いている。

「え……。あれは、私？」

少女は愕然とする。

日本刀を煌かせている少女は、自分と瓜二つではないか。

違うところといえば、少女はあそこまで残虐な笑みを浮かべないということだ。

「……く、貴様、何者だ？」

ハートの女王は大鎌を構え、息も絶え絶えに問う。

問われた少女は、ピツと日本刀から女王の血を振り払う。

「私？ 私は……ううん。一条神楽、じゃあつまらないから、ううん。アリス？ いや、アリスだと被るから……リデルで」

「リデル？ ……いや、名前を聞いているわけでは、ない、」

「そんなこと言われたってなあ。ううん。あ、そうだ。誰かが『殺戮者』って言っていたね。あと、『一条神楽』の主権を半分持っているって」

「成程。第二人格か」

「そういうことになるのかな？ 難しい話はよく分からないよ。兎

に角、ここにくれば殺し合いができるって聞いたんだ。うん。すごく楽しい」

そう言って少女は日本刀を構える。

「今まではみんなただ死ぬだけだったもの。『殺す』のはつまらないけど、『殺しあう』のは楽しいね」

「ずいぶんと、狂った、第二人格、だ」

そして、剣戟が再開した。

「ねえ、何なのよ、あれ？」

少女は猫に連れられて、崩れかけた城の物陰に隠れる。

少し離れたところでは、女王と、自分と瓜二つの少女が戦っている。

女王の貫かれた胸は塞がり、出血も見当たらなくなった。流石は夢と言うべきか、尋常でない回復力の速さだ。しかし、貫かれた時の状態を見るに、恐らく不死ではないのだろう。

その証拠に、二人は今戦っている。

ともなれば自分も死んだら危ないのかもしれない。尤も、夢の中で死んだこともないから、よくは分からないが。

「彼女は、君さ」

「私？」

「簡単に言えば、二重人格のようなものかな？」

「二重人格？」

「君は自分の世界を壊しすぎたんだよ。君が捨てた君の世界は、君の中のゴミ捨て場の様なところに流れ着いた。ただ、それが今回は急激にたくさん流れ着いたから、そこに一つの世界ができてしまった」

「……」

「君が捨てたものだけで構成された、捨てられた世界。いや、もっ

と壮絶な世界だね。君に殺された世界だからね。その世界は『殺戮』によって構成されていたはずだよ」

「『殺戮』って……」

「世界が始まるにはその起源があるんだ。君の中にできたもう一つの世界は、『殺戮』された世界の寄せ集めだから、その起源は『殺戮』さ」

「……でも、それがどう関係あるのよ」

「うん。本当はそれもいずれ消えるはずだったんだけど、一つ予想外の出来事が起こったんだ。その『殺戮』の世界に、一つの人格が誕生してしまった。その世界に起源を持つ人格は、当然『殺戮』たるにふさわしい人格となった。それが、彼女」

「『殺戮』たるにふさわしい……。確かに、強いわね」

「強いね。彼女に殺せないものはないよ。なぜなら、彼女自身が『殺戮』なんだからね。でも、問題はそこじゃない」

「え……？」

「彼女がこの領域に踏み込んできたということは、彼女がすでに一つの人格として成り立っているということだよ。つまり、彼女は君に成り代われる」

「成り代われるって……つまり、私が私じゃなくなるってこと？」

「そう。君が負ければ、『一条神楽』という身体的所有権は彼女に移る。そうなれば、君は押し込められて、表に出ることはなくなるね」

「死ぬってこと？」

「『一条神楽』は死なないよ。君は死ぬけどね。君という人格が死んで、『一条神楽』は『殺戮者』になる」

「……よく分からないけど、まずそうね。どうしたら良いの？」

「まあ、勝つしかないね」

「でも、何でも殺せるんでしょう？」

「そうだね。がんばろう」

「がんばるって、それで何とかなるの？」

「なるよ。だって、相手は君だもの」

「相変わらず、最期までよく分からないことを言うのね」

「まだ、最期じゃないけどね」

少し距離を置いて、女王と少女 リデル の殺し合いは白熱していた。

「は！」

きいん。

「強いね。良いよ。すごく良い。楽しい、楽しい」

きいん。

「戯けが！ この、……狂人が！」

きいん。

「狂ってなんていないよ。私は『殺戮者』なんだから、これが普通でしょ？」

きいん。

「それが、狂っていると云っているのだ！！」

きいん。

「そうだね！。狂ったわけじゃないけど、もともと狂っているといえばそうなのかも」

きいん。

「ああ。狂っている。一条神楽の『蒼薔薇』もここまで来ると異常としか言えん。やはり、ここで摘み取る！」

ひうんっ。

どこにそれ程の腕力があるのか、突如として大鎌の軌道が力任せに大きく変わり、しなりながら少女の首を刎ねようと飛び掛る。

「甘いよお」

確実に少女の首を取った、もし殺しきれなくとも少女を跳ね飛ばすことは間違いないだろうと思った女王の思考は一時停止する。

間違いなくかわしきれないはずの軌道に、反応できるはずもない
タイミングで繰り出した一閃の先に少女がいない。

「 なっ」

少女はすでに女王の懷に。

一瞬の攻防。首を刈り取られるはずの少女は、しかし何者にも例
えがたき狂気の笑みを貼り付けて、日本刀の切っ先はまっすぐに女
王の首を狙っていた。

「もらったあ」

「しまっ」

ひうん。

しかし、女王は首筋に向かう日本刀を見、不適に口元を吊り上げ
て笑う。

まさに少女の日本刀が女王を『殺戮』する時、女王は右腕を開き、
銀の時計を虚空に顕現し。

きゅるるるるるるるるるる。

突如虚空に顕現した銀の時計は、瞬間的にその秒針を巻き戻し。

.....ぐにやり。

「おや？」

時を、巻き戻した。

時は、女王が鎌の軌道を強引に有り得ない軌道に変更したその瞬
間に巻き戻る。

「貴様がどこにいるのかわかってさえいれば」

少女は先ほど同様に女王の懷に潜り込む。

女王は振りぬいた鎌の柄の先を、先ほどのように強引に、前方に
振り上げるようにして、柄で少女を叩きつける。

「どうということはない！！」

ぎいん。

「くう」

女王はそのまま、また強引に、鎌の軌道を変更して追撃する。

ひうん。

少女は日本刀で迎え撃つが。

きゅるるるるるるるるるる。

女王が少女の日本刀の軌道を確認すると、銀の時計は秒針を巻き戻す。

一瞬前にまき戻った時の中で、女王の鎌は、鎌を迎撃しようとした少女の日本刀をかわし、少女を一閃する。

「つく」

「な」

しかし少女はその理不尽な一閃さえも、回避し、すでに女王の懷に。

「ふ」

そして、時は巻き戻る。

きいん。

拙い。

この少女は拙い。

きいん。

自分は悉くこの少女の攻撃を無力化している。

にもかかわらず、この少女はいまだ的確に、自分を『殺戮』するポイントを一閃してくる。

きいん。

そも、こちらが『時計』を持ち出しているにも関わらず、それすらものともせず、不吉なまでに美しい日本刀を振りぬいてくる。この少女は強いからこそ、自分は『時計』を持ち出している。

きいん。

こちらが持ち出しているのは『時計』だけではない。

鎌の軌道修正にも魔術を用いている。

きいん。

だというのに。

自分はこの少女に『殺戮』される。

きいん。

一条神楽の世界という、自分にとって不利な条件化ではあるが、自分は「世界」だ。

その「世界」すらも、この少女は『殺戮』するのだ。

きいん。

捻じ曲げた世界も、捻じ曲げた時すらも凌駕して、この少女は、自分を、この「世界」を、『殺戮』するのだ。

きいん。

強い。

この女は強い。

きいん。

私は悉くこの女を『殺戮』出来るポイントを一閃している。にもかかわらず、この女は私の攻撃を無力化する。

きいん。

そもそも、一度胸を刺し貫いたにも関わらず、その傷すらも塞ぎ、馬鹿みたいに巨大な鎌を振り回している。

この女は強いからこそ、この『殺戮』と殺しあえている。

きいん。

この女の鎌は、考えられないような軌道修正をかけて、私を狙う。この女の時計は、考えも及ばないような力によって、時間を捻じ曲げる。

きいん。

強い。

この女は強い。

きいん。

でも、私の方が、つよい。

絶対の『殺戮』に、誰が勝てようか。

きいん。

この女は強い。

その状況に、私は酔っていた。

きいん。

私は、戦いを楽しんできました。

それは、愚かなことだ。

きいん。

こんな堂々巡りをしていても仕方がない。

さあ、この女を殺そう。

なぜなら。

私は、殺し合いをこそ、真に楽しむのだから。

「む？」

鎌と日本刀による美しい剣戟音が木霊する。

鎌の放つ曲線美。

日本刀の跳ねる直線美。

場違いな純白のドレスに、簡素な服。

長い金髪に長い黒髪。

異常な速度の剣戟。

異常な角度からの一閃。

そして、時が巻き戻る異常。

ぐるぐる、ぐるぐると時が巻き戻りながら、その一瞬一瞬に相手の命を狙って刃が跳ねる。

二つの凶器は煌きながら、時空を跳ねる。

その光景は、一瞬一瞬が芸術的。

生死の狭間。勝敗の狭間。時の狭間。

一瞬の後にはどちらかの死という極限状態。
そんな中、女王は感じた。

状況は圧倒的に有利、であるはずだ。

自分は「時計」を持っている。

時間は逆転し、一瞬先のアドヴァンテージを持っている。

しかし、女王は感じた。

自分の死を。

狂気の笑みを貼り付けていた少女の雰囲気が変わったのだ。
無邪気な子供の様な残酷さが、殺戮者のそれになった。

愉しんでいたのだ、この少女は。

自分と打ち合うことを愉しんでいたのだ。

そして、気が変わった。

飽きたのか？

否。

この少女が殺し合いに飽きることはない。

そう、殺し合いには、飽きることがない。

つまり、この少女にとって今までのものは、殺し合いではなかったということ。

勝てない。

時間さえも歪めた。しかし、それさえも少女にとっては御遊びに過ぎない。

そうだ。この狂気の少女は気づいたのだ。

自分が殺し合いをしていないと。

戦いを愉しんでいるだけだと。

時間を巻き戻す。

相手のとる行動を知っているというのに、自分はこの少女を殺せない。

巻き戻った時間の中、日本刀の軌道を交わした女王の鎌は、しかし少女を捕らえられない。

時間を巻き戻す。

しかし、捕らえられない。
巻き戻す。

しかし。

そこで、気づく。

詰んでいる。

そうだ。

すでに。

詰んでいる。

巻き戻しても。

巻き戻しても。

巻き戻しても。

詰んでいる。

自分に勝ち目はなく。

あるのは絶対の敗北。

今まで、時間を巻き戻して少女を追い詰めていたつもりだった。

しかし。

実際にはその逆。

時間を巻き戻すことで、死を先送りにしていたに過ぎない。

実際に追い詰められていたのは、自分。

時間を繰り返すごとに、確実に追い詰められていき、詰んだ。

そして、この狂気の少女が本気になった以上、これ以上時間を巻き戻しても無駄なのだ。

何しろ、相手は万能。

何しろ、相手は殺戮者。

相手は、死神なのだ。

魅入られたら、すでに、死。

気づく。

この狂気の少女は、自分を見ていない。

彼女が見ているのは、自分の「死」。

流石は、「蒼薔薇」。万能から産み落とされた「殺戮者」は、

やはり「死」において万能なのだ。

相手を見つめているようで、実際にはより深淵を見つめている。相手を切りつけているようで、実際にはより深淵を切りつけている。

相手の「死」に向かって、一手ずつ正確に切りつけている。

はずしてなどいない。

打ち合っただけではない。

それすらも、「死」を打つということ。

かわし、打ち合い、拮抗していると思っていたときから、すでにこの少女は、「死」に向かって詰み始めていたのだ。

流石は、「蒼薔薇」。この「万能」を止めようとしたこと自体、間違っていたのだ。

巻き戻る時間の中、狂気の少女の瞳が、完全に「死」を捕らえる。絶対の死刑宣告。

抑止力は死を悟る。

流石は、「蒼薔薇」。勝てるわけがなかったのだ。勝負は詰んだ。

日本刀の残酷な煌きが、女王の首を刎ねた。

神楽 「アリスVSリデル」

夢 The Heroine's Side

十五、

「勝った。あー楽しかったな」

リデルは、ピツと日本刀から血を払う。

首を失った女王が、帽子屋と同じように霧散する。

それを見届けると、リデルは振り返る。

「やは。神楽」

ニコニコしながら、瓜二つの少女、神楽に声をかける。

気さくに声をかけたつもりだったが、神楽は無視する。

神楽の隣には猫がいる。三日月のように裂けた口。笑っているようにも見えるが、相変わらず、何を考えているのかよく分からない。それでもリデルはニコニコしながら、問いかける。

「あれ？ もしかして、アリスって呼んだ方が良かったかな？」

問いかけは酷く見当はずれなものだ。

しかし、この少女の問いに深い意味などない。

「ま、いいか。逃げなかったってことは、私と殺しあってくれるってことだよな？」

リデルは極上の笑みで、「死」を宣言する。

対して、神楽は覚悟を決めるように、リデルを直視する。

「……そうね。逃げられるとも、思っていないわ」

「うんうん。いいよ。流石、もう一人の私」

満足そうにうなずきながら、日本刀を構える。

リデルの構えは無為の構え。日本刀を持った右腕をだらりとたらし、特別な構えはしない。

神楽は足を肩幅に開き、右腕の掌をリデルに向ける。

「行くわよ。猫」

「うん。攻めを休んだら負けだよ」

「あつははは。いいよ。さあ、勝負だ！」

瞬間。リデルの足元が吹き飛ぶ。

何？ そう思うころにはすでに次の「黒」が炸裂する。

轟ッ！

リデルの足元を基点に、神楽の「黒」が竜巻となって炸裂する。

瞬間的に広がった「黒」の竜巻は、次の瞬間には収縮し、圧倒的なエネルギーを中心にぶつける。

バン。と「黒」と「黒」が激突し、また次の瞬間には広範囲に広がって霧散する。

「いいよ。魔術にもなれたね」

すぐに「黒」は霧散し、あたりはまた静寂を取り戻す。

一瞬にして一定の空間を殺戮しつくす「黒」の基点となった少女は、そこにはない。跡形もなく消し飛んだか。

否。「黒」につぶされたなら、その血潮が舞っているはず。ならば。

「アリス。後ろだ！」

猫が叫ぶと同時に、風を切る音。

轟ッ！

「おや残念」

「反撃！！」

神楽は振り返ってリデルを確認するよりも早く、自分を基点に「黒」を展開する。

日本刀と「黒」が激突する音が聞こえると、すぐに「黒」が広範囲にそのエネルギーを叩きつける。

「黒」が霧散し、神楽はリデルの姿を捉える。

嗤っている。

「凄い。凄い。とってもスリリング」

神楽は構わず追撃する。

自分を基点に、「黒」の竜巻を直線的に飛ばす。回転する「黒」が持つエネルギーは強大。削岩機のように地面を砕きながら、突き進む。

しかし、それを前にしてもリデルは喜悦に口元を吊り上げる。

「私は、殺戮者」

削岩機のごとき「黒」を前に、避けずに日本刀を前に突き出す構えを取る。

リデルの瞳が「死」を捉え、。

「黒」が直撃する瞬間。

日本刀は「黒」を殺した。

ぱつとエネルギーを失った「黒」が霧散する。

「そんな」

「まさか、魔術まで殺せるとはね」

ゆらり、とりデルの影がぶれ、掻き消える。

「まずい！」

「怯まない！ 魔術で、いや 後ろに飛んで！！」

猫の指示通り、神楽は応戦よりも先に、後ろに飛び退く。

ひゅつ。

驚異的な危機感知。間一髪、神楽の首元で日本刀が煌く。

「あや、やりますね」

「このっ」

轟ッ！

反撃の「黒」。神楽を基点に広がるエネルギーの嵐。しかし。

ひうん。

その「黒」さえも、リデルは殺戮する。

流れるように、リデルの瞳が「死」を捉える。

日本刀が死に向かって煌く。

「アリス！」

「このおっ！」

接近戦において最も効率の良い攻撃、それは打撃。日本刀という死を前に、神楽は右腕に「黒」を展開し、力任せに殴りつける。

圧倒的なエネルギーを持つ拳が、クロスカウンターとして炸裂する。

リデルは一つ舌打ちすると、後ろに飛び退く。

「追撃だよ！！」

「分かつてる！！」

しかし、そこにもすぐに追撃。

リデルを基点に展開される「黒」。

リデルに向かって四方から炸裂する「黒」。

前から。

後ろから。

左右。

上下。

完全方位の「黒」。

四方どこもかしこも「黒」、「黒」、「黒」。

逃げ場はない。

その中でなお、狂気の少女は嗤う。

そして、感嘆する。

流石は、自分だ。殺し合いというものをこのわずかな時間で理解している。常に生死を意識し、一瞬一瞬に必殺を繰り出し、それでいて、数手先まで呼んでいる。くつついている猫の的確な指示と、それを無駄にしない判断力の賜物だ。

恐らく、この「黒」の先には、「黒」を展開した必殺の拳が待っているのだろう。

流石は、「自分」だ。

しかし。

私の方が、より先を読んでいる。

そして、「黒」が四方から炸裂する。

轟轟とうなりを上げる力の本流の中で、日本刀が煌く。

一瞬。神楽は垣間見た。

「黒」の中で日本刀を煌かせた少女の瞳が、自分の「死」を捉えていることを。

今まで以上に、その瞳が、自分の「死」を意識させるほどに深淵を見つめていることを。

四方を囲った「黒」が一瞬のうちに殺戮し尽くされ霧散する中、日本刀が突き出てくる。

それも予測済み。

神楽はそれに対し、自分を中心に「黒」を展開。

同時に、右腕に展開した「黒」で殴りつける。

先の狂気の瞳を見てから、不安は拭えない。それでも、決死の覚悟で拳を繰り出す。

勝負をかけた渾身の一撃。

寄せてはかえず「黒」の奔流。

「黒」から抜け出した少女の狂気的笑みと、「死」を見つめる瞳。

「黒」を撒き散らす右腕。

煌く日本刀。

静寂。

そして。

朱。

Interlude 「罪」

過去 The Heroine's Side

Interlude

平成十五年二月十三日、私は家族を失った。

交通事故だった。

丁度私は学校にいて、授業中に教師に呼び出され、その事実を知った。

瞬間。目の前が真っ暗になった。世界と自分が断絶されたような感覚に陥った。

きつと、これが始めての絶望だったろう。

すぐさま病院に向かった。病院には母方の祖父祖母がいた。父方の祖父祖母はすでに亡くなっていて、もともと親戚も少ない家だったから、病院にはそれ以上親戚は来なかった。

よほど悲壮な顔つきだったのだろう。私を見た瞬間、祖母は涙を流しながら、私を抱きしめた。祖父は私の頭を撫でていた。

両親は即死。妹の神奈は意識不明の重体。

三人で買い物に出かけたところ、トラックが突っ込んだらしい。運転手も打ち所が悪く、亡くなったらしい。その時の私は怒りよりも絶望が強く、加害者のことなどどうでも良かったから、詳しくは知らない。

トラックが私の家族に衝突する瞬間、父が神奈をかばったことで神奈は即死を免れた。

意識不明。

しかし、それでも私には十分すぎるほどの希望だった。希望が大きすぎて、自然に私はその希望を恐れていた。もし、かなわなかったら。

そう思うと恐ろしくて、私は頭の中では神奈も死んだことにしていた。もちろん、それでも神奈が起きるといふ希望が頭の中を回っていた。

そして、それがかなわなかったときの絶望を想い、恐怖した。

そして、三日後、神奈は息を引き取った。

絶望の波が押し寄せ、私は泣いた。

その翌日、祖父祖母に連れられ、再び病院に訪れた。

なんでも、神奈を担当していた医師から話があるということだが、正直嫌な予感はしていた。

用意されていた部屋に入ると、そこには眼鏡をかけた中年の男が白衣を着て座っていた。

どうにも厳格そうな顔つきだ。

男は、私たちを見るなり、にこりと笑った。

普段笑わないのだろう。その笑みは酷くわざとらしい。

どうぞ、と席を勧められて、私たちは男の正面に座った。

座ったのを確認すると、男はまたにこりと口元を吊り上げた。

やはり、わざとらしい。

そもそも、死んだ患者の遺族に笑顔はどうなのだろうか。

別に神奈を助けられなかった医師に憤りを覚えたわけでもないし、一晩泣いたからある程度吹っ切れてはいた。

どういうわけか、我ながらこの順応は早かった。

すると男は、今度は急にまじめな顔になって、口を開いた。

こちらが元なのだろう。やせているからだだろうか、若干神経質にも見える。

「神奈さんを担当しました、霧玄総一郎といいます。……」

しばらくは、力不足で神奈を助けられず申し訳ない、といったことを言っていたが、あるとき突然口を閉ざし、私たちをじっと見つ

めてきた。

私たちも、その男の目に吸い寄せられるように、見入っていた。黒。しかし、どこまでも透き通っているようで、どこまでも透明感がないようにも見える。要するに、完全な黒。立体的、平面的に感じさせる黒。

酷く、居心地が悪くなった。

何もかも見透かされているようで、それでいて、なにもかもがそこにあるようで。人間、理解できないものは嫌うが、どこかで惹かれるものだ。

兎に角、その男の瞳に魅了された。

そして、男が本題を切り出した。

「実は、神奈さんの身体を……」

要するに、神奈の遺体を実験に使いたい、そういうことだった。今後、このような患者が助かるように、などと色々なことを言っていた。

最初、私は神奈の遺体を提供するつもりなど毛頭なかった。なぜなら、神奈を医師に「あげる」ように感じたからだ。

神奈の身体は神奈のものだから、誰にもそれを侵害することなど出来ない。あまつさえ、事故にあつて、これ以上傷つけたくはなかった。

しかし、それを聞いた祖父祖母の反応は私を驚かせた。了承したのだ。

どうしたことだろう。私にはその時の祖父祖母は正気に見えなかった。

どこか虚ろな雰囲気で、私とは違う何かを見ているようで。「神楽君。君の気持ちもよく分かる。だが、これはとても大切なことなんだ。分かってくれないか？」

男の瞳は相変わらず、異常な黒をたたえていて、見ていると居心地が悪くなる。

加えて、祖父祖母も私を涙ながらに説得し始めた。

「神奈は、まだ、若かった。まだ、何事も成さずに死んでしまった。でも、死して成すことができるというなら、それは神奈のためでもあるんだ」

「お父さんが守った神奈は結局死んでしまったけれど、それも無駄にならないわ。それに、もうこんな悲しい思いをする人を増やしたくないでしょう?」

その時の二人は、やはり正気ではなかったのではないか。涙を流しながら、論理的な理由で説得してきた。

「神楽君」

そして。

どういうわけだろうか。

私は。

了承してしまった。

そして、私は世界と断絶された。

それから苦痛の日々だった。

私は常に、神奈を手渡してしまったことを悔い、罪の意識にさいなまれた。

どうして、了承してしまったのか。

神奈のため?

否。ありえない。

医師に共感した?

否。ありえない。

祖父祖母の涙に負けた?

否。ありえない。

その場の空気に吞まれた?

否。それすらも、否。

その行動の原理は、心理の最奥。
触れてはならない禁忌。

自己を正常に保ちたいならば、それに触れてはならない。

何日も何日も、私は罪の意識にさいなまれた。
それだけではない。

私は世界から断絶された。

神楽を医師に渡してしまったあの瞬間、私と世界は断絶された。
私が断絶したのか。

世界が断絶したのか。

世界のあらゆるが違って見えた。

私の見てきた世界が、その瞬間に変貌した。
何物も理解できない。

理解しない。

交流を断絶したから。

学校に行っても同じ。

つまらない。

それどころか、苦しい。

どうしてクラスメイトたちはあんなにも楽しそうなのか。
気楽そうなのか。

私は、常に罪の意識に苛まれているというのに。
なぜ？

そう思えば思うほど。

世界は不理解の領域に遠ざかり、私と世界の溝は広がる一方だ。
やはり、私は断絶されたのだ。

いや、ひょっとすると、別の世界に迷い込んだのかもしれない。

神奈を、あの医師に譲り渡してしまったときから、私は違う世界に迷い込んでしまったのか。

しかし、それにしてもは妙なことがある。

私のことをつけまわす男がいる。

幼なじみで、変わっているが良いやつで、ひ弱で、でも、いざというときはやってくれる、昔からの友人が。

周囲からは、私とそいつは恋人同士であると認識されている。

愛の告白があつたわけでもないが、兎に角周囲はそう認識していた。

勿論、私たちも、昔からの友人だし、お互いに相手のことを気に入っているし、頼れる仲でもあつた。

だから、互いの「好き」という気持ちが恋で、二人が恋人だったら、これはとても良い関係だった。

周りから冷やかされても、関係ない。

お互いが、居心地がいいのだから。

だから、とても良い関係だ。

何度も救われたし、救った。

一緒にいて居心地がいい。

気兼ねしない。

そして、いざというときは頼れる。

昔からそうだった。

本人はひ弱で、体力もなければ力もない。

でも、いざというときはやってくれた。

そして、私も。

お互いに、お互いを認め合っていた。

だから、私は葛木命刻という男が好きだった。

その命刻が、私に付きまとう。

世界と断絶された私を、世界に繋ぎなおそうとする。

私の絶望から、悔恨から、自責から、開放しようとする。

私を想い、奔走している。

ならば、やはりこの世界は、私の知っている世界。
やはり、別の世界に迷い込んだわけではなかった。
そして、世界が断絶してきたわけでもない。

私が、世界から断絶しただけなのだ。

でも、私の絶望は晴れない。

むしろ、命刻はうるさいくらいだ。

私は自分の責任で絶望しているのだ。
人がどうこうできる問題ではない。

だから、こうして一人にして欲しい。

実際、そう頼んだ。

邪魔だと。

我ながら、酷いことを言ったものだ。

すると、命刻は悲しそうな顔をして、去るのだった。

その顔を見て、私は胸を締め付けられる思いだった。

私だって、こんな酷いことを言いたいわけではない。

それでも、私の最も深いところが、そう命令するのだ。

そうでなければ、いずれ崩壊すると。

一条神楽が、崩壊すると。

この罪を背負ったまま、幸せを享受してはならないと。

この罪を背負ったまま、彼の隣にいてはならないと。

だから、突き放した。

涙ながらに、突き放した。

そうだ、表面は酷く冷たく、しかし、心の最奥では泣いていた。

しかし、それが正しい。

この罪は、簡単には贖えないのだから。

そして、また世界と断絶された。

つらい。

つらい。

つらい。

嗚呼、独りとはこんなにもつらいものなのか。

嗚呼、独りとはこんなにも悲しいものなのか。

嗚呼、嗚呼。

素直な私は、繋がりを欲する。

しかし、心の奥深く、最も罪を背負っている部分が良しとしない。

これが贖罪なのだ。

誰にも許せない罪ならば、自分で抱えるしかない。

そして、そんな罪を抱えたまま誰かの隣にいてはならないと。

だから、拒絶する。

何度も話しかけてくるあの、私が好きだった男も拒絶する。

邪魔だ。

うるさい。

お前なんか知らない。

独りにしてくれ。

私に付きまとうな。

まだまだ、今でも信じられないほどの罵詈雑言を吐き、あの男を

拒絶した。

私も苦しいのに。

命刻を拒絶するのは苦しいのに。

なのに、命刻は分かってくれない。

どんな思いで、拒絶しているのか。

そして、今日も拒絶した。

一緒に帰ろう。

そう誘ってきた。

いつもの私たちなら、そんな言葉すらも要らなかった。

それなのに、一緒に帰ろうなんて言わせたのは私だ。

自分で作っておきながら、私は、命刻との間に出来た壁に嘆いた。

本当に、つらい。

手を差し伸べられる。

素直な私はすぐにでもその手を取りたかった。

一緒に帰りたかった。

クラスメイトとも仲良くしたかった。

世界と繋がっていたかった。

私と世界を繋ぎ直す、その優しい手に触れたかった。

しかし、傷ついた私がそうさせない。

この罪を背負ったまま命刻とはいはいけない。

誰にも許せない罪だから、背負わなくてはならない。

許されない罪を背負うのだから、命刻と一緒にいてはいけ
ない、と。

だから。

今日も、拒絶した。

酷いことを言って。

差し伸べられた温かい手を跳ね除けた。

つらい。

つらい。

私は酷い女だ。

こんな酷いことをしておきながら、どうしようもなくつらいのだ。

独りはつらいのだ。

つらいのだ。

そして、その孤独から連れ出そうとしてくれる温かい手が、常に
差し出される。

それを跳ね除けるのが、どれだけつらいのか。

つらい。

それを命刻も分かっているのだろう。

だから、孤独から連れ出そうと手を差し伸べる。

でも。

本当はその手を払い除けるのが一番つらい。

そうして、誰もいなくなつた教室に独りたたずむ。
夕焼けに照らされた、さびしい教室。
窓の外を見る。

みんなで楽しく下校している生徒たちが目に映る。
とつさに目をそらす。

独りの私にはまぶしすぎる。

それでも、私はその光景を羨望する。

つらい。

独りの私には、この光景はつらすぎる。

それでも、私はその光景を羨望する。

つらい。

その中に入ること許されない私には、この光景はつらすぎる。

それでも、私はその光景を羨望する。

つらい。

つらい。

つらい。

つらい。つらい。つらい。つらい。つらい。つらい。つ

らい。つらい。つらい。つらい。つらい。つらい。つらい。

つらい。つらい。つらい。つらい。

それでも。

私は、この光景を、羨望する。

自然、涙が頬を伝う。

独りはいやだと。

一緒にいたいと。

そう。

「私を、……独りにしないで……」
と。

知らず、声に出してつぶやいていた。

やはり、それが本心なのだ、と自覚する。

どうしようもないことだが、私はそう望んでいるのだ。

そして。

「やっど、本当が聞けたかな」
振り返る。

その先には、やはり命刻がいた。
涙が溢れて止まらない。

来てくれた。

やはり彼は、来てくれた。

どんなに酷いことを言っても、来てくれた。
そして。

「大丈夫。僕が、君を独りにしない」

そして、最も言っただけだったことを、言ってくれた。
しかし。

「帰って」

しかし、私の口から出たのは、拒絶だった。
違う。

私は、こんなことが言いたいのではない。
しかし、拒絶は止まらない。

「用はないわ。帰って」
違う。

「嫌だね」

「帰って」
違う。

こんなことが言いたいんじゃない。

「嫌だよ、僕は帰らない」

「じゃあ、私が帰るわ」
違う。

表面の私は冷徹ぶって、命刻を突き放す。

でも、私はこんなことが言いたいんじゃない。
ただ、ありがとって言いたい。

「それも駄目だ」

「貴方に指図される筋合いはないわ。何？　周りにもてはやされて、彼氏ぶってるの？」

違う違う。

私は、こんなことを言いたいんじゃない……。

表面の私は冷徹に、酷いことばかり言う。

本当の私を押し殺して、命刻を拒絶する。

しかし、命刻は引かない。

「違うよ。そんなの関係ない。誰だって、大切な人が悲しんでいるのは、つらいじゃないか」

「何？　自分がつらいから？　自分勝手ね」

「そうだね。自分勝手だ。でも、嫌なんだよ。君が悲しむのは。それに」

命刻……。

つらい、つらいよ。

「？　それに、なに？」

「それに、君の本当の声が聞こえたんだ。絶対に、連れて帰る」

「連れて帰る？　私は一人で帰れます」

つらい、つらいの。

こんな酷いことも言いたくない。

差し伸べられた手を取りたい。

だから。

助けて、命刻。

そして。

「その孤独から、君を連れて帰る」

そして、私の冷徹が砕け散る。

「……無理よ」

しかし、罪の私が、その手を取ることを許さない。

「どうして？」

「私は、貴方と一緒にいられない。いてはいけない。幸せを享受しちゃいけない」

溜め込んだ闇が、溢れかえる。

「?」

そうして、罪の私が闇を吐き出す。

医師にあげたの。分かる？ 神奈は事故で死んで、三日も生死の境で苦しんで、そして、死んだ。その神奈が、今度は医療研究に使われるの。ねえ、分かる？ 私は神奈に何もしてやれないばかりか、もっと苦しめてしまったの」

命刻は何も言わずに聞いている。

「でもね。私は、もっと許されない罪を負っているの」

つらい。つらい。つらい。

より一層口元を吊り上げて。

天を仰ぎ見て。

嗤。

「あつはははははははははははははははは！　安心したのよ。私は！！　事故で瀕死の妹が死んだことで、私は安心してたの！！」

より一層天を仰ぎ見て。

溢れる涙がこぼれないように。

「もう嫌だったのよ！！ 両親が死んで、絶望しきった！！ 神奈は瀕死で、生死をさまよっている。回復する可能性は低い。でも、生きていたら、もしかしたら、って思ってしまう！！」

大声で。

声に混じる涙をかき消すように。

「嫌だったの！！　つらかったの！！　神奈が起きるかもしれない。その希望がある限り、逆に起きないかもしれないという絶望が、日に日に膨らんでいくの！！　目覚めなくても、生きていてくれれば良いなんて、私はそんなに強くないの！！　希望が大きすぎて、叶わなかったときの絶望の大きさに、毎日恐怖したの！！　だから……」

もう溢れる涙をごまかせない。

私はうつむいて、声に涙を隠さずに訴える。

「だから、三日後に、神奈が死んだって聞いたとき、安心したの。ああ、もうこんな絶望に押しつぶされることもないんだなって。その時は、医師の提案に反対して見せておいて、でも、心の中では安心してたの。妹が死んで、安心してたの。それで、つらいからといって、神奈の遺体を見ることがしなかった。怖かったの。もしも、また息を吹き返したら。そうしたら、また希望と絶望の狭間で苦しまなくちゃいけない。だから、神奈に合わなかった。がんばったって言うてあげなかった。それどころか、医師の提案に従った。怖くて……神奈に合いたくなくて……研究にも……なんにでも……使って欲しいってッ……思ったの！！！」

罪の告白。

自分でも気づかないように隠していた罪の告白。

溢れる涙は止まらない。

震える身体を抱え込む。

最も大切な友人に、自分の罪を、さらけ出す。

大好きな人に、闇をさらけ出す。

つらい。つらい。つらい。

心がつぶれるほど。

「……ね？　ほら、……私は、貴方といちゃ……いけないの……誰にも許せない……罪だからッ」

「いいよ」

瞬間。命刻に抱きしめられていた。

「そんな罪、僕が許してあげる」

「何を言って……」

突拍子もないことを言う命刻に、うまく言い返せない。

ぎゅうと、より強く抱きしめられる。

「そんなこと、関係ないんだ」

「え……？」

「何があつたって、僕は、君が大切なんだ」

「っ」

涙が、止まらない。

差し伸べられた手をつかみに行けなかった私。

でも、差し伸べられた腕は。

「だから、神楽。僕が、君を独りにしない」

私の腕を掴みに来て、連れ出してくれた。

私を包んでいた、色々な私が砕け散る。

そして、私は差し伸べられた手を強く握り返す。

「……そばにいて、命刻……」

強く、強く抱きしめる。

それに、命刻は強く抱きしめ返す。

その強さが、ひたすらにうれしかった。

絶望と孤独から救い出してくれた幼なじみが、ひたすらに頼もしく、誇らしかった。

差し伸べられた手に、ひたすらに、感謝した。

「神楽。僕が、君を独りにしない」

私は、命刻の肩に顔をうずめ、盛大に泣いた。

I
n
t
e
r
l
u
d
e

o
u
t

神楽 「決着と真実」

現 The Heroine's Side

十六、

ピピピ、ピピピ、ピピピ……。

けたたましいアラームが鳴り響く。

なんだか、懐かしい夢を見ていた。

頬が涙で濡れている。

ふう、とため息をつきながら、またベッドに横になる。

思い出すのは、先ほどの夢。

まともな夢をみるのは、久しぶりだ。

罪の記憶と、誇れる幼なじみ。

思い出すと、目頭が熱くなる。

あの時いつてくれた言葉。

僕が君を独りにしない。

そう言ってくれた少年はもういない。

「……嘔吐き」

私は独りだ。

「おはよう。アリス。 いや、神楽」

「!?」

猫だ。

影のような黒。

にんまりと切り抜かれた黄色の目と口。

私を夢にいざない、夢の案内役。

その猫が、ここにいます。

「……貴方がいるってことは、また寝るの？」

猫が出てくるときは、決まって夢に連れて行かれる。

まだ、朝だというのに。

「違うよ。起きるんだよ」

「起きる？ 起きてるわ。そうだ リデルは？ あれ？ どうして……私は彼女に殺されて……」

頭が混乱している。

一度に二つの夢を見たからか。

命刻との夢の前は、確か、もう一人の私と戦って……。

猫はにんまりと笑っている。

「痛っ……」

突然、思い出したように右のわき腹が焼けるように痛む。

とつさに右腕で抑えたが、その腕にぬるりとした感触があった。

見れば、真っ赤に染まっていた。

「そう、か……最後、リデルに斬られて……」

どくどくと出血は止まらない。

かなり深く斬られている。

焼けるような痛みと、虚脱感が全身を襲う。

「は、はは……命刻が起きなくて、みんなを殺して、命刻まで殺して、拳句の果てに、自分に殺されるなんて……」

自嘲気味に笑う。

すでにその顔からは、血の気が引いている。

その様子を、猫はいつものようににんまりとしながら、黙っている。

ばしゃり、と血が溢れかえる。

「もう、駄目かな……。それに、もう、命刻もいない……。もう終わって、いい、よね……？」

少女は、許しを請うように猫につぶやく。

その瞳は、完全に絶望と諦観を映していた。

何もかもに絶望し、生きる気力さえもない。
そんな世界で、これ以上生きる必要もない。

この自業自得の極みのような痛みにおぼれて、終わってしまった
もいい。

少女はそう思った。

しかし。

「諦めるには、まだ早い」

猫はそれを許さなかった。

少女にはもう反論する気力すらない。溢れる血を抑えながら、ただひたすらに立ち尽くす。

猫がポチッと器用にボタンを押す。

すると、朝のニュースが流れる。

「……それでは、今日の占いです」

占い。

またか。

というか、ここ最近、占いしか見ていない気がする。

そして、その内容はいつも、同じ。

占いはいつも通りに進んでいく。

「……さそり座の貴方は、今日は大きな失望を感じることでしょ
う」

そして。

「ラッキーカラーはブルーです」

青。

いつもどおり。

「最期まで、いつもどおりね……？」

いつもどおり？

そして、「青」は。

あつた。食卓に「青い薔薇」。

「　　っ?」

猫がにんまりと笑う。

「どう、して……?」

思い出す。

そして、目の前の有り得ない光景にぎよっとする。

裂かれた腹の痛みも忘れて驚愕する。

「どうして……この薔薇があるの?」

有り得ない。有り得ない。有り得ない。

この薔薇が、存在するわけがない。

だって。

だって、この薔薇は。

あの事故のとき、命刻に救われた私の腕から離れて、トラックに当たって　　。

粉々に碎け散ったから。

「どうして!?!」

猫は笑って答えない。

「……ジジジジジジジジジジジジジジジジジジジジジジ」

「　　っ」
テレビが。

占いが終わった瞬間、終わった。

砂嵐。

何故？

有り得ない。有り得ない。有り得ない。

しかし。

しかし、しかし。

分かった。

この数日間の不自然が全て繋がる。

絶対に起きないと思わせる空間で眠る命刻。

トラックが突っ込んだまま放置されていた花屋。

信じられないほど薄情なことを言うクラスメイト。

「黒」を現実で展開しても、騒がれていないこと。

同じ占いしかないテレビ。

存在するはずのない「青い薔薇」。

そして、猫が言う「起きる」。

つまりは。

「ここは、夢？」

「その通り」

猫が笑う。

足元がぐらつく。

虚構だと分かった瞬間、世界が崩れていく。

「命刻が、生きてる？」

「そう。眠っているのは、君」

裂かれた腹の痛みも忘れて、少女は歓喜する。

これ以上の幸福があるうか。

知らず、頬を涙が伝う。

右腕が、温かい。

自分の血液だけではない。

内側からの温かさ。

それはきつと、自分の最も大切な人のぬくもり。

それはきつと、自分の最も大切な人が、自分を待って、眠っている自分の腕を握ってくれているから。

大切な人が、自分の帰りを切に願ってくれているから。

「見いつけた」

崩れ行く世界の中、リデルがそこに立っていた。

「さあ、殺しあおうよ」

ニコニコしながら、日本刀を構える。

しかし、それに対して少女は強い意志のこもった瞳で返す。

「悪いわね。私、もう死ねなくなっただわ」

「へえ。どうして？」

「大切な人が、命刻が、私を待ってくれている。それだけで、死ねない理由には十分すぎるわ」

神楽もまた、リデルと同じように右腕に日本刀を顕現する。

「ふうん。気づいたんだ？ でも、弱い神楽じゃあ、現実に耐えられないよ」

「そんなことは、問題じゃないのよ。大切な人のところに帰る。それが大切な」

「それはつまり、もう一度罪と向き合うつてことだよ？」

「それでも、私は帰る」

「そう……じゃあ、殺し合おう。神楽じゃ私に勝てないけど」

「いいえ、貴方は私……貴方に出来ることは、私に出来る」

「じゃあ」

「勝負よ」

そして。

リデルの瞳が、神楽の死を視る。

神楽の瞳が、リデルの死を視る。

煌き。

一閃。

果たして、リデルの首が宙を舞った。

「やあ、負けちゃったなあ……」

首だけになったリデルは、ぱらぱらと霧散しながらそうつぶやく。
「流石は、私だよ」

神楽は裂かれた肩を抑えながら、リデルの傍にしゃがみこむ。

「でも、神楽……現実には、本当につらいよ？」

「大丈夫よ」

そう言つて、神楽は右腕をリデルの頬に当てる。

「温かいでしょう？」

「うん。温かい……」

リデルの表情が弛緩し、自然な笑みを浮かべる。

「この温かさがあれば、きっと大丈夫」

「……そっか……そう、だね……彼となら……きっと……」

そしてリデルはにこりと微笑み、崩壊する世界に消えていった。

どさり、と神楽もその場に倒れる。

「ふう……正直、かなりキツイわ……ねえ、猫？」

にんまりと笑みを浮かべながら、シュレディンガーの猫は傍に
いる。

「大丈夫。あとは起きるだけさ。疲れただろう？ いいよ。ひと眠
りおし」

いつもよりも、暖かな笑みを浮かべる猫に、少女は微笑み、この
先で待つ少年を夢見ながら、幸せそうな笑顔を浮かべて瞳を閉じた。

私は、「夢」の中で、「夢」を見る。

ところで、「夢」の「夢」とは何なのだろう。

勿論、生理学的に、ではなく、概念的に。

全部で三層ある脳。

ある人が言った。

人生は夢だ、と。

では、最も進化した部分、第三層目の「夢」が、現実だ。

ならば、第二層目の「夢」が、私たちが普段見ている「夢」だ。それならば。

第一層目は？

人間の意識の最奥。

本能。

その第一層目、本能が見る「夢」とは、何なのだろうか。

第二層目の「夢」で「夢」を見る必要がある。

夢の中で夢を見る。

第三層目。

社会があり、ルールがある。

人との付き合いなど、様々なしがらみがある、煩わしい世界。

第二層目。

基本的にその人間の欲望などが反映される、それなりに勝手な世界。

それでも、他者が存在し、コミュニケーションを取る。では。

第一層目。

本能の夢。

煩わしさのない夢。

つまりは、タテマエを無視した、本能の世界ということではないだろうか。

私たちの、無意識の集まりではないか？

夢と夢の狭間。

どこだかよく分からない空間。

その中で、一つだけ理解できるものが、目の前にある。

否、いる。

夢の中で猫と追い掛け回した、白いウサギ。

タキシードを着込み、擬人化され、人形のように丸くデフォルメされている。

どんなにがんばっても捕まえられなかった白ウサギ。

女王の城では、後一步というところで、消えた不思議な白ウサギ。

女王が、捕まえることを禁止した白ウサギ。

猫が、ゴールだといった白ウサギ。

ならば、ここが、ゴールなのか。

白ウサギが手を差し出す。

この手を取れば、ゴールなのか。

命刻のいる世界に、返れるのか。

ならば。

私は。

この手を取ろう。

瞬間。白ウサギが白に霧散し、世界を白く白く、純白に焼ききつた。

魔術師「狂喜」

現 The Magician's Side

四、

冬森市県立総合病院、院長室。

四百六十八号室、一条神楽の担当医、霧玄総一郎は狂喜していた。部屋には「人払い」の結果が張っており、自然と人が近づかない。その閉ざされた空間の中で、霧玄総一郎は狂喜していた。

「く、くくく、く、あつははははははッ！！」

白衣の狂人は、一条神楽に施した術式が稼動したことに狂喜していた。

「遂に……遂に遂にッ！！ くつく、あつはははははははは！！ 至る！！ 至る至る至る！！ 遂にッ、至るうッ！！」

一通り高笑いをする、机に手を突く。

しかし、肩は激しく上下し、口元は異常なくらいにつりあがっている。

モニターを見て、また歓喜する。

今までの、わざとらしい笑みではない。

心からの笑み。

しかし、狂気の笑みは、狂人の笑み。

だが、自分がどんな顔で笑っているかなど、男には関係ない。

もとより、あまり笑わない男だ。

だから、笑うときには狂喜する。

「くつく、く、く、くく、あは、あははは、あつーははははははははははッ！！ いいぞ、いいぞ！！ 流石だ！！ 流石だ！！

流石だ！！ 抑止力が働いただけのことはある！！ 念願の成就だ！！ 私の誓いが今ッ！！ 果たされる！！ ああああ優

希！！ 見ているかい？ 詩帆！！ 見ているかい？ 私は、ああ
ああ私は！！ 誓いを果たすよ！！」

狂喜する男は、涙を流して笑う。

「見てるかーい？　平和が、顕現する！！　くつく、くくく、くは、
ははは、あつはははははははははははははははは！……！
あー……っはははははははははははははははははははは
ははは……！！！」

命刻 「魔術」

現 The Hero's Side

六、

冬森市県立総合病院、四百六十八号室。

一条神楽の病室で異変が起こった。

魔術が発動している？

抑止力と名乗った少女が去り、暫くしてこの異変が起こった。

病室を支配していた、「異質」 これを魔術、結界と言っらし

い が、動き出した。

それぞれの魔術が、まるで歯車のように、お互いに共鳴しあい、この病室内で稼動していく。

残された自分は魔術の強い流れに翻弄されながら、あわてず冷静に、その状況を認識する。

そうだ。ここであわてていてはどうしようもない。

間違いなく、今この瞬間、魔術師の計画が動き出した。

魔術に詳しくない自分は、この場で魔術を説き明かし、神楽を助け出さなければならぬ。

分かる。

この部屋で渦巻いている魔術は、間違いなく、魔術師の施したものだ。

そして。

神楽を中心として流れている魔術は、神楽のものだ。

分かる。

流れが違うのだ。

魔力、というのだったか、兎に角、魔術師の魔力と神楽の魔力は

違う。

ほんの微妙な差異だが、やはり違う。

神楽が先に魔術を発動して、その後部屋の魔術が動き出したということは、つまり、部屋の魔術が神楽に介入しようとしているということだ。

なら、まだ遅くない。

部屋の魔術が神楽に介入する前に、神楽を起こせばいい。

しかし、どうする？

この部屋には、絶対に神楽を起こさないような、仕掛け 結界が施されている。

魔術を使えない自分に、それを破って神楽を起こすことが出来るのか？

出来るか、ではない。

やるしかないのだ。

しかし、どうする？

答えは一つだ。

クレアさんに教えてもらった。

魔術の基本を。

強い意志は具現する。

それは、世界の隠された基本法則。

まだ間に合う。

この部屋全体を包む、魔術師の意思の塊 結界 を塗り替えるほどの意志の力を。

しかし、自分は十分なほど強い意志で信じてきた。

それでも、結界は塗り替えられない。

魔術師の意思が強いのか？

確かに、魔術師の意思は、オドを使って増幅させられている。

それでも、自分もオドを作り出すことが出来ている、とクレアさんが教えてくれた。

ならば、意志の力はこちらが上か、悪くても同等。一条神楽を救うという一点において、自分の意思が、彼女を利用しようとする魔術師の意思に劣ることだけは絶対に有り得ない。

どんな強固な意志だろうと、自分のこの思いだけは負けない自身がある。

しかし、結界は塗り替えられない。

何かが、足りないのだ。

何が足りない？

当然、意志の力だ。

絶対的に他者を排除したこの病室において、魔術師の意思と、自分の意思。

この二つの世界だ。

いや、本当にそうか？

本当に、この部屋には自分と魔術師の意思しかないのか？

そして、少年は自分の間違いに気づく。

最後の意志者、一条神楽がいる。

そうだ。神楽が生還を望まなければ、この結界は塗り替えられない。

どうする？

神楽に意識がないのは分かっている。

だからこそ、神楽の深層無意識に、生還するという強い思念を持たせなければならぬ。

しかし、そんな、他人の心理に介入するような芸当……魔術も使えない自分には、出来ない。

心が折れそうになる。

だが、まだだ。

まだ、負けられない。

勝負はついていない。

考える。

魔術が使えない？

落ち着け。

自分は一つだけ、持っている。

新米の自分でも扱える魔術を。

アーティファクト
「魔術道具」による魔術を。

「蒼き薔薇」のタリスマンによる、魔術を。

クレアさんからもらった、その唯一の手段にして、自分の切り札を取り出す。

持っていれば、あらゆる言語圏の人間とも意思の疎通が出来る。

しかし、どうする？

部屋の魔術はどんどん回転しながら加速していく。

こんな魔術でどうする？

しかし、自分にはこれしかない。

これを使って、どうにかなるのか？

彼らが眠りの淵から現実に復帰するとき、現実からの呼びか

けが、彼らを助ける。もしも彼女が目覚めるようなら、名前を呼んであげると良い。

担当医の言葉が脳裏に蘇る。

これだ。

このタリスマンで、神楽に言葉を届けるんだ。

呼びかける。

しかし、どうすれば届く？

このタリスマンは、意思疎通ではあるが、それは言語圏の違いを解消する程度のものだ。

眠っていて、ましてや魔術の保護までかけられている神楽に言葉を届けるには、どうすればいい？

我々は『魔術回路』を用いてマナをオドにろ過し、そこに自分の意思を含み、自分の意思が世界に与える影響力を上乗せし、世界を塗り替える。

自分が頼った魔術師の言葉。

そうだ。

力を上乗せすれば、あるいは。

「オド」を上乗せする。

どうする？

思い出せ。

マナをオドにろ過し……

そうだ。ろ過だ。

世界中に満ちている意思を、ろ過する。
そして。

「魔術回路」

これだ。

これで「オド」つまり、自分が使える魔力を作り出し、このタリスマンに上乘せする。

幸い、自分には優秀な「魔術回路」があるらしく、それも一部開いているらしい。

クレアさんは、理解できなくても身体が理解できていると言っていた。

でも、それでは駄目だ。

身体が勝手に作り出すだけのオドでは、間に合わない。もっと。

自分には優秀な「魔術回路」があるのだ。

これを理解し、正しく稼働させ、大量のオドを創り上げる。

そして、タリスマンの力を増幅できれば、あるいは。

そう、あるいは、神楽に届くのではないか。

神楽の身体を魔力が流れている。

全身を。

恐ろしい速度で。

世界を構築していた意思をそぎ落とし、自分が使えるオドにろ過している。

これだ。

これが、「魔術回路」。

成るほど。

回路とはよく言ったものだ。

神楽の体中を、魔力が走っている。

これをつくれば。

自分の「魔術回路」を開く。

出来るはずだ。

クレアさんは自分には魔術適正があると言っていた。
自分には、優秀な「魔術回路」があると Saying いた。
そして。

目の前には完璧なお手本がいる。

さっきの白い女の子　抑止力　の言っていた「蒼薔薇」。

自分には、この意味が分かる。

不可能の代名詞「蒼薔薇」。

存在し得ないその薔薇が、もしも存在したら、どうなるか。
不可能を可能にする、万能の代名詞になるのではないか。
そうだ、だから。

ここに咲き誇る「蒼薔薇」は、「万能」なのだ。

その「万能」の「魔術回路」だ。

これほどのお手本は存在しないだろう。

さあ。

魔力を創ろう。

急げ。

急げ。

急げ。

まずはイメージだ。

神楽の身体を巡っている「魔術回路」と同じように、自分の中に、
回路をイメージしろ。

世界の強靱な意志をもそぎ落とす、繊細かつ強力な回路を。
イメージするんだ。

一本。

すうと、魔力が身体を巡る。

間違いない。

自分は「魔」を見極める力がある。

これは、魔力だ。

しかし、すごい汗。

恐ろしい疲労。

まだ、たった一本だ。

もっと。

もっとだ。

神楽を包む魔術を塗り替えるにはまだ程遠い。
イメージしろ。

二本。

「く、あ」

全身を魔力と共に、痛みが駆け回る。

まだだ。

まだまだ、足りない。

三本。

「ぐ、あ、あ、あ」

まだまだ、もっとだ。

急げ。

痛みなんか気にするな。

開け。

イメージしろ。

肉体の限界なんて、無視だ。

四本。

五本。

六本。

でくる。

加えて、全身を走る激痛。

全ての負担は、脳に。

一人の人間では受け止めきれないような情報量が、脳に叩きつけられる。

焼ききれる。

でも。

構うな。

そんな心配をするくらいなら、回路を開け！！

十三。

十四。

十五。

十六。

十七。

十八。

十九。

二十。

二十一。

二十二。

二十三。

二十四

。

開く。

どんどん開いていく。

全身が回路にでもなったと思うくらい、回路が開く。
開ききった回路。

完全に繋がった回路は、脳に負担をかけていない。
体中が熱い。

しかし。

出来上がった。
あとは。

タリスマンに、自分の魔力を流し込む。
初めての経験だが、さほど難しくはない。

タリスマンを持つ腕から、魔力が流れていく。
タリスマンに描かれた、青の薔薇が発光する。
青白く。

混沌とした病室の中で、美しい。

嗚呼、無理して回路を開きすぎたのか、ショートしているのが分かる。

気にするな。

体中が悲鳴を上げている。

気にするな。

なんといつても、思考はクリアだ。

神楽にはいよる。

いつの間にか、倒れていたようだ。

そして。

神楽の手を強く握り締める。

強く、強く。

タリスマンの回路にも酷く負担をかけているようだ。

青白い光は、どこまでも強く増していく。

部屋を青白く照らすほどに。

もっとだ。

もっと、魔力を。

タリスマンに流し込む。

魔術というものは、すなわち世界を塗り替えることにあります。

そして、最期の鍵。

世界を、塗り替える。

この「病室」という限定空間を、塗り替える。

この限定空間を支配する魔術を、塗り替える！！

タリスマンに刻印された「蒼薔薇」の光は頂点に達し、病室を、
蒼の極光で塗り替えた。

迸る蒼の極光の中、少年は少女の手を強く握り締める。
やるだけのことはやった。
あとは、「夢」の中の神楽に。
自分の声を届けるだけだ。

「
神楽ッ」

そして、少年は、少女の名を呼ぶ。

そして。

魔術師の魔術は、跡形もなく砕け散った。

魔術師 「憤怒」

現 The Magician's Side

五、

冬森市県立総合病院、院長室。

「何故だ！？ 何故だ、何故だぁッ！！」

霧玄総一郎はデスクを思い切り叩きつける。

うまくいっていた。

念願の成就がすぐそこまで来た。

世界的抑止力の襲撃も、事前に予測し対策をたて、撃退した。

完璧だった。

予測は見事に的中していた。

病室には非力な高校生がいるだけだった。

完全に、成功したと思った。

しかし。

「何故だアアアッ！！ 何故何故何故ッ！！ 何故エエエエ

ッ！！！！」

バサバサバサッ。

総一郎はデスクに乗っていた資料などを弾き飛ばす。

怒りに任せて暴れ、眼鏡がずれているが、そんなことに気づく風

もなく、ひたすらに暴れ狂う。

そうだ。

順調だったのだ。

それが、突然。

モニターが、蒼の極光で塗り替えられた。

そして、自分の魔術さえも。

「ふざけるなアッ！！ こんな小僧に……私が三年もかけて完成さ

せた魔術が塗り替えられるだ！？ 三年だぞ！！ 全てをかけて作り上げた魔術が！！ あああああ、ふざけるなア！！」

あたり一面に当り散らす。
全てをかけた研究だった。

それが、最後の最後でこの魔術師でもないような少年に打破される。

総一郎は怒りで震えながら、吼え続ける。

「何のために、何のために、この地位を手に入れたと思っている！
！ この禁忌の魔術を、他の魔術師たちに見つからないように研究するために！！ 合法的に検体を手に入れるために！！ ここで、ここまできてエー！！」

禁忌とされる魔術の研究を、他の魔術師に咎められないように。

一般に魔術師は他の魔術師に干渉しないが、世界を変えるほどの魔術に手を出そうとしている魔術師は、肅清される。

それを知られないように、検体を合法的に手に入れられる地位まで手に入れた。

ここで、ここで、終わってなるものか。

少年を止める。

総一郎がモニターから目を離して立ち上がり、一条神楽の病室へと駆け出そうとすると、入り口から声を掛けられた。

「もう遅いだろう」

「誰だっ！！ つ！？ 貴様……ローゼンクロイツ……」

黒のスーツに身を包む美女を前に、総一郎は明らかに狼狽した。

「貴様……何故ここが……」

「ふふふ、いや、あの少年が気になって探ってみれば、なかなか面白いことになっているだろう？ もっと調べてみたら、貴方が出てきたというとき。彼には感謝しないといけないな。お陰で私の『探し者』が見つかった」

「おのれ……邪魔をするなっ！！ あと一步なんだ！！ 分かるか！？ 私の全てをかけた研究だ！！」

総一郎は怒りに身を任せてデスクを叩きながら喚く。

そんな様子を見ても、クレアは微動だにしない。

「ふふ、そんなに通りたければ力ずくで通ればいい。でも、もう遅いな。彼女はすぐに帰ってくる。それくらい、分かっているだろう？ 少年の魔術が貴方の魔術を完全に塗りつぶし、眠りの淵にあった彼女を呼び覚ましている。貴方の完敗だ」

「くう……おのれ、おのれ、おのれおのれおのれおのれえ！！！！
あああああああああああああ つ！！！！！！」

がしゃん、と怒りに任せてデスクの上のものをありったけ弾き飛ばすと、総一郎は脱力したようにソファに身を沈めた。

「は、はは、私の、負けだよ」

そうして、クレアは蒼の極光のみを映し出すモニターを見やり、つぶやく。

「さあ、少年がこれだけの偉業を成し遂げたんだ。起きないわけにはいかないだろう、神楽君？」

神楽 「神。そして再会」

集合無意識

The Heroine's Side

十七、

「なに、ここ……」

一面、白。

純白の世界。

「ここは、集合無意識。世界を形作っているところ」

後ろから声がかかる。

猫だ。

「ようこそ、神の領域へ」

そういう猫はにんまりと笑い、私の前に歩み寄る。

純白の世界で、猫はただただ黒い。

「神の領域？」

「そう。ここは、人間の無意識の集合。世界のあり方を決定しているところ。魔術を知った君なら分かると思う。『強い意志は具現する』。もともと、この世界の形すらも意思によって出来上がっているのさ」

猫の説明は相変わらず、よく分からない。

「ここは、選ばれた者しか入れない、神の領域。そして君は許された。ここは集合無意識。人間の無意識の集まり。その、神の領域に、今君はいる」

「神の領域って言うのが、よく分からないわ」

「だからね、世界っていうのはもっと複雑なものなんだ。よく分からないものなんだ。だから、分かりやすく形作る。それが、ここ、集合無意識。でも、理解できないものは皆嫌いだから、皆で形作っているのさ」

「そう。分かったような、分からなかったような」

「簡単さ。つまり、ここには全ての人間の無意識が集まっている。君が何かを命じれば、全ての人間が、無意識下にそれを了承する。

例えば、『ドラゴンが存在する』とか、面白いね。全世界の人間がそう思うことになる。世界は人間の無意識の認識によって出来ているのだから、世界にはドラゴンが出てくるだろうね。そして、それを当然のように受け入れているのさ」

「そんなこと、信じられないわ」

「でも、それが真実さ。だから、ここは神の領域。そしてここでは君が神さ。君が命じれば、それが事実となる。ここは、そんな世界なのさ」

にわかには信じがたい話。

しかし、猫が嘘を言うとは思えない。それに。

この世界には、確かに全てがある。

具体的にはよく分からないが、この純白の中には全てがあるのだ。分かったわ。信じる」

「うん。じゃあ、何か命じてごらんよ。そうだね、例えば、『犯罪者は死ぬ』とか。世界の平和のためになるね」

「死ぬ、なんて……」

「実際、死んだ方がいい犯罪者なんていくらでもいるだろうね」

それは確かだ。

世界にはどうしようもない犯罪者たちがいて、死ぬべき人たちもいるだろう。

「でも、気をつけてね。ここに集まっているのは、無意識。言われたことを、忠実に実行するだけ。だから、『犯罪者は死ぬ』だと、どんな些細な罪を抱いている人間も、なんのためらいもなく自殺するよ」

どんな些細な罪も。

万引き。

いや、もつと身近な、例えば、約束を破った、とか。

「だから、出来るだけ条件を絞るんだよ。他に被害が及ばないように、しっかりと条件を絞って、命じるんだ。さあ、やってごらん」

猫はにんまりと笑いながら、促してくる。

でも、私は。

「いやよ」

「どうして？」

猫はにんまりと笑ったままだ。

「だって、良くないわ」

「そうかな？」

「……少なくとも、私には出来ないわ。だって、そんなの、人間には過ぎた力だもの」

そうだ。

たとえどれだけすごい力でも、人間には大きすぎる力だ。

所詮、人は神にはなれない。

猫は口を大きく裂く。

「そう。つまりは、ここに入れるのはそういう人間。世界に力を認められていて、かつ、絶対の力を前に謙虚でいられる人間でなければ、ここには入れないのさ。だから、神楽、君は許されたんだ」

じゃあ、と猫は続ける。

「こういふのはどうかな？ 『居眠り運転は絶対にしてはいけない』。これを全人間の無意識下に叩き込むというのは？」

それはつまり。

こういうことを全人類が固く守っていれば、私の家族は死なずにすんだ、とそういうことか？

それでも。

「それでも、やめておくわ」

猫はしばらく、私を見つめる。

そして。

「そう。君は正しい。それじゃあ、どうする？」

どうする？

この世界を統治する力を前にして。

世界に永久の平和をもたらすことの出来る力を前にして。

絶対の力を前にして。

神の力を前にして。

どうする？

私は。

「こんなところに、用はないわ」

そうだ。

私が帰るところは決まっている。

こんなところに、用はない。

「命刻のところに、帰るわ」

「そう。なら、起きよう」

現実には。

虚構の現実ではなく。

本当の、現実には。

大好きな幼なじみがいる現実には。

恋人が待つ、現実には。

「でも、それはとても難しい」

そこで、猫は目を細める。

「この集合無意識に至って、ここから帰るのは、とても難しい。この不思議の世界には、ウサギの穴はない。つまり」

猫は口を大きく裂く。

「この広大な無意識の海を、渡って帰らないといけない」

世界の全てがあるこの世界。

そこを渡るということ。

膨大な情報量に、飛び込むということ。

それでも。

私は。

ためらいなく、無意識の海に飛び込んだ。

瞬間。脳に激痛が走る。

覚悟していた情報量の比ではない。

全身に押し寄せる情報。

無意識の嵐。

全人類の思考が、今、押し寄せている。

喜怒哀楽。

全ての情が、押し寄せる。

部分的に。

次から次へと。

世界が分らない。

そもそも。

この集合無意識は、理解できるはずがない。

何しろ、この世界そのものが、神なのだ。

ぶつかる無意識に、何もかもが分からなくなっていく。

自分というものさえも、よく分らない。

何しろ、コミュニケーションではない。

一方的な情報の受信。

私から送信することはない。

私に返信されることはなく。

一方的に、無意識がぶつけられる。

成るほど。

猫が大変だというのもよく分かる。

気が狂う。

膨大な無意識の連続に、このままでは自分が無くなってしまふ。

「大丈夫。ここでは、僕が守るから」

一瞬、猫が私の前に現れる。

そして。

黒に霧散する。

猫の漆黒は、世界の純白を侵食し、塗り替え、私を包む。
落ち着く。

私が、かすかに確認できる。

それでも、無意識の海は押し寄せる。

「後は、向こうの仕事だね」

猫が何を言っているのかよく分からない。

それでも、私はもがく。

自分を失わないように。

私を独りにしないといってくれた少年の元へ返れるように。

「ら…… 楽……」

何かが聞こえる。

押し寄せる無意識の中、かすかに聞こえる、懐かしい声。

猫の黒が、無意識の海を押さえてくれている。

だからこそ、彼方に聞こえる、懐かしい声。

猫の黒が、押し負ける。

無意識の海が、なだれ込む。

懐かしい声も、よく聞こえなくなる。

しかし、私は。

その声に、手を伸ばす。

強く、強く。

懐かしい声に、手を伸ばす。

その声に届くように、懸命に。

無意識の海で、自分を見失わないようにしながら、懸命に。

その声に。

手を伸ばす。

「 神楽ッ！！！」

そして、手が握られる。

そして。

そのまま。

力強く。

絆は確かに結ばれて

無意識の海から、引き上げられた。

目を覚ます。

まどろんでいた意識が、覚醒していく。
ぼやける視界。

その先には。

「おはよう」

涙ぐむ少年。

痛いくらいに、手を握られている。

「命、刻、？」

「そうだよ」

そして、少年は微笑む。

嗚呼、これが、私の見たかったもの。
やはり彼は、私を助け出してくれた。

そして、ここが、私の居場所。
少年は、涙ぐみながらも、無理に笑って。

「おかえり、神楽」

だから、私も、溢れる涙も構わず、無理に笑って。

「ただいま、命刻」

神楽 「神。そして再会」(後書き)

前半戦終了です。

後半戦は、クレアと総一郎、神罰症候群と神楽の罪に焦点を当てます。

量としては前半戦の半分もないと思いますが……。

魔術師 「TYPE FIRST」(前書き)

後半戦スタートです。

魔術師 「TYPE FIRST」

現 The Magician's Side

六、

「流石に、少年の頑張りに応えるだけのことはしたようだね、神楽君。いやはや、あの少年、まさか、魔術に関してほとんど無知のあの少年が、ここまでやってのけるとは。弟子にでもとろうか」

黒髪の美女、クレアが静寂を取り戻した病室をモニター越しに覗いている。再開を果たした少年と少女が、涙を流して抱き合っている。

そのモニターの隣では、中年の男がソファに身を任せて脱力している。

「さて……総一郎。全ては終わった。今ならまだ、本部に連絡をすることもない。私は今、『薔薇十字』のローゼンクロイツとしてではなく、貴方の旧友としてここにいる。貴方が、ここで諦めるというのなら」

諭すような口調のクレアに、総一郎は口元を片方だけ釣り上げて、顔を上げる。

「……諦める？ 私が？ まさか、本当に私が諦めるとでも思っているのか、ローゼンクロイツ？」

見上げる男の瞳には、失敗から来る絶望、妨害をしてきたクレアへの憎悪、未だに消えない驚愕、負の感情が多くこもっていることが見て取れたが、そのどれよりも多くの要素を孕んでいる。

それは、狂気。

男の瞳は、絶望、憎悪、驚愕を映しつつも、希望、歓喜、冷静さといった、この場において相応しくない色を湛えている。

この男は、未だ狂夢から抜け出せずにいる

しかし、クレアは総一郎の問いには答えず、先程の続きを述べる。
「諦めるというのなら、私は貴方を見逃そう。貴方の境遇を知っているからこそ、だ。共に研究をした同士として、私には貴方を止める責任があつた。それに間に合わなかった私にも罪がある」

「罪？ それは、『薔薇十字』としてのローゼンクロイツの責任だろう？」

「いや、私は同士として、凶行に走る貴方を止める義務があつた。貴方の同士であるならば、そうしなければならなかった」

「くく、それは君が勝手に背負った十字架だ。好きにするといい。だが、私は止まらん。諦めるつもりはない」

「一条神楽が目覚まし、失敗したというのに、まだ諦められないのか？」

「……当然だ。私は誓つたのだ、妻と、娘に。ローゼンクロイツ。君は旧友だ。友を失うのは私も悲しい。ここで去ればよし。邪魔立てをするというのなら、君とて容赦はしない」

「戦えば、私が勝つ」

「それでも、だ。これは譲れないものなのだ」

「……は。総一郎。貴方がどれだけ努力をしても、優希君も、詩帆君も戻つてこない。そのくらい、分かるだろう？」

「なに？ はは、君もそんなことを言うのか！」

それを聞いて、男は声を上げて笑い出す。

「はははははははは！ なんだ、ローゼンクロイツ。君は私が妻と娘を蘇らせる為に、集合無意識に至ろうとしていると思つていいのか？ くくく、これは傑作だ。悪いがそれは大はずれだ。私はそんなことはしないぞ！？」

男はなお笑い続ける。狂気ではなく、心底楽しそうに笑う。

「くく、まあ、無理もない。優希にもそう言われた。『私が死んでも生き返らせようなんてことを考えるな』とな」

「ならば、何の為に？」

「それは言えない。そうだな、新たなる治世を始めるとでも言おうか。私は、神になる」

「神に？」

「悪いが話はここまでだ。私には、さほど時間も残されていない」
「なに？　どういう……」

「こぼ。」

霧玄総一郎が、盛大に血を吐き出した。

「神楽、よかった……」

「命刻……感じたよ。命刻の温かさ。命刻の声」

少年と少女の感動の再会。

そこに、ぬつと黒い猫が入り込む。

「感動の再会に水を差すようで悪いけど」

「うわっ」

「猫！？」

黒い影のような猫が、にんまりと三日月のように口を裂いて笑っている。

「君は……？」

突然の闖入者に混乱する少年。

「それはあとで説明するよ。今は、時間がない」
「時間？」

少年と少女が顔を見合わせる。

そんな二人に、猫は顔をぬつと突き出して言う。

「倒れて、ただ起き上がる手はないよ。君たちも……勿論、相手方も、ね」

「相手方……魔術師？」

「そう」

「ただ起き上がる手はないって……」

「つまり、叩くなら、今」

「待つて、ついていけない」

勝手に話を進めていきそうな少年と猫に、少女が待ったをかける。
「あ、そうか。神楽は寝ていたから分からないんだね。今回の事件は」

「それは歩きながら説明するよ。兎に角、急ごう。今、上では他の魔術師が、彼を止めている。力の差は歴然だけど、万が一ということがある。神楽、魔術は使えるかい？」

「え？」

突然話を振られて困惑する少女。

「『黒』だよ。ここで顕現できる？」

「えっと……」

「集中して、自分のイメージを世界に押し付けるんだ」

「こう、だっけ？」

轟。

少女の掌の上で、黒い竜巻が旋廻する。

「大丈夫みたいだね。いざとなったら戦うかもしれないから、それを忘れないで」

「うん」

少女が手を握ると、黒い竜巻も消えた。

今度は少年が目を丸くしている。

「これが……魔術……」

「そのあたりの説明も含めて、歩きながら説明する。いいね。さあ、立つて」

猫にせかされ、少女は起き上がる。

点滴のチューブなどもあるが、構わず全て引き抜いた。

「でも、どこに行くの？」

「君に仕掛けてきた魔術師のところさ」

「誰だか分かるの？」

そこで、猫は少年に向かって首をかしげる。

君は分かるかい？ いや、君に言えるかい？ そう問うように。

「多分だけど……」

少年は少女の顔を一瞬見て、戸惑うような表情を見せたが、意を決したように言う。

「霧玄先生、だと思う」

「え……？」

少女の表情が凍りつく。少年は悔しそうな、悲しそうな表情。

おそらく、今、少女の中では言いようもない負の感情が渦巻いている。その負の感情の正体を、少女自体が封印しているから、得体の知れない感覚が、少女を不安にしているに違いない。少女の過去と、少女すら気づいていない罪を知る少年には、それが分かった。

だが、猫は容赦なく現実を突きつける。

「そう。敵は霧玄総一郎。君の主治医。この病院の院長。いいかい？ 僕たちは、これから院長室へ向かう。今まで起こっていたことの説明は、その途中で僕がする。時間がない。さあ、行くよ」

「嘘……霧玄先生が？ ……そんな……」

そして、二人は猫に連れられて病室を後にした。

「……か、は……、く、はあ、はあ……」

大量の血液を吐き出した総一郎は、その血だらけの口元を拭くと、

ソファから立ち上がる。口元から血を流し、満身創痍といった風貌で口元を釣り上げ、その瞳を目いっぱい見開いている様子は、正に彼の狂気を体現している。

「総一郎……貴方、その血は……」

クレアが初めて動揺を見せる。

それに、総一郎はにやりと無理に笑って答える。

「三年前だ。TYPE FIRSTの暴走を止めるのに、相当な代償を伴った」

「三年前？ TYPE FIRST？ ……暴走？ いや まさか」

「見当はついていたようじゃないか」

「ならば……貴方が共に連れて出た魔術師たちが見当たらないのも……」

「TYPE FIRSTに飲まれたからだ」

「馬鹿な……」

「そして、TYPE SECONDが一条神楽だ」

「……馬鹿げている」

「言っているだろう？ 誓いの為なら、私はどんな馬鹿げたことだつてして見せよう。だから、どけ、ローゼンクロイツ。見ての通り、私に残された時間は少ない。邪魔をするなら」

「悪いが、邪魔をする」

「ならば」

「ここで死ね」

そして、二人の魔術師は激突する。

クレアは歴戦の魔術師だ。

魔術結社「薔薇十字」の長にして、一流の魔術師。

クレアは右腕を総一郎に向けてかざし、同時に指を弾く。

それが彼女なりの魔術始動の精神の切り替え方法であり、魔術のトリガー。言わばピストルの撃鉄。

彼女の弾指で総一郎を基点に、紅蓮の炎が螺旋を描いて顕現し、その灼熱で以って焼却する。燃え盛る業火に無駄はなく、それは決して炎ではない。対象を焼却する。その一点にのみ特化した魔術の結晶。神楽の「黒」が破壊の結晶であるならば、彼女の「紅蓮」は焼却の結晶。

吞まれたら最後、総一郎は逆巻く紅蓮の中でなす術なく灰燼と化する

「いいかい？ 今話したことが全てだよ。霧玄総一郎は魔術師で、神楽を利用して集合無意識に至ろうとしていた。いや、至ろうとしている。きつとまだ諦めていない。ここで逃がしたら、またいつ仕掛けられるか分からない。いいかい？ 相手の計算が大きく狂った今こそが、最高にして唯一のチャンス」

猫が先導し、二人も走る。

その中、その表情に若干の暗い影を落としている少女に、少年が気遣い声を掛ける。

「神楽、大丈夫？」

しかし、少女は気丈に笑顔を見せる。

「大丈夫。私には、命刻があるから。 この手の暖かさがあれば、なんだって、大丈夫」

そう言って、つないだ右腕を強く、強く結ぶ。

「夢の中でもね、感じたの。この右腕の暖かさが、私に希望をくれて、命刻の声が、私をここに帰してくれた。だから」

少女は、不安も何もかも、無理矢理に払拭するような笑顔を浮かべる。

「だから、命刻と一緒になら、何でも大丈夫！」

それに少年は、複雑な思いを抱きつつも、微笑み、誓いの言葉を口にする。

「うん。大丈夫。神楽、僕が君を、独りにしない」

少女が満面の笑みで頷くと、院長室についた。

「さあ、勝負だよ」

猫が檄を飛ばし、少女が扉を開く。

バン。

「　　つぐ、ゝ、あ……っ」

部屋の中には、紅蓮に身を焼かれる総一郎ではなく、火薬の香りと、硝煙と、ドアのすぐ隣の壁に背中からぶつかる黒髪の美女があった。

「え……クレアさん!？」

「こ、の……」

左腕でわき腹を押さえ、口元から一筋の血を流しながら、クレアは少年には構わず、ピストルを構える総一郎に向かって右腕を突き出そうとする。

しかし。

「これが、私の切り札だ」

総一郎はピストルを捨て、スーツの内ポケットから四角いカード
タリスマン　を取り出す。

総一郎もまた、口元から血を流しながら、狂気の笑みを浮かべる。
「まずい!!」

猫が叫び、少女がすぐに反応する。

「黒」を？

いや、間に合わない!!

咄嗟に、少女は少年を突き飛ばす。

「なっ　　神楽っ!!」

「さあ、世界を見せろ、TYPE　FIRST!!」

そして、壁にもたれるクレアと、ドアの前で少年を突き飛ばした
ままの格好の少女を、一瞬白い光が包み込み

究極の色が炸裂した。

魔術師
「もう止まらない」

The Magician's Side

七、

「勝った」

口元の血をふき取り、ずれた眼鏡をかけなおし、霧玄総一郎は床に伏せる三人を見やる。

[illegible]

狂ったように笑い出し、一条神樂に向かって歩き出す。すると、その前に黒い猫が割り込んできた。

「む？ 貴様、何ものだ？」

猫はジ、ジ、と揺らぎながら答える。

「僕は、抑止力」

抑止力という単語を聞いて、とっさに身構える総一郎だが、すぐに警戒を解く。

「くく、抑止力？ 成程、一条神楽の使い魔として顕現しているのか。だが、一条神楽の意識のない今、貴様では私を止められん」「別に、止めるつもりもないし、止められるとも思っていないよ」「なに？」

余裕な猫に、何か危機を感じ、総一郎は数歩引く。

そんな総一郎に、猫はにんまりと笑って言う。

「ただ、忠告しておこうと思ってね」

「忠告？」

「そう。君では、彼女を利用できない」

「何だと？」

しかし、そういうと猫はそのまま黒に霧散していった。

「私では、一条神楽を利用できない、だと？ ふっ、くだらん。例えそうだとしても、私はもう、止まらない」

総一郎は歩む向きを変え、スーツに身を包む美女の方へと歩く。クレアは左腕で脇腹の出血を抑えながら、視線は虚空で焦点を結んでいる。

「ローゼンクロイツ……君ほどの魔術師ならば、すぐにTYPE FIRSTを処理できるだろう。幸いここは病院だ。帰って来られたら、治療してもらうといい」

そう言う男の瞳には、若干の暖かさが映っていた。

「君は私の同士。かつて、共に希代の魔術師と呼ばれた研究仲間だ。やはり、古い友人を亡くすのは、惜しい。君のことだ。そうしている今も、すでにTYPE FIRSTとの接触を処理し始めているのだろう？」

そこまで言うとは、総一郎は瞳の温かさを消し、強い意志のこもった瞳でクレアを見つめる。

「悪いが、私はもう行く。誓いを果たしに。新たな治世を始めるために。平和を、顕現する為に。君が起きる頃には、恐らく全てに方がついているだろう」

総一郎は一条神楽の前まで歩を進め、少女を見下ろす。

「因果なものだ。だが、ある意味では必然だ。彼女がTYPE FIRSTであった以上、君がTYPE SECONDに相応しい。君には申し訳ないと思うが、私の誓いの為の、人柱になつてもらう、万能の体現者」

意識のない少女を抱え上げ、出口に向かおうとすると、声を掛けられた。

「ま、ま、て……」

振り返れば、無様に床を這う少年がいた。

自分の計画を失敗に終わらせた憎き少年。

全くの魔術初心者にも関わらず、自分の三年かけて完成させた魔術を破った少年。

「ほう……君も、TYPE FIRSTの片鱗に触れたはずだ。

確かに、神楽君が君を直撃からは守ったが、それで助かるほど生易しいものではないはずだが」

TYPE FIRSTとの接触。それは世界との接触。

それを受けて、意識を保っていられるはずがない。

事実、直撃とそうでないとの違いがあるにしても、一条神楽と、熟練の魔術師であるローゼンクロイツは意識を失っている。

一般人である少年に、意識があるとは思えない。

総一郎は、この少年に興味が沸いて、少年に近寄った。

「……、……、……、……、」

しかし、少年は苦しげに声にならないうめき声を上げるだけだ。

先程のように、言葉を発することはない。

総一郎は、ふっ、と嗤う。

「まあ、所詮はその程度だ。だが、意識があることは賞賛に値する。聞こえるかね？」

総一郎は少年の前に屈みこみ、少年の髪を掴んで頭を上げさせ、目の前で話しかける。

少年の瞳は、虚空で焦点を結んでおり、総一郎を見ていない。

総一郎は口元を片方だけ釣り上げ、軽く嗤う。

「つらいかね？ つらいだろう。世界が世界でなくなっているだろう？ 私が見えるかね？ いや、私が私で見えるかね？ うん？

言葉が言葉で聞こえるかね？ 何もかもが、正しく認識できないだろう？ 全てが、より超越したものとして認識してしまうだろう？

まあ、この言葉すらも君には聞こえていないだろうな。聞こえていたとしても、何を言っているのか分かるまい」

くつくつと総一郎は喉を鳴らして嗤う。

「君の大切な神楽君は、私がもらう。君はそこで、世界と格闘していればいい。ははは。さて。私はもう行くよ。残念ながら、時間がない。……そうだ、これをあげよう」

そう言つて、総一郎は少年にピストルを握らせる。

「分かるかね？ 拳銃だ。まだ何発も弾は残っている。あまりにもつらくて、耐えられなくなったらそれで楽になるといい。君の才能に対する、私なりの敬意だよ。はははははは、はは、ははははははははははははっ！ 実を言つとね。今すぐ殺したくて殺したくて仕方がなかったんだ。だがね、気が変わったよ。私の全てを、全くの素人がぶち壊した。そんな君がどこまで出来るか」

こは。

「……如何。やはり、この身体はもう魔術の行使に耐えられない、か」

口元の血を拭い、少女を抱え、今度こそ部屋を出ようとす。

「、、、、神楽、、、、殺、、、、たら、、、、許さ、、、、な、い、、、、」

「なに？」

再び言葉を発した少年に、総一郎は驚愕しながらも振り返る。相変わらず床に伏し、瞳は虚空で焦点を結んでいる。だが、必至に何か、言葉を発している。

「、、、神楽、、、、殺、、、、たら、、許さない」

総一郎は嗤い出す。

「なに？ 『神楽を殺したら許さない』？ ははは。安心したまえ、

私は神楽君を殺しはしない。大切な鍵だからな。はっははははははははっ！！！」

そうして、今度こそ病室のドアを大きく開き、一歩踏み出す。その時。

「神楽に殺されたら、許さない」

はつきりと、少年の声で、そう聞こえた。

「なに？ どういう　っ！？」

総一郎が振り返ると、一瞬ではあるが、少年の瞳が、総一郎を射抜いていた。

前身が硬直する。

霧玄総一郎は、その瞬間、恐怖したのだ。

そして、少年は瞳を閉じて、意識を失った。

暫く立ち尽くすのみであった総一郎は、はっと我に帰ると、驚愕、恐怖を吹き飛ばすかのように盛大に嗤い出す。

狂ったように嗤い、そして、今度こそ少女を抱えて病室を去る。

「殺されたら許さない、か……ならば、少年。その前に、君が私を、

殺してくれ」

最後に一言、そう、言い残して。

Interlude 「神域研究機関」

過去 The Magicians' Side

Interlude

魔術結社「薔薇十字」、総合研究棟、第七研究室「神域研究機関」。

活動内容 「集合無意識の研究」。

主任 秘密結社「薔薇十字」総帥 クレア「カータレット」ローゼンクロイツ。

副主任 霧玄総一郎。

その他研究員十六名。

人間の無意識が集合し、世界を形成していると思われる神の領域を探っていた。

「また……失敗か」

ディスプレイを眺めていた男が一人つぶやく。

ディスプレイには、ベッドに括り付けられた死体が映っている。

死体は体中が焼け焦げ、頭部が部屋一面に弾け飛んでいる。

今回は一体何が失敗要因なのか……。

男は画面を巻き戻し、再生する。

画面にはベッドに括り付けられた男が映っている。目を閉じて、意識はない。

この男も、眠るまでは随分と喧しかったものだ。

画面に映っている男は先日国内で逮捕された連続殺人犯だ。刑が重すぎるか、死刑となるものが、ここに運び込まれる。

検体として。

大規模な魔術結社は、国家に対して大きな権力を持っている。魔術の隠蔽と、魔術による犯罪の解決　尤も、問題を起こした魔術師を殺害するだけのことだが　を引き受ける代わりとして。

今回の男もその一つで、国が逮捕し重罪を科した男を、「薔薇十字」が検体として要求し国が呑んだ。

画面には男一人しか映っていないが、実際には男のベッドの左右にもベッドがあり、そこにも検体が眠っている。さらにその横にも検体が眠っており、さらにその横にも。皆、重罪を科され、遂には検体として送り込まれた者である。

これが魔術師としての正規の検体の入手方法であり、魔術結社の規模が大きくなればなるほど、検体を入手しやすくなる。

男は今、ベッドに括り付けられて悪夢を見ている。

「夢の夢が無意識領域である」という仮定の下、検体に「夢の夢」を見せる。但し、「夢にしていることを自覚しながら夢を見る」ことが重要なのであって、殆どの検体は、夢の中で夢を見ているにもかかわらず、自分のおかれている状況を「夢」と判断できずに、一般的な夢の領域を現実と思い、そこで夢を見ている。

だが、それでは「集合無意識」には到達できない。大切なのは、「夢」と自覚した領域内で「夢」を見ることがあるからだ。

そして、条件を充たした者が、「集合無意識」への扉の前に立つ。それを観測するのが、この第七研究室「神域研究機関」の目的である。

主任のローゼンクロイツが魔術儀礼全般を、精神魔術の権威である副主任の総一郎が検体を夢へといざない、その様子を観測するこ

とを可能にする。

画面の中で、男のベッドに赤い魔術陣が浮かぶ。それが、「集合無意識」到達の合図。

研究員たちと、ローゼンクロイツが魔術を行使する。

赤い魔術陣が、歯車のように回転し、それに伴って男の身体が発光し始める。

この時点ですでに失敗していたのだ……

男の身体が発光して見えるのは、魔術師でもないのに膨大な魔術を体中に流されることによるショートだ。

強力な魔術回路を持つものでなければ、耐えられるはずもない量の魔術を一齐に流し込まれ、そしてそれを強制的に行使させられることに身体は耐えられない。

体内をめぐる魔力量が限界を突破し、ショートが起こる。

それでも術式は続行する。チャンスは一度きりだからだ。

赤い魔術陣が男の頭部を中心に、より回転を早める。

男の身体がびくびくと飛び跳ね、身体は焼け始める。

赤い魔術陣の光が最高潮まで達し、画面が赤の極光に塗り替えられる。

「く……失敗だね。離れて」

ローゼンクロイツの凜とした声が聞こえ、研究員たちが後ずさるのが衣擦れの音で分かる。

そして、気味の悪い爆発音が響く。

画面から赤い魔術陣が消えると、しかし部屋一面が真っ赤に染まっていた。

三十八番目の検体の頭部が破裂したのであった。

「やはり、こんな出来損ないでは『集合無意識』には到達できない

……か」

画面を止めて、眼鏡を掛けなおすと、後ろから声を掛けられる。

「総一郎、また見ていたのかい。ううむ、まあ、その男のことは残念だったね」

「ローゼンクロイツか。全く、思ってもないことを言うものではないな。君だって、この男が死んだことには何も負い目を感じてはいないのだろう」

総一郎が皮肉っぽく口端を釣り上げて振り返る。

彼の後ろに立っていたスーツ姿の美女は、そんな皮肉に対しても、くくく、と笑う。

「まあね。だって、どうせその男は死ぬ運命だったのだし、人を殺しているのだからね。殺したら、殺されるのが当然の摂理さ」

「全く持ってその通りだ。つまりは、私も君も、殺されるのが当然だな」

「貴方はいつも面白いことを言う。そんな覚悟なくして魔術師なんてできやしないさ」

「ふむ……確かにその通りだ。しかし……」

総一郎は悲惨な光景を映したまま止まっている画面を見やる。

「もつといい検体は用意できないのか？ これでは何人使っても成功しない」

「確かにその通りだけど……犯罪者に魔術的にポテンシャルの高い人間はなかなかいないからね。魔術的にハイポテンシャルな人間は意志の強い人間だから、人を殺すようになることは少ないし、殺しても魔術師に拾われて魔術師になったりするからね」

「む……確かにその通りだが」

「それに、ただ魔術が使えるればいいってわけではなさそうだしね」

「『粛清』か……」

「そうさ。適性がなければ、『集合無意識』に近づいただけで『粛清』されてしまう。この問題がある」

立ち疲れたのか、ローゼンクロイツは近くのソファに座る。

そのまま脱力し、投げやりに言う。

「ま、アタリを引くまで待つしかないのかな」

総一郎は、お気楽な主任を呆れながら、しかし、その心のゆとりに感心しながらも眺めるのだった。

そもそも、この第七研究室は必要に迫られた研究をしているわけではない。集合無意識の観測が目的であって、その利用は目的ではないためだ。

集合無意識は魔術師にとって到達すべき極地の一つではあるが、それに干渉することは禁忌中の禁忌とされている。不用意な世界の改変は、世界の崩壊をもたらすからだ。

集合無意識からの世界の改変は、「人間」という「地球」なる限定空間における霊長の集合意思による無理やりな世界改変である。

「地球」そのものにも意思はあり、状態を一定に保つための抑止力が働いている。「地球」という世界からの抑止力と、「人間」という集合意志からの改変との衝突が、歪みを生むと考えられている。

それ故に、集合無意識の研究は禁忌であり、それを使用することは即ち「世界」からの抑止を受けるということでもある。

故に、正攻法で集合無意識に挑んでも、「世界」に粛清されるだけだ。第七研究室は可能な限り「世界」からの粛清を回避できる方法で集合無意識に挑んでいる。

即ち……一個人を深層無意識領域に落とし、そこから全体にアクセスする。

「ところで総一郎。優希君と詩帆君は元気かい？」

ソファに身をもたれながら、クレアが問うた。

「ああ、元気だ。まあ、詩帆は少々元気すぎるくらいだな」

普段の硬い表情からは想像できないような柔らかい表情で総一郎が苦笑する。クレアはそれを見て、自分の頬も綻んでいることを感じながら、時折父性を見せる同僚をからかう。

「総一郎……貴方は優希君と詩帆君のことになると優しい顔になるね。自覚しているかい？」

「そうか？ ふ……まあ、そうかも知れんな。なに、気になるならまた遊びに来れば良い。茶ぐらいなら出す。優希と詩帆も喜ぶからな」

「そうさせてもらうよ。優希君は綺麗だし、詩帆君は可愛いし」

思えば、こうして総一郎となんでもない様な会話をしたのは久しぶりかもしれない、とクレアは思った。

自分と総一郎は古くからの付き合いだ。魔術的なポテンシャルも、戦闘力も、権力すらも自分の方が遥かに優れている。総一郎も希代の魔術師と呼ばれるが、彼は精神魔術一点に関する天才であり、自分はそつなく全ての魔術をこなす天才である。それでも総一郎が自分を傍で見守り続けたのは、先代 私の両親 への忠義だろうか。ともあれ、天才として孤立しがちだった自分が、「薔薇十字」の総帥として認められたのも、結社内の魔術師たちに「姫様」などと呼ばれるようになったのも、一重に彼のお陰であると言えるよう。

私は彼を、師として、友として、最も信頼していた。

彼の妻は私によくしてくれるし、彼の幼い娘は私を慕ってくれている。一言で言えば、私は彼らが好きだった。

そんなのどかな雰囲気の研究室に、荒々しい足音が聞こえた。

ドアがものすごい勢いで開け放たれ、スーツ姿の若い男が飛び込んできた。第七研究室の同胞で、総一郎の子飼いの魔術師だ。顔を真っ青にして、息も上がっている。ここまで全力で走ってきたのだろうが、今にも倒れそうなほど疲労困憊しているのが見て取れるが、それに構わず男は叫んだ。

「博士！！」

博士　そう呼ばれて、総一郎は何事かと眉をひそめる。

「博士のご家族が」

I n t e r l u d e o u t

不思議の国 「チエシヤ猫」

不思議の国

The Heroine's Side

一、

目が覚める。

少女は、芝生の上で寝ていた。

「ここは……どこ？」

確か……そう、確か……

「病院で、命刻をかばって……」

……もしかして、ここは死後の世界？

洒落にならない。折角、「夢」から現実に戻れたのに。

折角、また命刻に会えたのに。

「猫？　ねえ、猫、いないの？」

あの奇妙な「夢」で出会い、それからずっと当然のように自分の傍にいた黒猫を呼ぶ。しかし、いつもはすぐに現れるあのにんまり顔は見当たらない。

「猫も、いないか　ふう」

大きいため息をついて少女は芝生に大の字になって倒れる。

「どうしよう」

全く訳の分からない状況に、少女は脱力して空を見上げる。空は青く澄み渡っていて、とても美しい。流れる雲も、都会のそれとは違って真っ白で、空の青と合わせて美しい。

「命刻は、助かったのかな？」

これからどうしようか。呆然と、只そう考えていた少女の視界を、白い何かが駆け抜けた。

瞬間、少女は起き上がる。そして、周囲を見渡し、先ほど視界の端を駆け抜けた白い何かを探す。「白い何か」はすぐに見つかった。少女から見て少し先を、白いウサギが疾走している。タキシードを着たシロウサギ。

「あれって……」

奇妙な「夢」の中で、自分が追いかけたシロウサギ。ただ、特徴は似ているが、少女が追ったシロウサギではない。もっと可愛らしく……そう、まさに童話に出てくる白ウサギだ。金の懐中時計をせわしなく眺めながら、疾走している。

「遅れる！ 遅れる！ 大変だ！ 大変だ！ 女王陛下に首を切り落とされてしまう！」

喋るウサギ。「夢」の中でも、あのウサギには酷い目に合わされた。このウサギだって、あからさまに怪しい。そもそも、何も分らないこの状況で、訳の分からないウサギを追うと言うのは危険すぎる。何かがあるか分からない。ともすれば、また「集合無意識」とやらに飛ばされて、酷い目にあうかもしれない。状況がある程度理解できるまでは動かないのが得策だし、誰かに頼るにしても、もう少し話のできそうな人に頼るのが普通だ。

故に、普段の少女であれば、あのウサギを無視していただろう。しかし、少女はすぐさま立ち上がり、ウサギを追って疾走した。

あの白ウサギに、見てはいけない面影を見たから。

白ウサギはどんどん駆けていく。芝を越え、森の中を駆けていく。少女もそれを追って駆けていく。

大きな木の前に差し掛かったとき、不意に白ウサギが消えた。

「あれ……」

どこへ消えたのか。その答えはすぐに見つかる。

少女の目の前、一際大きい木の根元に大きな穴が開いている。穴は暗く底は見えない。穴の入り口は、白ウサギは勿論少女だって入

れるだけの大きさがある。暗く深い穴の底から、白ウサギの声が聞こえてくる。

「遅れる！ 遅れる！ 大切な裁判に遅れてしまう！」

間違いない。白ウサギはこの穴に飛び込んだ。
ならば。

少女はためらい無く、その穴に身を投じた。

落ちる。落ちる。ひたすらに、落ちていく。際限なく、落ちていく。

少女の服は、いつのまにか入院服から青のエプロンドレスに変わっており、そのスカートがパラシートのように広がって、ゆつたりと落下している。

「そう言えば、本当の『不思議の国のアリス』ってこんな感じだったわよね」

白ウサギを見つけ、ウサギの穴に身を投じる。穴はひたすらに深く、ゆつたりと落ちていく。落ちた先が不思議の国だ。

自分の状況がまさにそれだと気づき、少女はこの先に「不思議の国」でもあるのだろうかと考えていた。

そもそも、ここはどこなのだろう。

この先が不思議の国だとして、それはよしとしよう。問題は、白ウサギを見つけたあの場所だ。自分は、病院にいたはずなのだ。

最もそれらしい答えと言えば、やはりここは夢だという結論だろうか。ただ、猫が見当たらないのが気にかかる。あの猫は、夢にも夢の夢にも、集合無意識にも、そして命刻のいる現実にも現れた。その猫がいないのが、不思議で仕方ない。

そんなことを考えながら、少女はいつ終わるとも知れない穴をゆつたりと落ちていく。

真つ暗な穴を落ちながら、少女は不意に声を掛けられた。

「こんにちは、お嬢さん」

少女の隣に、にんまりと笑った黄色い瞳と、三日月のように裂けた口が漂っていた。

「猫？」

いや、あの猫ではない。自分の猫ではない。シュレーディンガーの猫ではない。隣に漂っているにんまり顔は、間違いなく猫だが、黄色に黒の縞模様が入った、少女の知らない猫だった。

「猫？ そう、俺は猫だ。あんたと会おうのは初めてだがね」

猫はにんまりと笑いながら、首を伸ばして顔を少女に近づける。とつさに少女が顔を引くと、猫は笑いながら姿を消す。そう思うと今度は反対側から声がかかる。

「俺はチェシヤ猫。あんたはアリスだな？」

「いいえ、私は」

チェシヤ猫と名乗った猫はまた姿を消して、今度は少女の正面に現れる。自己紹介をしようとした少女の言葉をさえぎって、好き勝手に質問を浴びせる。

「あんたはどうしてこんなところにいるんだ？」

そして消える。

「いや、どうやってここまで入ってきた？」

また現れる。

「いやいや、それ以前に、何が楽しくてそんなふわふわゆったりと落ちているんだ？」

また消える。

「さつきから、俺のいる方向をきよろきよろきよろ見回して疲れないのか？」

そしてまた現れる。

「全くもって馬鹿みたいだぞ？」

そしてまた消える。

「おっと、そう言えば……初めまして。これが最初にあるべきだつたな」

現れる。

「まあ、さつきから金魚のように口をぱくぱくさせながら俺を見ているあんたも十分無礼だがね」

そしてまた、にんまりと笑みを浮かべて消え、今度は少女の目の前に現れる。

「なあ、何か言ったらどうなんだ？」

そう言われても、猫の質問が多すぎて少女は何から答えていいかわからない。加えて、猫が消えたり現れたりしながら四方から問いかけてくるものだから、少女は尋問されているようで、頭にくる傍ら萎縮してしまっていた。

「あ……あの……チエシヤ猫さん？」

「何だねアリス？」

チエシヤ猫はにかつと笑って少女の顔にその笑みを近づける。少女はできる限りその笑みから顔をそらす。が、チエシヤ猫はすぐに消えて、顔をそらした方向に現れる。少女は諦めてため息をつき、問う。

「ここは、どこ？」

「何を馬鹿なことを言っている？ 穴に決まっているだろう。若しくは闇。何も見えないだろう？ 俺以外」

チエシヤ猫は相変わらずにやにやしながら出たり消えたりを繰り返している。

「そんなことは分かっているわ。どこまで落ちるのは気になるけど……」

「落ちる？ 落ちるだって？」

チエシヤ猫が意外そうな顔をして消える。次の瞬間にはまた少女の隣に現れるのだが。

「落ちているじゃない」

「本当に？」

チエシヤ猫は出たり消えたりを繰り返して、また四方八方から少女に問いかけ始める。

「実は止まっているかもしれないぞ？ 比較するものが見えないのにどうして落ちているなんて分かるんだ？」

消える。

「だって、スカートが膨らんでいるじゃない？」
現れる。

「だったら、上に向かって浮いていつているのかもしれないぞ？」
消える。

「そんなこと無いわよ。だって私、最初に穴に落ちたんだもの」
現れる。

「落ちたと思った瞬間から昇り始めていたのかもしれない」
消える。

「スカートが膨らんでいるのだって、下から風が吹いているからかもしれない」

現れる。

「じゃあ、昇っているの？」

少女の目の前に現れる。

「いいや、落ちてる」

「やっぱり落ちているんじゃない」

「そうだな。それで、どうしてあんたはこんなところを落下しているんだ？ それもそんなにふわふわゆっくりと」

そもそも、話の腰を折ったのはお前だ、と思いつつ、少女は考える。チエシヤ猫は出たり消えたりするのに飽きたらしく、今度は少女の傍に頭だけ出してふわふわ浮いている いや、少女と一緒に落下している。猫の生首だけが宙に浮いていると言うのはどうにも気味が悪い。その猫がにんまりと笑っているとなればなおさらだ。

「うーん……やっぱり分からないわ」

「なんだ。それじゃあ何も考えずにこの穴に飛び込んだのか？」

「いいえ。この穴に飛び込んだのは、白ウサギを追いかけていたか

ら」

「理由があるじゃないか」

「でも、この世界が何なのかは分からないの」

「知らない方がいい」

チエシヤ猫はぴしゃりとそう言った。

「え？」

「今は、な。すぐに分かる」

「遅れる！ 遅れる！ 大切な裁判に遅れてしまう！ 陛下に首を刎ねられる！」

少女がチエシヤ猫の言葉に困惑していると、下からにぎやかな白ウサギの声が聞こえてきた。

「おっと。そろそろ地面だ。じゃあな」

そう言つて、すうと消えていくチエシヤ猫に、少女は問いかける。
「待つて！ さっきのはどういう意味？ 私はこれからどうしたらいいの？」

「なるようになるさ」

そう言つてチエシヤ猫が消える。下が少しずつ明るくなってくる。
「そうだ。教えておいてやるが、地面についたらすぐ裁判だ。俺は寄り道してから行くが……後で会えるといいな」

また突然現れたチエシヤ猫が、思い出したようにそう言つてまた消えていった。

足元はすっかり明るくなって、クッションのように柔らかそうな大きいキノコが生えているのが見える。穴に落ちてから、スカートがパラシートのようになっていたとはいっても、信じられないくらいゆったりと落ちてきたから大丈夫だとは思うが、あのキノコの上に着地すれば怪我することはないだろう。

気になることはたくさんある。ここは何処なのだろうか？ 裁判とは何なのだろうか？ 命刻は無事なのだろうか？ 先ほど白ウサギに見てしまったあの懐かしい面影は？

気は進まない。心の奥深くで、行つてはいけなとけたたましく警鐘が鳴っている。行けば、自分と言う存在が崩壊すると。しかしそれ以上に、自分が前に進むために必要な何かが待っているような、そんな気がする。止まった時間、欠けたピース、自分の深淵に嚴重に鍵をかけてしまった何かが、激しく扉を打っている。

白ウサギにあの面影を見たときから、私の何かが暴れているから。

それはきつと、あの面影の。
三年前の、あの記憶。

そうして少女は、ゆつたりと、その大法廷に降り立った。

「裁判を始める！」

凜とした女性の声が響き、白ウサギがラッパを三度吹き鳴らす。そして、手に持った書簡を広げ、高らかに声を張り上げる。

「被告人、アリス！」

Interlude 「誓い」

過去 The Magician's Side

Interlude

雨。

すでに夜の帳は降り、グレーの空とアスファルト。陰鬱とした世界を、一台の車が走る。

若い男が蒼白な面持ちでハンドルを握り、その後ろに白衣の男と黒衣の女が座っている。男は瞳を閉じて黙っている。

「お二人は、お買い物の途中だったのだと……。そこに、酩酊した車が……」

「それで……優希君と詩帆君は」

「……」

「どうなんだい？」

「優希さんは、意識不明です。今、集中治療室に……。詩帆さんは……」

「詩帆は、どうなんだね？」

「……詩帆さんは……亡くなれました」

白衣の男は静かに瞳を閉じたまま、黒衣の女は暫し呆然としていた。

「……そうか」

陰鬱とした世界を、車は走る。

「博士、こちらです」

車を病院の入り口に乗り捨てて、若い男を先頭に三人は院内に駆

け込んだ。看護師が駆け寄ってくるが、若い男が事情を説明すると、看護師は治療室の場所を教えていった。

日の沈んだ病院に人気は少なく、彼らの行く手を邪魔する者はない。

治療室に着き、総一郎が近くの看護師を捕まえる。

「霧玄優希と詩帆の身内なのですが、二人は」

「霧玄優希さんは、今その集中治療室で治療を受けています。…

…詩帆さんは、残念ながら亡くなりました」

「……そうですか。治療室に入れてもらえますか」

「分かりました。ガラス越しですが……その先は滅菌してありますので」

「分かりました。入れてください」

治療室に入ると、ガラスの向こうにベッドに横たわる二人の姿があった。

一人は少女。これといって外傷は見受けられず、ただ、ベッドに横たわっている。

「優希さんは詩帆さんを強く抱きしめていました」

「そうですか」

もう一人は女性。様々な救命装置が装着され、大勢の医師たちに囲まれている。

医師の一人が治療室に入ってきた三人を見て、何事か大きく口を開けて女性に語りかけた。大方、「ご家族がいらっしやいましたよ！」などと言ったのだろう。

「……優希も、もう直だな」

女性を見て、総一郎がぼつりと漏らした。

「博士、そんな……」

「いや、分かるよ、私にもね。優希君からは生気が流れ出ている。

残念だけれど、もう」

「姫様！」

「いや、本当のことだ」

総一郎のその一言で、三人はまた沈黙した。

（総一郎さん？）

唐突に、総一郎の脳裏にそんな言葉が響いた。

（総一郎さんでしょうか？）

総一郎の脳に響く声は間違いなく今治療を受けている妻の声。

念話か。

念話。魔術を用いた簡単な情報通信。初歩の魔術。

（ああ、私だ）

（よかった。間に合って）

女性の声に安堵が混じる。しかし、総一郎の表情は険しくなった。

（馬鹿者。話すな）

そうだ。女性は今、生死を彷徨っているのだ。念話が初歩の簡単な魔術と言っても、死に体の身体には負担が大きい。

故に、総一郎の声音は厳しかったが、女性は苦しそうに笑って一蹴した。

（私だって、自分のことくらい分かります。簡単な魔術は貴方が教えてくれたじゃありませんか。もう、もちません。そうでしょうか？）
（……そうだ）

総一郎は妻に初歩魔術を教えたことを悔いた。

しかしすぐに、教えていて良かったとも思った。この状態では妻はまず助からない。ならば、最後に会話が出来るとは良いことではないか。……それが残り少ない妻の命を削ることであっても。総一郎は困惑した。

（こうして最後にお話できるのであります。感謝しています）
総一郎の困惑を知ってか、女性はそう言った。

（それで……詩帆は無事ですか？）

総一郎はどきりとして、外傷が無く眠っているような　しかしもう目覚めることの無い　娘に目をやった。

そう、外傷はない。医師は、妻が抱いていたと言った。恐らく、必至に庇ったのだろう。それでも、小さいその命を守ることは出来なかった。

（　ああ。優希のお陰だ。いくらか怪我をしているが、すぐよくなるだろう）

（ああ。良かった。詩帆だけは、と必至でした）
安心したのだろうか、女性は笑う。

総一郎は必至に感情を押し殺した。念話には身体の状態ではなく、精神の状態が声音となって表れる。

女性の様態が悪くなっただのだろうか、医師たちが一層慌しく動き出した。

（ああ、私がついていれば）

（常に一緒にいることなんて出来ませんよ。それに……この事故は仕方の無いことです）

（仕方の無いことであるものか。運転手は酒を飲んでいたと言う）
（でも、予測できることはありませんもの。……皆がルールを守ってくれるしかありませんよ）

女性は冗談のように、小さく笑いながら言った。

（ああ、そうでした。言っておかなければならないことが……）

（なんだね？）

（神様の研究、がんばってくださいね）

神様の研究。ああ、集合無意識のことか。そう言えば、いつも「神様の研究」と言っていたな。

（ああ）

（でも……成功しても、私たちを生き返らせようだなんて考えない
てくださいね）

(……)

「私たち」か。やはり嘘はつけないか……。

(ああ。ルール違反はよくないからな)

(そうです。神様がルールを破ったらいけません)

女性の声が掠れてきていた。

ああ、もう限界か。

総一郎は、様々な感情を胸中でこった返しにしながら、妻との会話を反芻していた。

(皆がルールを守ってくれば、か)

(無理な話ですよ。でも、そうなったらどんなに素晴らしいでしょうね)

女性は笑っていた。たわいの無い冗談のように。

(ああ、もう限界のようです)

女性の声はもうほとんど聞き取れない。

(そうか)

(今まで、十分に幸せでした)

(……私もだ)

(くす。ありがとうございました。では、一足お先に……)

かすかに聞き取れた、どこかに出かけるかのような軽い別れの文句に、総一郎は笑い返した。

(本当に、ありがとうございました。さようなら)

本当に最後の別れの言葉。それをしっかりと聞き届け、総一郎は

天井を仰いだ。

熱い雫が頬を伝った。

「ああ、詩帆、優希。私は誓うよ」

二週間後。カフェテリア。

「予定通り出発は明日だ。いい加減、詩帆と優希も墓に入れてやりたい」

「はい。しかし、本当によろしいのですか？」

「……クレアのことか？」

「はい。姫様は博士の」

「ああ、仕える主君にして、愛弟子、わが娘の様ですらあり、今は良き友人だ」

「ならば」

「故に、クレアは連れて行かん。それに……あいつは薔薇十字の長だ。兎に角、クレアは連れて行かん」

「はい。失礼しました。では予定通り……」

「ああ。連れて行くのは、君を含めた私の研究室の八人だ。日本についてからのことは、すでに手を打ってある。再三言っているが、強制はしない。気の乗らないものには降りてもらって構わん」

「いえ、皆ついていきます。なにより……今のままでは研究が成功しないことも、皆分かっています」

「ふむ。まあいい。では予定通り。気取られないように」

「はい」

Interlude out

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7955b/>

Blue Rose

2010年10月14日12時36分発行